
剣と魔法と世界と算 【改】

久乃 銀泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と魔法と世界と籌 【改】

【著者名】

久乃 銀泉

【ノード】

N8206V

【あらすじ】

とある少年が、とある異世界にほっぽり出される。そんな少年の手元には、一本の筹。そんなお話。端的に言えば、異世界召還なのです。

・・・注・題名に【改】とありますが、これは小説を区別するための便宜上の記号であり、内容には一切関係ありません。何かしらの続編とかいう訳ではないのであしからず。

第零話 序話発端・ふりかへぐ（前書き）

はるか昔に連載してたとあるファンタジーの改訂版だけど、ほほ
別物なんで。といつあえず題名の【改】は気にしないでください。

第零話 序話発端・ぷるるーぐ

質量を持つかのように広がる闇。手を伸ばせば真っ黒な塊の掴み取れそうな、そんな、漆黒の中。黒き空を伝い、微かな音が聞こえてきた。

「……イヲ、ラムツヤハヒウ……」

囁き声だ。何者かが、この闇を小さく震わせている。

「……イヲフサニコツヌシウイラ、スソ……」

ふわり、と。人が、闇に浮かんだ。どこから光が射したわけではない。ただ黒かった世界に、人の姿が描かれたのだ。

「……イイヲハヤナヨツウイクマケティアササハトシクモナラムキウイイト……」

浮かび上がったのは、青年。長身、かつ金髪。そして彫りの深い顔。赤いマントのような物を全身に被っている。

光が、増した。青年に近い場所から、だんだんと白くなる。白く、白く。

「……イイヲハヒアカイウフネゼ“アルナクス・ラックドルサ・カリナグム・ベンフィード・テリクア”ヒウ」

青年が、初めて言葉を切る。その体から純白が溢れ出た。それは、ただ白く辺りを染めあげてゆく。

白い世界の中で一人、青年は笑みを浮かべていた。

.....

9月の初め、残暑もなりをひそめる午後の9時。夜道を歩く小さな影がひとつあった。街灯に照らされたその影は、見た感じ小学生高学年な少年だ。

「……見ちゃだめ見ちゃだめ見ちゃだめ……」

なにやらぶつぶつ呟いているが、決して不審者ではない。不審だ

が。

この少年、名を把臥之 双羽はがの とわねといふ。少し見られない珍しい名前の持ち主だ。ちなみに現在、すぐ近所のコンビニへのお使いの帰りである。ちなみに住むのも目と鼻の先な住宅地だと、彼の右手にある空き地を風が吹き抜けた。廢材やら何やら放置されている場所特有の、掠れるような風音。ひつ、と小さく悲鳴を上げた少年は思わず振り向き、見てしまった。先より全力で目を逸らしていた、ある物。

「い、いぎやあああああ……！」

置かれている場所特有の掠れるよくな風音

……数ヶ月前よりこの広場に捨てられている、“お化け屋敷の看板”を。オドロオドロしく、を目指してむしろ滑稽な縁の顔を背景に、ペンキを垂らした以外に表現の見つからない赤字の“お化け屋敷”。幼稚園児でも半分は指さして笑いそうな看板を背に、少年は飛び上るようにして全力ダッシュを開始する。

3秒後、曲がり角にて人に激突。前も見ずに走っていたのだから、まあ仕方ないことだが。ここで車に曳かれたり電柱に突つ込まないだけマシだろう。

「……お、お姉ちゃん！」

さらに、どうやらぶつかつた相手の人物、少年の姉だったようだ。歳の頃17、8ぐらいだろうか。髪さえ短ければ男に見えなくもなり、と口が滑れば地獄を見かねない雰囲気をまとっている。そんな彼女は把臥之 朝美^{あさみ}。見ての通りチキンハートな弟とはうつて変わった豪傑な女性である。

「ふええ、怖かつたよー」

「またあの看板？」
双羽、アンタちょっと怖がりすぎでしょ」

■
■
■
L

「意味分かんないわよ」

未だガタガタ震える双羽。確かに夜道といつのは多少なり恐怖の対象ではあるのだが、この反応は少々行き過ぎな気もある。しかも……

「アンタももう中二なんだから。こんなことでいちいち怖がってちやダメよ」

「怖いものは怖いんだもん！」

「んな力説されてもねえ」

……しかもこの双羽という少年、実はもう中学生なのである。それも後半年で卒業、な15歳。少なくとも街灯の立つ夜道を真面目に恐怖する年齢ではないはずだ。しかしその幼い容姿、言動に相まってそれほど違和感が無い、といつのも事実ではあるから問題である。

「さて、双羽もう帰るんでしょ？」

「……え、お姉ちゃんは帰らないの……？」

「アタシは今家出たところよ」

「うう、お姉ちゃん着いてきてくれると思つたのに……」

「すぐそこなんだから、ひとりで帰りなさい」

「……はーい」

こんな姉弟ゆえ仲は良いのだが、姉には姉の用事がある。それに実際家はすぐそこだ。距離にして100メートルも無い。哥ネル弟の背を押し、姉は友人宅へと足を向けた。明日のテストに備えて貸しているプリント類を回収しなくてはならない。絶対必要というわけでもないのだが、直前の見直しには有用なのだ。

テストの範囲やら何やら思い出しながら例の看板の前ほどまで來た朝美だったが、そこでふと双羽が気になつた。振り向くが、もちろん彼の姿はすでに曲がり角の向こう。見えるわけもない。自分の行動に首を傾げつつ、角に背を向けた彼女の視界の外。ちょうど双羽のいるであろう場所を、街灯とは違つ薄い白光が照らした。

第壱話 起床天青・ぬやめてそして

「……ん？」

なんだか、眩しい。確か、部屋のカーテンはいつも閉めてあるはずなのに。姉が起こしに来たのかとも考えたが、今日は休日だ。特に、用事も無いはず。……といつも、昨日家に帰った記憶が無い。よほど疲れていたのか。

そんなことを考えながら目を開けた双羽の、寝起きで霞む視界いっぱいに草原が広がっていた。どうやら木か何かにもたれているらしい。

「え……えーと……？」

状況を整理してみよう。双羽は昨晩、お使いへ行っていた。そして起きたら草のベッドに木の枕、そして澄んだ青空がお出迎え。

「意味分かんないよ……」

多分、ここで意味分かる人間は極希少だろう。

と、混乱しつつも、とりあえず周囲を見渡してみると、

双羽。

「このままばーっとしてもしようがないもんね……」

ふう、と息を吐きつつ、青空を仰ぐ。……太陽が一つ見えた気もするが、まあ気のせいということで一時保留。

そのまま右に視線を落としてみれば、正面と同じく見渡す限りの草原が広がっている。左手には、森。……とおぼしき緑色が広がっていた。いやしかし、樹木というのはあそこまでねじ曲がって生えるものだつただろうか。

よつこらせ、と立ち上がり、持たれていた木の裏手に目を向ける双羽。左手の森はこちらまで続いていた。森の途切れた先にはうつすらと山のようなものが見える。

立ち上がったことで分かつたのだが、どうも自分の着ているものまでなんだかおかしい。残念ながら双羽、こんなゴツゴツした生地

の丈夫そうな服を買つた覚えは無いのだ。まるで眞面目に登山でもするかのような出で立ちではないか。

そうやって服装を確認したところで、ふと気になつて木の裏側をのぞき込んでみる。……木の根本部分に、やたらと力ク力クした黄色い物体がでんと鎮座していた。一昔前のポリゴングラフィックのような、多角形の集合体だ。全体が黄色っぽいが、黒い縞模様が表面に浮き出でている。もう少しょく見よつと双羽が首を伸ばした、そのとき……

「…………ん？」
「…………ガウ？」

黄色の物体と、田があつた。両者、一時停止。後、黄色の物体が動き出す。持ち上がつた“頭”に、黄色い三角ふたつ、赤い逆三角がもうふたつ。反対側からひょろりと飛び出でてきたのは、尻尾だろうか。……このフォルムには、見覚えがある。

「…………虎？」
「ガウウ」

全体に角張つてはいるが、確かにこれは虎だ。全長おおよそメートルくらい。立ち上がつたそれは、四本の足でもつて双羽と同様の高さに頭があつた。

「でつかいね……」

「ガウウウ……」

まるで返事でもするかのように唸る虎。しかし、その声から親しみは感じられない。かといって敵意があるわけでもなく、何というか、これは。

「えつと、…………おなか空いた？」

「ガウ」

肯定にも聞こえる一鳴きの後、虎は無造作に口を開けた。その鋭利な牙を口にし、この異変によつて麻痺していだ双羽の神経がやつとこを復活する。曰く、このままじゃ食われるぞ、と。

「わああつー！」

「ガウ、ガアアツ！」

間一髪、とびのいた双羽の髪を掠める真っ白な刃。それを努めて視界に入れず、双羽は先ほど見た周囲の景色を思い出す。逃げ場は、続く平原か変な森。虎なんでジャングルとかは得意そうだが、まこと残念ながら双羽に平地で野生動物と徒競走するほどの走力は無い。ここは素直に、森へ全力ダッシュ。

「う、うわあああつ！」

「ガウ、ガウウ」

まるでこちらに合わせるような速度で追つてくる角張り虎。どうやら、こちらを完全に“獲物”と認識しているようだ。間違つてはいないが今のところありがたい。本気で追いかけられてしまえば、森へたどり着くことすら夢物語だろう。

「ガウ、ガウウ、ガウガウ」

「わっ、とっ、わわわっ」

こうして、双羽の冒険は命がけの追いかけっこと共に始まったのであった。

……

少しばかりの時を経て、場所はあのとき見えてた森の中。

「えーっと、と、虎さーん……」

「ガウ」

「ぼ、僕を食べてもおいし……くないと、いいなあ

「ガウウ、ガウガウ」

案の定、ねじ曲がった木を背に追いつめられている双羽がいた。一応まだ左右に逃げられないこともないのだが、彼の残り少ない体力がこれ以上の逃走を許さない。そもそもここまで逃げ切れたこと自体わりと奇跡だ。目覚めた場所から見て、この森まではそこそこ距離があつたように思えたのだが。

「ガウ、グルルルル……」

「わ、わわ……」

野生動物にとつて、疲れきった獲物は、「飯」と同義。いただきまーすと歩み寄る虎もどきを相手に、双羽は悟った。

ああ、食われるな、と。

これは子供一人の力で何とかなる状況を遙かに越えている。まだ自分の身に何が起きたのか考へることすらできていないのだが、残念、どうやらこれまでのようだ。

「空でも飛べたらなあ……」

それならば、とりあえずここで食われるという事態だけは回避できそうなもの。まあ、出来もしないことを願つてもしようがない。ため息と共に俯いた双羽は、自分が右手に持つてゐる物体に気づいた。

「ガアアツ！」

同時に、飛びかかってくる虎もどき。反射的に右手の物体を前方へと突き出す双羽。突然の反撃に戸惑つたのか、虎もどきは軌道を変え、襲撃を中断する。おかげで双羽は今自分を僅か延命させた物体を観察することができた。

「……箒？？」

箒だった。どちらかといふと庭掃除とかに使いそうな、魔女とか乗つてそうな、そんな箒。ただ違うのは、全体が金属で構成されていること。先端部分の毛の一本まで滑らかな針金になつていて、あと、箒にしては妙に長い。そして見た目以上に軽い。

そんな銀の箒が、いつの間にか双羽の手の中に出現していた。

「ガウウ……」

のんびりと観察している間に、再び虎もどきが臨戦態勢を取つている。相対する双羽の手には、先述の通り箒が一本。

野生動物を相手取るには少々心もとない武器だが、まあ無いよりもマシだろう。先手必勝とばかり、思い切り箒を振り抜く双羽。もちろん、虎もどきはひょいと軽々避けたわけなのだ。

「……あ、あれ？」

しつかり遠心力を受けた簫は、軌道そのまま、空へと舞い上がったのだ。無論、柄をしつかりと握っていた双羽も一緒に。獲物が急に制空権を脱してしまい、焦った虎もどきの鳴き声が聞こえる。

簫はそのまま上昇を続け、奇形の木々を超えたあたりで停止した。仮に虎もどきが木を上つてきても、ここならば届かない。それを確認したうえで、とりあえず双羽は簫の上へよじ登ることにした。さすがにぶら下がりっぱなしはキツいものがある。

……四苦八苦の末、なんとか簫に跨ることに成功した双羽。本来懸垂の類は苦手なのだが、不思議とこの簫から落ちる気だけはしなかつた。

「……わあ、すつゝい景色……」

どこまでも続く青空と、緑の草原。その境界線には先ほど見た山脈が裾を伸ばしていた。この森は大した広さではないらしく、どちらを見ても似たような景色が続いている。

しばらく雄大な景色を楽しんでいた双羽だったが、ふと思つことがあつた。さつきから足下で吠えてる虎がうるさい、ではなく。

「これからビーしょ」

……景色を眺めることで判明した事実。すなわち、今日中に家へ帰りつける可能性がほぼゼロとなつてしまつたことについて、だ。見た感じ電車が走つてそうな気配は無い。といふか、そもそもここはどこなのだろう。日本にこれだけ広い平野があつたのなら、人口密度なんてそう社会問題にもなつていなければ。ならば、考え得る可能性は一つ。ここは日本ではないどころか別の場所なのか、もしくは夢幻の類か。

「……いでで」

常套手段ということで顔の一部を抓りあげては見たものの、やっぱり痛い。夢の線は無さそうだ。かといって、ここが家から遙か遠いどこかというのも信じがたい話ではある。ワープ航法なり時間移動なりできるようになつた覚えはない。あとそろそろ日の錯覚とも言ひ難いあの太陽、いつから分身の術を修得したのだろう。

結論、なにがどーなったのかさっぱり分からぬ。

「……とりあえず、動こつかな」

「こで悩んでも何かしら解決する見込みは薄そうだ。とにかく動かなければ、比喩表現でなく日が暮れる。

「この箒つて、やっぱり飛べたりするのかな。うーんと、……進め！」

すす、っと、箒は滑るように動き出した。そのまま加速を続け、周囲の景色が流れ始める。異様に安定した重心もあって、念じれば念じただけ箒の速度は上昇していく。……非常に、楽しい。

風の抵抗を避けて伏せ、流れていった景色が溶け始めた頃になって、双羽は前を見ていなかつたことを思い出した。まあこの高さならそうぶつかる物も無……

「う、わあっ！？？」

……間一髪、一本高く伸びた木を避けた双羽。あまり左右に枝を伸ばしていない木で助かつた。

「も、もーちょっとミンチに……」

それはない。

「……ふう、危なかつたー。安全運転、安全運転」

気を取り直し、双羽は景色が認識できる程度の速度で飛ぶことにした。これでも歩くよりは相当早いはずだ。何度か眼下を謎の生命体が通り過ぎてこるので見るに、徒步ならば命の10や20では足りなかつただろう。この箒には感謝感謝である。

流れの景色と生き物を楽しみながら、ゆるり空の旅を続ける双羽。

……この地で初めての出会いがすぐそこにあることに、彼はまだ気づいていなかつた。

第3話 遭遇黒雲・あいはぐらまんど

ただひたすら広がる青い草原、そのど真ん中に、木が一本立っていた。

別に珍しいものではない。この草原では「ぐぐぐ」ありふれた木だ。あたりを見渡せば、所々にぽつんと生えているのが見えるだろう。少々変わった螺旋形状ではあるものの、この種の木ならばこれが普通なのだ。

「フフフ……」

……ただし、なにやら不気味な笑い声さえ聞こえなければ、の話だが。

「……獲物、発見……」

安心してほしい。いくらこの種の木といえど、こんなこと言つてやつは断じて普通ではない。

……もし仮に「」の声に気づいた者がよく見れば、声の主はすぐ見つかっただろう。明らかに違和感満載な黒い物体が、木の中腹に腰掛けている。もう少しよく見れば、それが黒いマントに身を包んだ小柄な人物であることも、はつきりと見て取れるはずだ。

ただし、何も知らない人間がこの光景を見て、何の違和感も感じないだろう。今、黒マントの人物の“影”は極限まで薄くなっている。よく存在感が無くてスルーされがちな人がいるだろう。これは、その極端なものだ。知らぬ人間がちらと見た程度ではもはや認識すらされない。

「……もづちよつと近づいたら、まずあれで仕掛けて……」

……で、何故この黒マントがこんなとこに潜伏しているのかといえば、まあ趣味とかそういう話ではない。有り体に言えば、金を稼ぐためだ。

「」の黒マント、実は旅暮らしである。して、旅するためには金がいる、これ常識。よつて、この場所で金になる“獲物”を待ちかま

えていたわけだ。ただし、その“獲物”は野獸や獸の類ではない。

……人だ。無論普通の人でなく、“来訪者”と呼ばれる者たちではあるが。

来訪者とは、本来“こことは別の世界”からやつてきた者の総称だ。が、そもそも、こことは違う世界なんぞというものの存在を知る者はごく少數。一般に使われる“来訪者”は少々意味合いが違う。そしてその来訪者という言葉がどういう意味か説明するためには何故来訪者が金になるかという話からなのだがそれはとある国が彼らに懸賞金を長くなるので以下略。

初めに戻ろう。つまり、こういう経緯で黒マントはこんなところに潜伏し、飛来する影に歓喜していたわけだ。この辺り一帯は割と危険な野生動物が彷徨いているため、普通の旅人はまず通らない。ただ、この場所は地理的に様々な要所間の近道となっているのだ。そのため、“普通でない”旅人、つまり来訪者がやってくる可能性が高い。そう、黒マントは予想した。そして目論見通り、通常の飛行魔法の限度を超えた速度で飛来する人物を発見することと相成ったのだ。

……もつそろそろ、こちらの射程内である。

「……悪夢・万足よひすみがた」

弦きつつ、右手を空の影へ向ける。特に何かが光るわけでも、飛び出すわけでもない。が、一瞬の後、“見えない何かに反応して”空飛ぶ簾が急停止を掛けるのが見えた。

まずは第一段階、成功である。

……

目覚めた場所を離れ、気まま空の旅を続いている双羽。変わり映えしない景色には流石にそろそろ飽きたため、簾の動かし方をいろいろ試してみる。念じた通り動くというよりは、この簾が体の一部となっているような感覚だ。歩くのにいちいち足の動きを意識

しないのと同じじく、前進を意識すれば何となく前へ進む。まだ多少動きがきこちないのは、さながら付けたばかりの義足の様。多分、慣れればさらに微細な操作が可能になるはずだ。

曲がつてみたり、回つてみたり、横滑りに縦回転、宙返り飛行ぐらいまでは一通り試してみた。現在は後ろ向き飛行の練習中。笄が自動で姿勢の微調整をしてくれるためか、思つていたよりはやりやすい。それでもやっぱり見えない方向に進むのは中々に難しく、集中力がいる。できるだけの高速飛行を頑張つてみたところ、1分ほどで笄がガタガタと揺れ始めた。さて一旦安定させようと前を向いた時、それはそこにあった。

「わわわっ！？！」

反射的に急停止を掛ける。笄の操作を練習しておいて助かつた。そう思いながら顔を上げた双羽は、たつぱり一秒ぽかんと間抜け面をさらすことになる。

まず視界を埋めたのは、真つ赤な鉄板だ。それが節を作つて長く繋がり、地上から双羽のいる程度の高度まで伸びている。節からはそれぞれ一对の中折れ丸太棒。上を見れば、先端には巨大な黄色いハサミが生えている。どこかで見たことのある、このフォルム。もちろん虎じゃない。

「ムカデ……」

そう、ムカデだ。少々大きすぎる気もするが、まあ形状そのまま縮めればそう珍しくない多節のアイツになるだろう。だいたい縮尺にして1：1000といったところか。……やつぱりデカすぎる。

「変な虎もいたし、変なムカデがいたつていいんだけどさ……」

しかし双羽も落ち着いたものだ。先の虎のせいどこか感覚が麻痺しているのかもしぬれない。……そのお陰かどうかは知らないが。

「……あれ？」

双羽は、とある違和感に気づく。これだけ大きければ当然なぎ倒されているであろう、草原の草だ。無論、ムカデの胴体はぽつぽつ生える雑草を横へ押しのけ鎮座している。しかし、当然この巨大生

物が移動したときに残るであろう跡らしきものが、無い。違和感はまだある。さつき双羽は後ろ向きに飛んでいた訳だが、だからといってこの巨体の移動音に気づかないなんてことがあるだろうか。こいつの登場は、いささか突然すぎた氣もある。

「じゃ、確かめよっか」

笄の先をムカデに向け、少し前傾に構える。ムカデはゆっくりと首を伸ばしてきたが、遅い。滑るように飛び出した双羽は、ムカデにぶつかる寸前、笄を横向きにした。そのまま横滑りを応用し、ドリフトよろしくムカデの側面ぎりぎりをかすめ飛ぶ。

もしムカデが“実体であるならば”、真っ赤な甲殻には位置を微調整された笄の先端が激突したはずだ。しかし、笄は止まらない。これで双羽は確信を得る。

お次は真っ正面からの、突撃。結果、双羽は無傷でムカデを貫き、あれだけ存在感を放っていた巨大ムカデはぱっと霧散した。

「やつぱりねー」

ムカデは、幻。疲労が見せたにしてはリアルすぎるあの幻想は、先の虎と同じじくこの場所故のものなのだろうか。

……とりあえず、この場所から離れよう。そう判断した双羽の目に、またも訳の分からぬものが映った。

「あ、蟻……??」

数え切れないほどの、蟻の大群。いつの間にやら完全に包囲されている。しかも先のムカデほどでないにせよ、皆巨大だ。一匹につき車一台分はある。それが“空中から” ワラワラと押し寄せてきた。

「……蟻つて、空飛んだつけ……?」

まあ、普通は飛ばない。がしかし、ここは虎が角張つてたりムカデが消えたりするような場所だ。もう何があつたつておかしくはない。

もちろん、あの蟻もムカデと似たようなものだという可能性はある。あるのだが、それを確かめるためにあのワラワラ集団に突っ込むのはいかがなものか。もし仮に本物だつたりすれば目も当てられ

ない。

ならば逃げるのみだが、180。包囲されているため逃走先は上か下。どちらでもあんまり変わらない。

「んじゃ、木があるし下！」

上へ行つてジリ貧よりも、ちょうど一本ぽつんと生えていた木に活路を見いだす。地面に降りてしまつてはこちらの利点である機動力が損なわれるため、木の中腹めがけて全速力の直滑降。

直後、ちょうど目標としていた地点に、人がいた。現れたのでない、今、いることに初めて気づいたのだ。黒いフード付きマントで頭まですっぽり隠れた、見るからに怪しい人物。

「え、誰？」

「な、なんでこいつち来るの！……呪術・金縛り」

「わっ！？」

びしつという幻聴と共に、突然双羽は停止する。全身の筋肉が、見えない力に押さえ込まれたような感覚。体の自由がきかない。

……が、停止したのは双羽だけであった。籌は、止まらない。

「え、ちょ、なんで止まらないの……！？」

「いや、そんなこと言われても」

予想外の事態だったのか、固まる黒マント。そしてそもそも動けない双羽。そのまますっ飛ぶ筹。

なんだかぐぐっと体感時間が引き延ばされて、相手の姿とか色々とよく見える。マントの影からちらと顔が見え、ああ、女の子だったんだ、ということに気づく。

……数瞬後、両者は正面から激突したのであった。

第参話 何故召還・ひとのあらまじ

遙か深い暗闇から、意識が立ち上ってくる。何か夢を見ていた気がするが、いまいち思い出せない。

薄く目を開ける。瞬間、目を射た光によって視界が真っ白に染まつた。思わず目を瞑つたあたりで、何故自分がこんな風に微睡まどろみんでいるのかを**朧氣**と思い出す。

確かに自分は、路銀を稼ごうと“来訪者”を待ち伏せしていたはずだ。でも、うまく遭遇できた。そこで攻撃を仕掛けたは良かったが、何故か相手はこちりに突っ込んでいた。止めようとしたがどうしてか相手は止まらず、やむなく正面衝突。それでもって意識がフェードアウトして……

……寝ている場合ではない。急いで起きなければ！

「ふきやつーー！」

「…………い、痛い…………」

寝ていた体を慌てて引き起こした瞬間、自分をのぞき込んでいた顔と激突。勢い余つて相手は草むらの向こうへ転がつていった。こちらもジンジンする額を押さえてしまう羽田となる。なんとも今日はよくぶつかる日だ。

「…………じゃなくて、あいつはどこの…………？」

いひらから攻撃を仕掛けた来訪者が、近くにいるはず。しかし、周囲にそれらしい姿は無い。…………と、いうことは。

「いたた…………そんな急に立ち上がるなんてさ…………」

今さつき転がつていつた人物がそうに違いない。敵意とかそういうものは微塵も感じられなかつたが、とりあえず戦闘体勢をとる。のそのそと起きあがつた相手は、そんないひらを見て田を丸くした。一体何を驚いているのだろう。

「えーと…………」「めんなさい？」

「…………は？」

なにゆえ、ここで“ごめんなさい”なのか。一瞬こちらを油断させる手かとも思つたが、それならもつとやり方があるだろ？。それに、今相対するこの幼い人物にそういうた雰囲気は無い。そもそもこちらより先に起きていたのだから、その氣なら拘束するなり何なりしているだろ？。

「……ごめんなさい、って、なんで？」

「え、だつて君さ、なんか怒つてるじゃんか。だからや、さつきぶつかつたのを怒つてるのかなつて、だから……」

「……別に、怒つてはないけど……」

そもそも、こちらに気づいたゆえの突撃だと思つていたのだ。しかししどうやうではなかつたらしい。つまりあれは完全に事故だつた、と。

「えど、ぶつかつたの、わざとじやないんだよ？　なんかでつかい蟻がいっぱい襲つてきてさ、それで木に向かつて逃げようとしたらちょうど君がいて、それで避けようとしたけどなんか動けなくて、それでぶつかつちゃつたんだ」

……実に必要なミラクル（奇跡）だ。

「えーと、それでさ、ちょっと氣になつたんだけど。君なんでこんなところにいたの？」

「……それは……」

まさか来訪者を待ち伏せていたとは、さすがに言えない。どうも気づいていないようだが、こちらも来訪者であることがバレれば攻撃してくる可能性だつてある。

「……実は僕さ、ここがどことか全然知らないんだ」

「え？」

「こんなこと言つて信じてもらえるか分かんないんだけど、昨日まで僕全然別のところにいたんだよ。それが今日起きたらこの草原のど真ん中でさ。もう何がなんだか。……で、もし良かつたら、ここがどこかとか教えてくれると嬉しいなー、なんて……」

「……それは、別にいいけど……」

「え、ホント！？ やつた、ありがとー！」

「…………」

にわかには、信じられない話なのだ。普通の来訪者がこの世界について知らないなんて。それは本来、あり得ない話なのだから。しかしこの少年が嘘をついているようには見えないし、つく必要も無い。ならば”本来の意味での”来訪者かとも思ったが、それもおかしい。呪文を必要としない魔法、当たり前のようすに通じる言葉。これらはどちらも来訪者の証なのである。

「えーっと、僕、把臥之 双羽、っていうんだ。君の名前は…………」

まあとりあえず、彼は敵ではなさそうだ。こちらから仕掛けにおいて調子のいい話ではあるが。今のところ、それだけ分かれれば十分だろ。ひとまず、考えるのは後回し。

「……私は金峰 夕依よ。よろしく」

名乗られれば、名乗り返すのが礼儀というものだ。

「じゃあ……カナちゃん、だね！」

「…………」

名乗つて3秒。さっそく、この少年が軽く変人であることが判明してしまったのであった。

「…………」

「…………まず、こじがどこかといつ話からだけど…………」

今しがた知り合つたばかりの少女が、説明を始める。

……この夕依という人物の特徴。なんと言つても、少々サイズの大き過ぎるフード付き黒マントだろ。今の日本じゃ見かけることなんぞまず無いであろうそんな服、少なくとも女の子に似合つものではない。

フードさえ被つていなければ、問題無く美少女の部類に入るだろう。

「…………いや、地球じゃなしの。…………と言つたら、信じる？」

「信じない、って言つてたら話進まないんでしょう？」

「……そうだけど。順応早いわね」

ある程度順応性がなければ、「んなとこにまつぱり出された時点でどうにかなつていい。

「ついさつき虎さんに食べられかけたところだからね。もつ大抵のことじや驚かないよー」

「それは……良かつ、た……？　……ええと、とりあえず、把臥之くんが知らなさそなこと、まとめて話すけど、いい？」

「途中に質問挟むの有りで？」

「別に、構わないけど……」

「それじゃ、お願ひします先生！」

「せ、先生……」

初めは素つ気ない人だと思つていたが、どうも違つりし。単に無口なだけなのか。軽口にいちいち反応するあたり、ちょっと楽しい。

「……話、進めるわよ」

「はーい」

さて、これで問題が解決するといいのだが。

.....

「つまりここは異世界で僕は選ばれて召還されたけどそこは魑魅魍魎のサバイバルやつぽい、ってことで大体あつてる?」

「……間違つたことは言つてないけど……」

まあ、一言でまとめるつまりそういうことだった。

……とはいへ、これだけではなんのこっちゃだろう。具体的には、こうだ。

まず、ここは異世界。東京とか大阪とか日本とか、もしくは地球とかともさつぱり違う別の世界。もしかしたら宇宙のどこかそのあたりかもしれないし、それ以前の全然違うところかもしれない。剣

と魔法の支配する、絶賛中世ファンタジー空間。とりあえず、そんな場所。

……で、なにゆえ双羽がそんなところに来たのかといえば、ズバリそれは“呼ばれた”から。俗に言つてこの召還といつやつだ。ちなみに、いつして呼ばれた者のことを見ると、一般には“来訪者”と呼ぶらしい。

その召還をやらかした犯人は、ひとつこの国。“ベンフィード公国”という歴史ある小国なのだが、とある理由のため影響力と軍事力は高い。この国が、双羽だけない、実に数千人もの青少年をこの世界へと呼び寄せたのだ。一度に全て、ではない。おおよそ2年以上かけて、順次この世界へと引き入れた。

そして、それら呼び出した来訪者に、ひとつ“魔法”を「える」のだ。通常この世界で使用される魔法は“呪文”を必要とする。しかし、このとき「えられた魔法はその必要も無く、また非常に高性能だ。

何故、わざわざこのようないふなことをするのか。はつきりとは分からぬこのだが、どうやらこの国、強い者が欲しいらしい。召還した若者に“ベンフィード公国まで辿り着ければ元の世界へ帰す”と言いつつ、彼らに対する懸賞金を掛けているのだ。選別、なのだろう。ご丁寧に、来訪者の血と混ぜれば発光する判別用の薬品まで準備している。

「へー、そーなんだー」

「……ほんとに知らなかつたのね……」

……これら全て、本来ならば召還した際に伝えられること、らしい。気がつけばこの世界について、そしていつの間にか上記の知識を得ている。これが、普通の来訪者がこの世界に降りたった直後の状況だ。これだつて混乱することに変わりないだろうが、双羽の場合はそんな説明すら無し。“第”の魔法も偶然発動したから良かつたものの、そうでなければ何も分からぬまま食物連鎖に組み込まれて終了だった。これは、明らかなるイレギュラーである。

「……とつあえず、僕はそのベンフィード公国ひとりに田舎せばいいんだよね？」

「ううよ。……ただ、他の来訪者には気を付けないといけないの」同じ目的地へ向かっているのだから、かち合ひ可能性は決して低くない。とはいえたまに問題なのが、着の身着のままこの世界に連れてこたまに問題なのが、着の身着のままこの世界に連れてこられた来訪者の“懐具合”なのだ。無論、旅をするには金がいる。よつて、協力するよりもひとつらえて引き渡し、その高い懸賞金を路銀に充てようとする来訪者が多いのだ。この要因ゆえ、今この世界は来訪者同士のサバイバルゲームと化しているのである。

ちなみに余談ではあるのだが、この説明をしてくれた夕依も来訪者なのだと。道理で詳しいはずである。

「……大体このくらいよ。……他に、聞きたい」とある?

「うーん、無いことはないけど……まあ、今聞いたってしょうがないことばかりだもんね」

「……?」

そもそもなんで言葉通じるのかとか、なんか太陽ふたつあるっぽいんだけどそれについてとか、まあ他にも聞きたいことは色々ある。あるのだが、まあ今のところ自分の境遇が分かつたあたりで良しこう。

この世界で初めて遭遇した人物が親切な人だったことに、感謝感謝。

……とまあ、双羽は夕依が自分と遭遇したそもそももの理由を知らないわけだが。世には知らない方がいいことだつてたくさんある。

「それで……把臥くんは、これからどうするの?」

「んー、できればカナちゃんについていきたいんだけど……」

「……その、カナちゃん、つて……」

「かなみねちゃん、略してカナちゃん、だよー」

初対面の人にはまずニックネーム。呼びかけやすさはそのまま親しさに繋がる。双羽流対人術の基本だ。

「……まあいいけど……」

「……えと、どうちが？」

「どっちも。ついでくるのは構わないし、その呼び方も……まあ、別に気にしないから」「

「ありがとー」

いくら自分の境遇が理解できたといって、それでいきなり自活しろ、はあまりにも厳しい。

とりあえず、少なくとも双羽よりははるかに旅慣れてそうな夕依と行動を共にする。これが今現在の最良選択肢だろう。

「で、これからどうちに行くのー？」

「今の時間なら……もう、ここで野宿した方がいいわね……」

「あれ、もうそんな時間？ まだ明るいのに」

確かに片方の太陽は地平に近いが、もう片方は斜め上30度くらいだ。……というか、太陽ふたつのこの状況で暗くなることなどあるのだろうつか。

「……時期によつて違うけど、今はあの上の太陽が速いのよ。あのくらこなら……ほほ、同時に沈むはず」

なるらしい。時期によつて太陽の速度が違うところの中々に面白い話だ。

「……私は、ソリでテント張るから。把臥くんは、薪。集めてきて」

「薪、つて、どこから？」

わりかし見渡す限りの草原である。初めに逃げ込んだ森も遙か遠い。

「木の枝みたいな草が、あちこちに生えてるの。……飛べるでしょう。上から探せば、見つけやすいはず」

「へえー」

変わった草もあったものだ。

が、まあなんと言つたってことは異世界。何があつても驚くに値しない。木の枝っぽい雑草のひとつやふたつ、どんと来いだ。

「んじや、行つてくるねー」

「……暗くなる前に戻つてこないと、迷うから」

「りょーかい！」

元気よく返事一発、箒を構え、空へと舞い上がる。夕依のいる木を中心として、円を描くように探す方向で。

……ここへ来て初めての、明確な目的を持つた飛行である。内心の高揚感を糧に、双羽は箒を加速させた。

第肆話 初野宿夜・はじめてのよる

「……疲れた……」

元気よく空に舞い上がった簾を田で追い、夕依はため息をひとつ。テントの入ったバッグは木の裏側に隠してある。が、彼女はそのまま地面にぺたんと座り込んだ。地平近く、太陽の沈みゆく姿を田で追う。

……あんなに長々と他人に話をしたのは久しぶりだ。比較的無口という性格も、まあ原因の一端だろう。しかしそれ以前に、ここ最近信用できる人間と出会わなかつたことが大きい。1年半ほど前からこれまで、夕依には信用のおける人物というものが存在しなかつた。

無論、状況だけを見るのならば、双羽だつて決して全面信用できる相手ではないはず。

ただ、なんだろう。

「少し、休みたい……」

長いひとりぼっちに疲れた自分。そして、どうも裏があるようには見えない双羽。

……ここはひとつ、自分の人を見る目に賭けてみようではないか。しばらくの間、行動を共にする。どうせ今の彼女の旅の目的など、あつてないようなものなのだから……

「……テント、張らないと」

なんだか仕切るような命令をしておいて、こちらが丸サボリとうわけにもいかない。幸い手慣れたテントの設営だ。少々のんびりした今からでも双羽の帰りには間に合つだろう。そんなに慌てず、木の裏からテント用具一式を取り出した。

……まず、テントの底面積に合わせて地面にピックを打ち込む。本来テントの底布によって位置を測るべき作業だが、そこは長年の

感覚でカバー。年単位でほぼ毎日使っているテントだ。見なくたつて広さくらい分かる。

次に2本の支柱をしならせ、ピックに両端をひっかける。これでテントの概形は完成。あとはこれに天布を被せ、内側から防水シートと支柱保護用の布を設置すれば……

「……あ」

そこで、夕依の手が止まる。テントの体積がはつきりしたあたりで、ある重要な事柄に気づいたのだ。

「ちょっと、狭い……」

このテント、一人用なのだ。一応、荷物を置くスペース程度は確保されている。が、人間ふたりが寝るだけのスペースとしては、ちと厳しい。もちろん、詰めればそれだって不可能ではないだろう。

……しかし、ここでまたひとつ問題がある。

金峰 夕依、齢14才。ここ最近少々特殊な人生を送っているものの、歴とした思春期の女の子である。つい数時間前に知り合った男の子とくつついて眠れるほど、太い神経はしていない。

「……忘れてた……」

外で寝るという選択肢は、無い。この草原は昼夜の気温差が大きいのだ。十中八九、夜に体温を奪われ、朝露でびしょぬれになつて目覚めることになる。……そもそも、目覚められるかどうか自体が怪しい。

……結論、羞恥心が為に命を危険さらすのは得策ではない。しかし、体面というかプライドみたいなのもやはりまた重要なわけだ……

「うう……」

一緒に旅するなんて、軽々と承諾しなければよかつた。早速夕依の脳内に後悔が渦巻き始めたころ、その根本原因が帰還した。

「薪、集めてきたよー」

「お疲れさま」

「あれ、なんだか元気ないね。どーしたの?」

「よく分かるわね……」

尻すぼみな細々とした話し方は生まれつき。やつれと今どで、それほど雰囲気を変えたつもりも無かつたのだが。

「……えーっと、あ、これテント? まだ途中だよね。手伝ひよー」

「あ、ありがと……」

さて、どうしたものか。今更彼をテントの外へと追い出すというのは流石に気が引ける。

かといって自分が外で寝るわけにもいかないわけで、それなら一緒に寝るのかつてそれは無理なのだからそれなら双羽にやんわりとお願いしてつてだからそれも無理だからあれ堂々巡り。

「……ほんと、大丈夫? 顔色悪いよ。さつき変などいじぶつけたんじゃ……」

「だ、大丈夫、なんともないから」

……悩んでいても仕方ない。ここは、なんとか話を進めよう。

「……その、実はこのテント、一人用なの。だからちょっと狭くて、把臥之くんまで入れないのよ……」

「うーん、それは困ったね……」

詰めれば入れる、ということは敢えて伏せておいた。もし言つてしまえばこの少年、そんなこと気にしないよー、とかのたまいそうだ。なんとなく、それは確信できる。

「うーん、この広さなら、なんとか詰めて寝れないかな?」

「……う」

即、気づかれた。

「そ、それは……」

「……えーとせ、とりあえず、テント組み立てやあうよ」

一理ある。このままグダグダしてたつてテントは勝手に建たない。日も落ちてきたことだし、考えるよりもまず寝床を作ってしまおう。

「……それなら……このシート、テントの底に張つておいて」

「はーい」

……寝るときの問題は、寝るときまで後回しにする」とした。

……

「あ、これおいしいね」

焚き火に薪を一本放り込みながら、双羽が感嘆の声を上げた。手に持つているのは円柱形の木の容器。中身はこの地方の伝統料理だ。確か名前は……

「それは、“マダンチャセ”っていう料理よ」

「……まだんちやせ？ 変な名前」

「この世界の古い言葉で、“腐らない食べ物”、って意味だつたら思つ。すこく日持ちがいいから、旅人がよく食べるの」

「へー」

ただし封入されている器の形状ゆえ、かさばるのが難点だ。

「大量に持ち運ぶと邪魔だから、一人の長旅には向いてないけど」

「……あれ、一人の長旅、じゃなかつたの？」

「歩いて一日くらいのところに町があるから。……最近は、そこを拠点にしてるの」

「んじや、明日はそこへ向かうつてこと？」

「そう」

まずはその町まで戻る。これは決定事項だ。その先どうするか、軽く予定を練り上げておく。

……旅の道連れが増えたので、とりあえずは食料と生活物資の買い足しか。最終目的地は双羽任せになるわけだが、十中八九ベンフィード公国だ。ならば北部の森を抜けて港へ入り、貨物船にでも乗せてもらひのが吉。

いや、ひとつ寄る場所があつた。この地を離れる前に、一度行っておこう。申し訳ないが、双羽にも同行願いだ。

「ふああ……」

「う……」

双羽の大あくびが聞こえ、思考の波から引き上げられる。そうだ、

寝なければいけない。後回しにしていたあの案件だ。

「えと、その、把臥之く……」

「……できた！」

「……え？」

ふと横を見れば、双羽がいない。見回してみると、あの変な木の横に浮かせた簾の上で座っている。そんな彼の横、地面から半メートル程のところに揺れるのは。

「……ハンモック？」

「そだよー。毛布にくるまればそこそこ暖かいし、朝露なんかで濡れたりもしないしね」

材料の出所が不思議だったが、その疑問はすぐ消える。あのハンモックの網。あれは夕依がいつも持ち歩いてる荷まとめ用ロープだ。

……といふか、何故そんなもの作れるのだ。

「それじゃ、僕はこっちで寝るねー」

一度降りてきた双羽は、テントから予備毛布を引っ張り出すと靴を脱いでハンモックへよじ登る。

こちらの都合である以上、夕依は自分がハンモックでも良かつたのだが。なんだか強引に決定してしまった。まあ、双羽自身がいいと言うのだから別にいいのだろう。

食事道具をテントに放り込み、夕依もテントに入ろうとしたあたりで、双羽から声がかかった。

「あのー、カナちゃん」

「……なに？」

「あのさ、ランプとかそーいうの、無い？」

どうやら双羽、光源が欲しいらしい。どうせ今から寝るだけだといふのに、何に使うのだろうか。

「あるけど。……はい」

「ありがとー」

荷物から予備の魔法光源を取り出す。なんともファンタジーなネーミングだが、外見は至つて普通の手提げランプ。内部構造なんか

もほぼ同じだ。違つのは発光装置が魔法由来で、あまり熱くないと
いつことぐらいだろうか。

「操作方法は底に書いてあるから」「う

「りょーかい。えーと、このつまみを回して、それから発火棒を引
いて……」

ボウ、とランプに明かりが灯る。それを見届け、タ依はテントの
中に引っ込んだ。

「おやすみー」

「……おやすみ」

こんなやりとりにやえ、懐かしさを感じる。思っていた以上に自
分は人恋しかったようだ。

そのまま毛布にくるまり横になつたタ依は、ちょっととしたことを
思い出した。が、疲労が彼女の意識を安眠へと引っ張る。眠たい。
寝よう。

じうせ今から眠るのだ。……あのランプの燃料が残り僅かだなん
て、些細なことである。

第五話 草原独町・わうげんのまち

双羽との出会いから一夜明け、清々しい草原の朝。ふたりは最寄りの町へ向かつて移動していた。

湿つている長草が鬱陶しいが、夕依の靴にはしっかりとした防水加工が施されている。この程度じゃ濡れやしない。

対する双羽、靴に防水機能は無いものの、簾で軽く浮いていた。

……「これは、セコい。

自分の足で歩けと言いたいところだ。が、当の双羽は。

「……ゾーン」

……寝ていた。それも細い簾の上で、ぐつすり器用に爆睡中。どうも昨日は眠れなかつたらしい。

その理由を聞くと、逆にランプの燃料が少なかつたことについてやたらと文句を言われた。何故だろう。

ちなみに、簾自体は双羽を乗せたまま勝手に夕依の後ろを付いてきている。自動操縦可能とは便利な簾だ。

それにしても、暇である。

同行人はちょっとやそっとじや起きそつにない夢の中。周囲は見渡す限りの草原だ。これでは一人旅と何も変わらぬ……

「……！」

……ふと、左方の草むらに殺氣を感じた。

何マンガみたいなことを、と思うかもしれない。しかし、年单位でリアルサバゲーに放り込まれてきた夕依にとって、それは慣れた感覚。

差し向けられた明確な意志といつものほ、ときにも五感を震わせる。思えば、これこそが第六感といつやつなのかもしれない。

「グルルル……」

「……マウザンナウイ、ね

マウザンナウイ。角張った猛獸、という意味の言葉だ。たつた今

そこ草陰から現れた獸を表す名である。

その性質は、獰猛かつ凶暴。群は作らないのだが、絶対数が多く遭遇しやすい。普通の旅人がこの草原を敬遠する最大の理由である。つまるところ双羽がこの世界に来た直後出会ったアイツなのだが、まあ夕依がそんなこと知るわけない。

「ガアアッ！」

マウザンナウイが牙をむく。子供のひとりやふたり簡単に串焼きにできそうな、長く鋭い犬歯。それはこの猛獸にとって、人という生物が食料に過ぎないという事実を示す。

「ガアッ……」

「……悪夢・火事の素かじのもと」

「ガ、ガウ……！？」

さて飛びかかるうか、という姿勢で、突然マウザンナウイは動きを止めた。何かに怯えた様子で、周囲を見回す。

きっと今その視界には、草原を焼き尽くさんばかりの火の海が広がっているはずだ。

「……野生動物は、火を避ける」

「ガウ、ガアア……！！」

六角形の瞳に幻の炎を映し、角張った猛獸は草原の中へと消えた。それと同時に夕依の魔法も解除される。

……彼女の魔法。相手に幻影を見せる、その名も“悪夢”だ。厳密には見せるだけでなく、五感全てに認識させることができ。例えば先程の炎は、見る者に熱氣すら感じさせたはず。

つまるところ、野生動物対策にはもってこいの便利な魔法なのだ。

「……そういえば……」

後ろの双羽はどうしているだろう。それほど激しくドンパチやつたわけではないが、マウザンナウイは結構吠えていた。起きていっても不思議は無い。

「把臥之くん……」

「……すー……」

やつぱり寝ていた。起きる気配は無し。……まあ、なんとなくそんなことだろ?とは思つていたが。

静かに寝息をたてる少年の寝顔を一瞥し、夕依はまた歩き始める。今日も草原の風は強かつた。

「……着いたわよ」
「……むこや……ぐつ……」
「……」

「みぎやああつーーー?」

突如こめかみを襲つた強烈な痛みによつて、双羽は現実世界へと引きずり出された。痛い、ズキズキする。

……どうか、今いつたい何をされたのだろうか。少なくとも、抓つた程度の痛みではなかつた。

「え、つと……」

「……町はすぐそこよ。見られるとマズいから、簾から降りておい

て」
「は、はーい……」

見れば、わりかしすぐそこに茶色い建物群が見えた。あれが町だろう。

ひよい、と簾から飛び降りた双羽は、そのまま簾をポケットに突つ込んだ。仮にも懸賞金の掛けられた身の上である。人前では、来訪者であることを特定されかねない“呪文無し”魔法の使用は控え

……

「ちょっと待つて」

「……ん、どしたのカナちゃん?」

「今、何かおかしかったんだけど……」

そうだろうか。夕依に言われたとおり簾から降りて、そのまま簾を片づけただけ……

「そこよー、なんであんな大きな箒がポケットに入るの！？」

「ちっさくしたんだよ」

「なるほど……って、なにその便利能力」

「すごいでしょー」

どうやらこの箒、大きさを自在に変えられるらしい。今朝方、遠くの薪を取ろうとした際に発覚した事実だ。手を伸ばすと箒が一緒に伸びてちょっと焦った。

機会があれば、一度どこまで大きくなるのか調べてみようか。縮小に関しては、見えないくらい小さくできることが確認済みである。「……それじゃ、私は少し用事あるから。把臥之くんは先に宿に行つておいてくれる？」

「え、宿屋つて……」

そんなもの、いきなり言われても困る。場所だつて分からない。

「……大丈夫。あの町、宿は一軒しかないから」

「うーん……だけど、僕ひとりで行つて大丈夫なの？」

「こ」の札持つて行けば、私の借りてる部屋には入れると思う。ダメなら……宿屋の前で待つて

「はーい」

手のひらサイズの木札を双羽に渡し、夕依はふつとどこかへ行つてしまつた。まあ町の方角ではあるので、このまま置いてかれるということはないだろう。というか、少々の用事ならつきあつても良かったのだが。

まあ、いいと言つただからいいのだろう。そう納得し、双羽も町へ向かうことにした。

数分で低い柵に囲まれた建物群にたどり着く。

「えつと、ここが入り口だね。……へー、この町、ヒサンつていうんだ」

町の入り口とおぼしき木の簡易門と、町内の簡単な見取り図を発見。幸い、町に一軒だけの宿も明記されていた。この入り口が南で、目的の宿は町の南東部。町自体かなり小さいようなので、普通に歩

いてもそれほど時間はかかるないだろ？

「……あれ」

さて、ここまで自然に地図見て場所確認してたわけだが。改めて、地図を見る。

……残念ながら、こんなフーカフーカした文字を学習した覚えはない。しかし不思議と読める、というより、文字の“意味”がダイレクトに理解できる感覚。

これも召還とやらの効果だらうか。だとすれば、なんとも便利なものである。世の語学塾涙目な超高効率勉強法ではないか。

「……アメリカに召還されてたら、英語話せるよーになつてたのかな……」

それならいつでも英語のテスト満点取れたのに、などと考えながら、双羽は町へと足を踏み入れた。

この町の建造物は、大体煉瓦のようなブロックを積み上げて建てられているようだ。濃い茶色のブロック塀が並ぶ町並みは、どこか小綺麗である。この場所が、少なくとも日本ではないどこかなだとこうことを再認識させられる光景。

通りにはそこそこの数の人がいるのだが、特別双羽を注目する人間はない。召還されたときから勝手に着ているこの服、特に目立つ類のものもないらしい。似たような服装を見かけないことからすると、旅装が何かなのだろうか。あとで夕依に聞いてみよう。

「あ、あつたあつた。ここかな」

デフォルメされた“宿屋”を示す文字に、丸っこい樽マーク。十中八九ここで間違いないだろ？

カラーン、と軽い音を響かせて、これまた軽い戸を押し開ける。

瞬間、数多の視線が双羽を貫いた。

「……え、と」

大工っぽいゴツいおつちやんや、細身に似合わぬ威圧感を備えた青年等々。肉体労働上がりと思しき方々からの、“誰だお前は”的な視線が双羽に殺到する。なんで宿屋にこんな厳つい人たちが集結

しているのか。

自然固まるこちらを見据えながら、おっちゃんBが手に持った木のカップをぐいっと傾ける。そういえば、なんだか酒臭い。

……なるほど、あの樽マークは酒場を示していたわけだ。ファンタジーにありがちな宿泊施設付きの飲み屋さん。日も沈み掛けたこの時刻、少々パワフルな方々の溜まり場になつていてもおかしくはない。

「ま、間違えました……」

入ってきた動きの逆再生で宿の戸を閉じる双羽。ちら、と店の奥に階段と上向きの矢印が見えた。

どうやら2階が宿泊スペースのようだが、あの集団を抜けてまでして奥の階段に進むだけの気力は今のところ無い。素直にここで待つことにしよう。

それにしても、夕依はよくこんなところで寝泊まりできるものだ。旅慣れるとはそういうことなのだろうか。いくつもの宿を巡り、厳つい兄ちゃんからのプレッシャーなどものともしない……いや、違うか。

「やること、無くなっちゃったなー」

宿に入れなかつた場合は前で待つよつ夕依に言われている。が、この宿の入り口はメインストリートから一本中に入った路地だ。人通りもまばらで、特に人間觀察なんて類の趣味の無い人間にとつてはこの上なく暇な場所である。

ひとつだけ幸いなのは、座る場所に困らないことだ。目立たないサイズまで大きくした簾に腰掛け、双羽は思考を巡らせる。イスの背代わりの宿の木壁が背中に冷たい。

「ここ、どこなんだろね……」

……元いたのとは違う剣と魔法の世界のエサンという町の宿屋の入り口を出て3歩。説明すればこうなるし、少なくともこれは日本にいた頃の双羽が日常持っていた位置情報よりも余程詳しいはずだ。彼の口をついた疑問は、そんなことではない。

例え今いるのがリオデジャネイロだろうと田舎だろうと、この感覚は生まれないだろう。どちらかと言えば、4才から5才の頃、いつもより遠出した近所の路地でさまでいたとき感じたものが近い。漠然とした不安感。ホームシック、と言ってしまえば語句説明に60点がつく。

「ふああ……」

なんだかどつぼにハマりそのので、そのあたりで思考を切り上げた。単独で悩み込むのは双羽の悪い癖だ。今度、夕依にでも話してみようか。

なんだそれという顔をされるかもしれない。それでもまあ、この世界で今のところ唯一の知り合いである。こんな訳の分からぬこと言い出せるのは彼女くらいしかいない。

そういえば、夕依の用事とは何だろう。旅の用具を新調するとなら、双羽も同行すべきだったのだが。それに……

「……カナちゃん？」

「めかみ、もしくは額の内側がぴりっとする感覚。明確な理由も無く、ただ行動とそこへの衝動が体を包む。長年久しく錆び付いていた、動物的直感だ。

そして双羽は知っている。この感覚が、後に圧倒的根拠をもつて納得されるものだとこうことを。

「こっち、だね！」

従つて、双羽は走り出した。体の引かれる方向へ足を出し、走り、角を曲がる。

前方から金属の衝突音が聞こえたあたりで、双羽は確信と共に速度を上げた。

第陸話 戰闘勃発・たたかいはいつもとつぜんこ

Hサンの南門を見通せる高い建物の上で、彼は内心小躍りしていた。ホントは内心だけじゃなく全身で喜びを表現したいところだが、生憎足の下は見知らぬ民家だ。ガタガタやって、その住人にデカいネズミ退治をさせるのもなんだろう。

よつて彼の喜びはその視線に込められ、町に近づく黒いシルエットにぶつけられていた。

「やあっと帰つて來たなあ……」

そんなこと呴く怪しい青年、彼は“来訪者”だ。他と同じく、彼もあの国を目指している。……が、ここに来て路銀が底をついたのだ。

こんな素性の怪しい旅の人間を雇つてくれる仕事場なんぞそろは無い。さてどうする、少しばっかりいかがわしい護衛の仕事にでも手を出すか、と考えていたとき、彼はそれを目撃したのだ。

追いかけっこで遊ぶ子供たちがいた。彼らがメインストリートへと勢いよく飛び出したとき、運悪く乗り合いの魔動四輪が道を横切つた。不幸な事故だな、と青年は思った。しかし、彼の予想は外れ、子供たちが四輪と衝突することはなかつた。不自然にワンテンポ遅れてメインストリートへ飛び出した子供たちは、一瞬だけ不思議そうな顔を見合わせ、そのまま遊びの世界へ帰つて行く。

……しかし彼は見ていた。その奥の路地で、子供たちに手をかぎした黒マント。今のは、動きを止める魔法。しかも呪文無し。あの黒マント、明らかに“来訪者”だ。

これで、路銀が手に入る。“狩り”は初めてではない。この町に宿など一軒しかないのだから、泊まる場所だつて割れている。

喜び勇んで一晩経ち、この町唯一の宿屋に忍び込み、彼は黒マントがすでに掛けた後だということを知つた。

一時の遠出か、別の町への出立か。青年は昨日の自分の“どうと

でもなる”判断を後悔した。しかし他に選択肢は無い。彼は黒マントが町を出たという南門を張り込むことにした。3日経てば、別の行動を考える。

そうやって張り込んだその2日目に彼は黒マントを発見し、初めて戻るわけだ。

「待あつてなあ俺の路銀よお」

静かに建物から飛び降り、ターゲットを追跡する。ビルへ向かうつもりなのか、町の西部、比較的寂れた地域へと向かう黒マント。まあこちらにとつても一般人が居ないのは好都合だ。

そのままいくつか角を曲がり、メインストリートの喧噪も聞こえなくなつたあたりで、黒マントがくるりと後ろを振り向いた。背の高さから年齢はなんとなく予想できていたが、フードの下に見えたのが少女の顔であったことに少しばかり驚く。

「……そここの木箱の後ろ。分かつてるわよ」

さらに驚くべきことに、こちらの尾行はバレていたらしい。無論彼だって追跡のプロなどではないが、それは向こうも同じ。一般人が一般人の気配に気づくのはそれなりに凄いことだらう。

「それじゃあ何だ、俺えをここに誘い込んだってえわけかあ？」

「……まあ、そうよ。……あと、その話し方、すごく聞き取りづらいんだけど」

「生まれつきだあ、ほつとけえ」

誰が好きでこんな喋り方するものか。それに、文字に起こすと読みづらしそうだが、聞き取る分にはそれほど問題無いはずなのだ。ここで文句を言われる筋合いも無い。

「……で、何の用なの？まさかストーカー、とか？」

「まあそうとも言えるなあ。……少々質はあ悪いがあな！」

背中に隠した得物を、手前に構える。身長の半分ほどの金属棒。特別なものではない、今朝方町の廃材置き場から拾ってきたものだ。それでも十分凶器になる。

「目当ては……懸賞金、ね」

「分あかってんじゃあないか」

対して黒マントは手ぶら。恐らくは魔法オンラインで戦うタイプだ
らしい。この手合いには、とにかく距離を詰めるに限る。

両者間おおよそ一〇メートル。全力で走れば……

「……呪術・金縛り」

「おおう！」

つて何だと言つ間もなく、ぴしつと体が固まる感覚。……が、
動きを止める魔法の使い手であることは知つてゐる。体の固定を感じると同時に、手首の動きで思い切り金属棒を投げつけた。

「……！」

とつさに避ける黒マント。なかなかの反射速度だ。しつかり金属棒を視界に捉え、回避している。

……作戦通り。

「閃光う波！」

「つ！？」

黒マントの顔すれすれを横切る金属棒が激しく光った。それに注目していた黒マントの目には、強烈な光が焼き付いたはずだ。これで、あちらの視覚はしばらく役に立たないだろう。
「こちらの位置把握ができなくなつたためか、行動停止魔法も切れ
ている。

反射的に目を覆つ黒マントに向かい、全力のダッシュ。同時に一
言呴き、左手の指輪に宿る魔法を発動させておく。

「クシデヌアヤニエノノスマイムチトウエ、とお

パチという軽い音と共に、指輪が微かな光をまとう。魔法がきちんと発動したことを確認した上で、左手を握りしめる。そのまま黒マントの懷まで飛び込み……

「ちいと、寝とけえ」

「！ あ、ぐ……」

勢いそのまま左拳を叩きつけた。とは言えまあ打撃に関しては素人の一撃なワケで、これに相手を氣絶させる威力は無い。……一瞬

遅れ、相手に押しつけられた指輪の放つ魔法が黒マントを貫いた。

雷の魔法を封じた指輪、その名も“ビリビリの指輪”。触れた相手を麻痺させ行動不能にする便利な代物だ。黒マントの体が一瞬固まり、次いでくたりと崩れ落ちる。

この指輪、彼のような直接攻撃手段を持たない者には重宝する魔法道具である。使用回数に12回と制限があるが、まあそれで特に困ることもない。あと8、9回は使えたはずだ。

「いっちょああがり、とお

まずは投げた金属棒を回収しておく。次いで、よつこひらせ、と黒マントを肩に担ぐ。見た目の体格通りの軽さだ。

あとはこのまま換金所まで連れて行き、自分が来訪者だとバレないよう引き渡して……

「てえええいっ！」

「のぶおつ！？」

突如わき腹に衝撃を受け、換金の算段はそこで中断されてしまう。思わず黒マントを取り落としてしまい焦るが、一いちばんこの衝撃の張本人がしつかりキヤッチしていた。

「力ナちゃん、大丈夫っ！？」

極々普通の旅装を纏った、髪の長い少年だ。ここまで全力疾走でもしてきたのか、肩で息をしながらぐったりとした黒マントに呼びかけている。

「安心しなあ、そいつあ寝てるだけだからなあ

「……そーなの？ よかつたー」

初対面で口調にツッコまれなかつたのは久しぶりである。この少年、なかなかのスルースキルを……

……じゃなくて。

「いいかし、そいつに連れが居たあとは予想外だなあ

「会つたばかりだもん

「そうかい。で、俺があそいつ連れてえいづつてえ理由はあ分かるなあ？」

「……そりや、ね。僕も“来訪者”ってやつだから、や」

「それも来たばかりの、だろ？。この世界である程度生き永らえた来訪者ならば、そう簡単に自分の素性を漏らしたりはしない。

「どうも今日はツいている。来訪者をひとりしとめたと思えば、そこに現れたのがまだ来たばかりの初心者だというのだから。……2人分の賞金があれば、このままベンフィード公国まで直行できるだろ？。そうすれば、このろくでもないサバイバルともおさらばだ。

「なるほど、それあつまりあれかい、俺にい懸賞金2人い分プレゼントつてえわけかい」

「そーねー」

言いつつ、黒マントを地面に寝かせてこちらを向く少年。ビリやらやり合つつもりらしい。これで、最も恐れていた逃げの一手も無くなつたわけだ。

自らの幸運に感謝しつつ、青年は再び金属棒を構えるのだった。

.....

不覚だつた。そして予想外でもあつた。投げつけられた金属棒が閃光弾代わりだつたことも、攻撃用魔法道具を使つてきたことも、だ。

金属棒については、まあ相手の作戦勝ちだとしよう。しかし、来訪者が通常の魔法道具を戦闘に用いるのは珍しい。そんなものより余程便利な魔法を各自持つてゐるからだ。まさか、そちらを補助に使つてくるとは思わなかつた。

「（……まだ、動けない……）」

目の前では、双羽とあの青年が対峙してゐる。青年の表情には余裕が伺えた。恐らくは、双羽がこの世界へ来たばかりだということをバレているのだろう。まあ、しょうがないか。

「……ちなみになぜ夕依が意識を失っていないのかというと、それには少しばかり理由がある。

通常、あの雷魔法は麻痺効果と同時にショックによつて相手を氣絶させるものだ。そこで夕依はあの魔法を受ける瞬間、とつさに自分へと魔法を掛けた。“悪夢・火炙りの刑”。全身を火に包まれる、ような幻覚を見せる魔法だ。

彼女の“悪夢”は五感全てを支配する。これにより、雷魔法のショックが夕依の脳を揺らすことはなかつたのだ。まあ、麻痺が効いているため動けないことに変わりは無いのだが。

「クシデヌアヤニエノノスアームチトウエ。ようし」

双羽相手には隠すつもりもないのか、青年は堂々と指輪の魔法を発動させる。大した自信だが、それも仕方無いことだ。相手は相当戦い慣れしているのに対し、双羽は素人もいいところ。しかも彼は青年の戦法を知らない。勝負は見えている。

「（……なんで、逃げないの……）」

つい昨日出会つたばかりの人間をいちいち助けていては、この世界を生き延びることはできない。

情よりも、理を。ここで生き抜くための鉄則なのだ。

今なら相手は夕依を置いていけないため、双羽は確実に逃げられる。あの箒魔法ならば、スピードで負けることはまず無いだろ？
逃げてとにかくこの町から離れれば、危険も去るはずだ。

……だが。

「（……声が、出ない……）」

これらの事実を双羽に伝えることもできない。逃げてと言えない。

「なーるほど、やっぱり電気なんだね。……思つた通り」

こちらの氣も知らず、双羽は存分にやる氣のようだ。小声でなにやら納得している。

電気はどうでもいいから早く逃げて欲しい。

「どーやつて確かめようかと思つてたけど、手間省けりゃつたやす、と箒を正眼に構える双羽。

……なんだろう、この自信は。異世界という異常な状況に、まだ現実感が追いついていないのだろうか。

無論そんなことに構わらず、相手の青年は行動を開始する。

「まあこいつだあ、そいつ！」

「わわつ」

ひゅん、と音を立てて投げつけられた金属棒を、双羽は器用に箒で弾いた。しかし、それではダメなのだ。その直後に、アレが……

「閃光う波！」

強烈な閃光が迸った。

双羽は左手で皿を覆つて居る。まともに受けてしまったら這一だから言わんこっちゃない。

「は、残念だつたなあ」

青年の左手が、双羽の無防備な脇腹に押し当たられる。とつて双羽は箒を回し、青年にその柄を押し当てる。が、そんなもの関係無い。

「ちいと、寝とけえ！」

指輪より、青白い雷が発された。ぱちん、と乾いた音が響く。

「うあつ…………！」

一瞬間を置き、双羽の体が崩れ落ちた。

「う、ぐお…………！」

そしてそれと同時、何故か青年までもが地に伏せる。両者、意識はあるようだが起きあがる気配は見えない。

「（…………な、なんで……？）」

何が起きたのかは良く分からぬが、夕依にも分かることがひとつだけある。

……この勝負、結果はまさかの引き分けとなつたのであった。

第質話 次進情景・つぎへむけて

エサンにただひとつ宿にて、遅めの夕食をとる夕依と双羽が居た。この宿屋の一階は宿泊客用の食堂兼酒場となつてゐる。来訪者の青年との交戦より時は経ち、すでに日も沈んだこの時刻。ここにいるのは一晩掛けて飲み明かそうかといふような連中ばかりだ。旅人なんてそう訪れるものでもないし、まともに夕食をとつてゐるのは彼女たちぐらいのものである。

「これおいしいよー、カナちゃんも食べる?」

「……いらないわよ」

……あの後、真っ先に復活したのは最も早くから倒れていた夕依だつた。彼女はそのまま双羽を叩き起こし、青年を換金所に放り込みがてらふたりで町を散策していいたのだ。複数人の旅に必要なものを買い揃えていたのである。

食糧などはもちろん、テントだつて新しいのが必要だ。幸い青年への懸賞金が手元に入つたため、そこそこ値段を気にしない買い物ができていた。……換金時はずつと不機嫌な双羽だつたが、結局何も言わないでいてくれた。てっきり文句のひとつでも降つてくると思つていただけに、これは有り難かつた。

「……それで、あのときのことだけど……」

「僕があの指輪の電気を受けたとき、だよね?」

そして現在。宿屋付属の食堂にて、夕依は双羽に先の戦闘について問い合わせていた。

あの戦い、どこからどう見ても双羽不利だったハズだ。それが、結果はまさかの相打ち。そもそも何故あの青年が倒れたのか未だによく分からぬ。

「んー、なんで、と言えば答は簡単なんだけど。一言で言つとね、あの時、僕を通り抜けた電気はそのままあの男の人の体を伝つていつたんだ。それであの人は倒れちゃつたんだよ

……そんなことが、あるのだろうか。少なくとも、夕依の受けた

電撃は的確に彼女の体を貫いたはずだ。

「実はねー、あのとき僕、ちょっとだけ浮いてたんだ」

「……浮いてた？」

「そ。見た目じゃ分かんないぐらい、ちょっと、ね。それで、電気が通るときに篝を相手の体にくつづけてたでしょ。……これで、逃げ道を失った電気は、篝からあの人人体を伝つて地面に流れただよ」

「…………」

言葉が無くなる。口調こそいつも通りだが、その語られる内容はとても少年の思考とは思えない。

……もしかして自分は、何かとんでもない出会いをしてしまったのではないか。そう思わずにはいられない夕依であった。

「……で、さ、カナちゃん。話は変わるんだけど……」

と、打つて変わった様子で双羽が口を開いた。少し怖さすら感じた先程の雰囲気はさっぱり消え去り、その物腰は完全に見た目の年齢通りである。

「僕、ベンフィード公国つてどこのに行けばいいんだよね」

「そうよ」

「でも僕全然道とか分かんないからさ、どうやって行けばいいかとか、大体でいいから教えておいてくれないかな？……もしかしたら、ハグレちゃつたりするかもしないし、さ」

なるほど、それならばこちらも丁度その話をしようと思つていたところだ。どのみち双羽とはしばらく行動を共にするつもりだが、途中の道のりは頭に入れてもらつておいて損はない。

「いいわよ。ちょっと待つて……」

言いつつ、いつも背負つている真っ黒な荷物袋から地図を取り出した。この地域から目的地のベンフィード公国まで網羅する結構大きな地図である。

ちなみに、双羽には夕依と同じ荷物袋を買わせた。これも旅には

必需品なのだ。特にこのタイプが丈夫で長持ちするのは、タ依自身で立証済みである。

「ええと……」*ジ*がエサン、今いるこの町ね

「うんうん」

テーブルの上に地図を広げ、2人してのぞき込む。地図の南端にポツンと存在する点、これがエサンだ。その更に南には地図の端を埋めるように草原が広がっている。

「私たちが会ったのが、大体このあたり」

「……地図だとすこく近く見えるね」

「実際近いわよ、往復2日なんだから。目的地のベンフィード公国なんて、ここよ」

言いつつ、地図の中央部を指し示す。実はこの地図、ベンフィード公国発行の周辺地形図なのだ。よつて公国が大凡中心に位置するよう描かれているのである。

その公国を示す地域とこのエサンとの間に、田算で2、3週間分の距離があった。

「……遠いね」

「……遠いわよ。まあ、途中のこのあたりは船で移動するから、距離にしては早く行けるけど」

エサンより1週間ちょっととの部分から公国までのエリアは、水を表す青色だ。ここは船で移動するので、歩くよりは早い。

「でつかいねー、これ、海？」

「違うわよ。……とても大きな湖なの、これ。ベンフィード公国は湖の中の島にある国なのよ」

「ほへー、でつかいね！」

湖の北部は地図からはみ出しているため、正確な大きさは分からない。まあ、少なくとも琵琶湖なんかと比べて良い大きさではないだろう。

「……えーと、それじゃエサンからまずこの森通って、それからこの町で船に乗つて行く、って感じかな。全部で……2週間ぐらい？」

妙に的確な予測だ。この年齢でひとり旅などしたことでもあるのだろうか。

あと双羽の予想行程で大体はあつてているのだが、何カ所か訂正を入れる必要がある。

「……目指すのは、ベンフィード公国 の首都、ゲイヌシンよ。この点ね。船下りてからここまでまた歩くから

「ふむふむ」

「あと、真っ直ぐ北に行かずにちょっと寄り道するわよ。……この沼地に、ちょっと個人的な用事があるの」

「用事?」

「……私がエサンに来た目的、よ。往復1日ぐらいだし、何だつたらいこの宿で待つても良いけど……」

「一緒に行くよ。……」「こ怖いし」

確かにこの宿、割と厳しい外見の方々が多い。実際中身が気のいいおっちゃんの類だということは夕依もここ数日の宿泊で知っているのだが、初日の双羽が1人でくつろげる場所でないこともよく分かる。

それにまあ、いちいちこの町まで戻る手間を考えれば、着いてきてもらった方が都合も良い。

「それなら、明日の1~3の刻に出発するから

「うん、分かったよ。……って、1~3の刻?」

「……ごめん、説明してなかつた」

“刻”とは、この世界で標準的に使われる時間の単位である。簡単に言えば、地球での“時間”に対応する単位だ。ただし、考え方が大分と違う。

具体的には、まず太陽と太陽の中央点が真上に来る時間を1の刻とする。次に太陽の中央点が同じ位置に来るまでを一周として、これを1~6等分するのだ。そしてこの区分点に順次1から1~6まで通し番号を振り、刻とするのである。

いつも聞くとややこしそうだが、要するに“一日1~6時間で、かつ

0時ではなく1時から始まる”と考えればよい。一日が正午から始まるという違いはあるものの、それはあくまで数字の上でのことであり、実際には9の刻が日の境目とされている。

「なるほど、朝6時出発、ってことだね

「……まあ、そうだけど」

……今説明をざつと一回聞いただけで、即座に言われた刻を時間換算する双羽。流石にもう驚きはしないが。

ちなみに、町の中央にある時計塔がこの町唯一の時刻を知る手段だ。魔法装置付きの小型時計は高価な上に大きくて邪魔なため、普及していない。機会仕掛けの時計塔が、町全体の生活リズムを刻んでいるのである。

「朝早いねー、早起きしなくちゃ」

「朝出ないと、着くのが夜になるから。……できれば、あのあたりで夜を越したくないの」

「ふーん?」

疑問顔の双羽だが、まあそこは行ってみれば理解するだろう。別に今言わなければいけないほど重要な事柄でもない。

明日の行程のパターンをいくつか考えつつ、夕依はふっと息を吐いた。

暗闇の中、双羽の目は冴えていた。宿のベッドに潜り込んでしばらく経つのだが、眠れない。

……目を瞑れば、あの青年の姿が瞼に浮かぶのだ。別に殺したわけはない。ただし、連れて行かれた来訪者がどうなるのかは、夕依もよく知らないと言っていた。が、どう転んでもろくな扱いをされそうにはない。

彼を換金所に引き渡すのは、正直気分が悪かった。平和な日本に育った双羽には決して馴染めない感覚。連れて行く最中、何度夕依

を制止しようとしたか分からぬ。

しかしあの青年の身柄と引き替えに、双羽はこれから旅の基盤を手に入れたわけだ。いくらかは使つたが、まだそれなりの銅貨や銀貨が腰の布袋に詰まつてゐる。この世界、特にこのあたりの地域で流通している通貨だ。

それぞれの硬貨の相対価値などは、敢えて教えてもらつていなくてはならない。その情報があの青年を数値化してしまう気がしたのだ。今回の経験は双羽にとって、数値的な価値を持つものであつてはならないのである。

「できれば、もうやりたくないよね……」

はあ、と溜息ひとつつき、目を閉じた。暗闇に浮かんだ青年が、青白くスパークする指輪を双羽に突きつけてくる。

「お前は一体、何者だ？」

一言、問いかけてくる青年。

いやちよつと待とう、アイツはこんなノーマルな口調じやなかつたはず。……なら、誰だ。

「何故だ。我々は……」

我々、と。そう言つた相手の顔は、いつの間にか薄くぼやけていた。表情は読みとれない。

気づけば、相手の左手にあつた指輪は黒光りする金属塊となつていた。握られたグリップ、そしてそこから延びる太い筒が双羽に突きつけられる。

「……いや、同じか。消える」

相手は一言呟き、一本だけ握り込まれていなかつた人差し指を曲げた。

タン、と軽い音が響き、似合わぬ重い衝撃がこめかみを掠める。耐えられずに体ごと吹き飛び、暗闇の中に放り出されながら必死に手を伸ばし……

「うわ……あ」

双羽は、ベッドの中で両手を中空に伸ばした姿勢のまま固まつて

いた。バクバクとうるさい心拍を落ち着ける。今のは、何だ？

「あ、ちょっと明るい……」

東かどうかは知らないが、空が白み始めていた。少し、眠ることができるたらしい。

……それにしても、田を閉じる度あのようなものを見せられてはたまつたものではない。これ以上の睡眠は諦めるべきか。

「ふああ……っく

欠伸を噛みしめ、うるさいと寝返りをうつ。すると、田の前に夕依の寝顔が現れた。

……所持金の関係、同じベッドで寝ていたのだ。忘れていた。

静かに寝息をたてているが、恐らく触れでもすれば即座に跳ね起きることだろう。場合によってはそのまま拘束くらいされるかもしれない。

彼女には非常にお世話になっている。これからも、しばらくはそのままだろう。いつかお返しをしたものだ。元の世界へ帰ってしまう前に、いつか、きっと。

「ふわあああ……」

……そんなことを考えつつ、今度は遠慮なく大欠伸をかます双羽であつた。

第捌話 霧奥小屋・ぬまの「いや（前書き）

ちょっとこいつもより長めです。
いつもが短かれるだけだとこいつ意見もあり。

第捌話 霧奥小屋・ぬまのこや

昼少し前の16の刻、本来であればふたつの太陽が燐々と大地を照らすこの時刻。薄く広がる靄の底を、2人の旅人が進んでいた。太陽光は何重にも遮られ、僅かな薄明かりのみが申し訳ばかりに視界を白く染める。

この靄、なにも異常気象などではない。エサンから東部へ広がる広大な湿原地帯、特にここ北部の沼地では日常茶飯事の光景である。悪い足場にこの視界不良を加え、このあたり一帯は特に旅人に人気の無いルートなのだ。

「ま、僕には足場云々とか関係無いけどねー」

「……何言つてるの……？」

急に横で謎の台詞をのたまい始めた連れには、冷たい視線を送つておいた。ただでさえ歩き辛いこの道、すぐ隣で空飛ばれた日にゃ、こんな視線のひとつやふたつぶつけたくもなる。

「えーと……あ、そーだ力ナちゃん、その小屋まであとどれくらい？」

「もうすぐそこ」

小屋、とはこの寄り道の目的地だ。元々夕依が立ち寄る予定だった場所もある。

……実際のところ、小屋というのは通称だ。その実、外見以外は“小屋”なんものでは決してない。そもそも、アレを建造物と定義していいのかどうか。

と、そんなどーでもいいこと考える内に、目的地が見えてくる。

「ここよ」

「……えーっと、ここ? 小屋なんて見えないんだけど……」

「……メセシドアヤニエノサハヌハスウアヌウイテ」

きょろきょろと周囲を見回す双羽を無視し、夕依は小声で一息に呪文を呴いた。

その言葉に呼応するかのように、ごく一部の靄がすっと晴れる。視界が少し広がり、焦げ茶色の小屋が姿を現した。……どう見てもこの程度の靄で隠れ切るほど大人しい色合いでない、なんてツッコミは無粋である。なんたってこれは“魔法”なのだから。

「うわあ……すつ、こいね……」

「これで驚いてたら、中に入つて心臓止まるわよ」

先も言つた通り、これが小屋なのはほぼ外見のみ。本当に凄いのは中身なのだ。

万が一迷わないよう、もう一度経路を脳内に構築し直す。これで良し、と頷き、ちんまりとした扉を押し開けようとしたあたりで双羽に呼び止められた。

「あのや、さつきもじもじ言つてたのつて、何？」

「……呪文よ。普通の魔法使うのに必要なもの」

「そーいえば言つてたね、僕たちの魔法は呪文無しで使えるのが強みだ、つて」

同時にそれは、その魔法を使うのが来訪者であるという事をもしつかりと示してしまつ。

この世界において、本来呪文を必要としない魔法など存在しない。ここでは日常の隅々にまで浸透している魔法だが、そんな日常生活レベルのものでさえ一言一言は何かしら唱えるのだ。

基本的に魔法の威力と呪文の長さは比例するため、戦闘魔法などはそこそこの長さになつてしまつ。魔法道具の場合は直接使うよりもシだが、まあ比例関係に關しては変わらない。無言の魔法行使は、この世界の常識からすれば異常な出来事と言える。

「……んー、それじゃ、力ナちゃんつて普通の魔法も使えたんだね」

「今のは魔法道具。あの雷の指輪と似たようなものだから……」「ほへー」

どちらかと言えば、この小屋 자체ひとつの大好きな魔法道具だ。靄による隠蔽は機能のひとつに過ぎない。

とりあえずは双羽の疑問も終了したので、小屋へと足を踏み入れ

る。扉の奥は光の射さない真つ暗闇だ。微かに踏むべき地面の存在だけは認識できる程度。

「……ま、真つ暗……」

なんだか双羽の声が震えている。巨大ムカデに突っ込んだ人間が、暗闇なんぞを怖がっているとは考えづらいのだが。

「すぐ明るくなるわよ……ほら」

さらに一步進めば、す、っと視界が色を持つ。いつの間にやら、周囲には巨大な石柱が整列していた。古代ギリシャの神殿、と聞いて一般人がまず思い浮かべそうな、そんな光景である。見える範囲ずっと石柱というのは、さすがに大きすぎる気もするが。

「……何さ、これ」

「半分は幻で、半分は袋小路になってるの。……迷わないように、ついてきて」

柱を数えながら真つ直ぐに進み、23本目の柱の手前を左へ曲がる。その先にもさらに同じような柱列が続いているが、次はすぐに右の柱の間へ。抜けた先は、ゴツゴツとした岩肌の洞窟だった。

思わず後ろを振り返り、どう見ても洞窟の出口にしか見えない光景に首を傾げる双羽。

「……気にしてたら始まんないね」

彼も、ようやつとこの場所の鉄則を理解したようだ。背景の変遷「」ときた一々反応していればキリが無い。

「次はこっちよ」

更に進んで3つ目の横穴へ潜り込み、次の多分岐を右の2番目へ。続くアスファルトのトンネルを真つ直ぐ抜け、出てきた巨大な木のウロから裏側へと進む。目の前に現れた火山地帯の火口を大きく迂回し、遙か下に青白い氷河の流れを望む吊り橋を渡ればそこはどこぞのお堂であった。

「次は、縁側に沿つて左に……」

「カナちゃん、こんな道よく覚えてるねー」

「…………」

まあ、彼女はこの場所を作った張本人なのだから知っているとか
そんなのはどうでもいい話。双羽の疑問には答えず歩を進める。

左へ曲がった後はすぐ突き当たりのお堂に入り、階段を下りてから……

「カナちゃん危ない！」

「……！」

先の道を考えていたためだらう、少し反応が遅れる。とつさに飛び降りた木の床に、丸太のような腕が突き刺さっていた。

「ウガアアアー！！」

幸いその腕の主はすぐにでもこちらを襲うつもりは無いらしく、様子見とばかりこちらを睨みつける。その間に地面を転がった夕依は体勢を立て直すことに成功した。

「……カナちゃん。このゴリラもどき、何？」

「……よく分かつたわね、ゴリラもどきよ」

立ち上がった夕依の隣へ、双羽が飛び降りてきた。相対する土気色のゴリラっぽい何かは、引き抜いた腕を振り回している。威嚇のつもりだろうか。

「これ、無視して行つてもいいのかな？」

「ウグウウウ……」

「……後ろから殴り飛ばされてもいいのなら、別に」「よし、倒そつか」

「ウグ、ガアアツ！」

す、っと籌を前に出す双羽。やつと動く気になつたのか、ゴリラもどきも地面へ飛び降りてきた。が、そんなもの待つ必要はない。

「呪術・金縛り」

着地寸前で体を固められたゴリラもどきは、バランスを崩してすつ転んでしまう。それでも流石に力が強く、すぐ夕依の魔法を払いのけた。

「せえいつ！」

「ウガアバツ！？」

直後、双羽の笄がその頭を地面へ縫いつける。のつけから頭部狙いとはまた恐ろしい話だが、残念この怪物の弱点は別にあるのだ。

「……双羽、背中の塗みよ」

「りょーかい！」

「ガアツ！」

笄を小さくすることで引き抜く双羽。その足を払うように右腕が振り抜かれるが、既に双羽は笄と共にその頭上。それでも素早く反応し、右手に降り立つた双羽を次は長い左腕が押しつぶした。

……そして、そのままの姿勢でゴリラもどきはバラバラと崩れ落ちる。ついさっきまで怪物だった土塊を、双羽がこつんと蹴り飛ばした。

「……悪夢・どっぺるゲンガー……」

魔法によって、右手に着地してそのまま叩き潰された双羽、の幻を見せたわけだ。おかげでゴリラもどきはその弱点を無防備にさらすこととなつた。そこを双羽が笄でフルスイングしたのである。

「いっちょあがりー、つとー！」

笄をしまい、双羽がこちらへててつと駆けてきた。それを横目で確認しつつ、夕依はとある疑問に首を傾げる。

あの土の怪物、魔土偶というのだが、この小屋に元々置いてあつたものだ。そこはいい。ただ彼女の記憶が正しければ、あれは作動させ続けるのに呪文を必要とするものだつた。一度の起動呪文では3日しか動かず、止まる度誰かが起動させ直す必要があつた。そして夕依の知る限り、少なくとも一年と半分前の時点で、小屋は無人だつた、ハズだ。

つまり、ここ3日以内に何者がこの場所へと忍び込んだ可能性が高い。しかもあんなものを起動させているという事は、そこそここの小屋に詳しい人物か。ということは、今もここに滞在していると考えた方が良いだろう。

……一瞬その侵入者として最も確率の高い人物を思い浮かべ、夕依は軽く頭を振った。この先にいるのが“彼”だなんて、考えたく

もない。

「力ナチャーン、早く行こー」

思考に没頭し、双羽を待たせてしまったようだ。

一度縁側へ上り、先のお堂へと歩を進める。目的地へと近づきながらも、この異空間への警戒を強める夕依であった。

小屋の最奥に位置する研究室兼物置、その中でも特に堆く積まれた本の山に、白衣を纏つた長身の男が腰掛けっていた。簡単な発火装置から取り出した即席炙り肉を右手に、絶賛早めの昼食中だ。

……と、侵入者発見の警報が鳴つた。大切なランチタイムの中斷に眉を寄せつつも、彼は横手の棚に立て掛けあつたガラス板をのぞき込む。普段すつきり透明なソレには、丁度巡回させていた魔土偶が侵入者たちを奇襲する様子が映し出されていた。

ここに置いてある物の中には、なかなかに貴重な品も数多く交ざつていて。そのため、普段から警戒用に魔土偶を巡回させているのだ。

……それでも、あの体勢からあの攻撃を避けきるとは。手前の黒マント、中々戦い慣れているようだ。まあ、あそこですぐ追撃に行けない魔土偶の頭の弱さもあるだろうが。

対して奥の少年、こちらはなんだか色々と測り辛い感じがする。どうからど一見ても弱そうなのに、いざ相対すると足元掬われそうな、そんな雰囲気。……さればかりは、実際に向き合つてみないと何とも言えないだろう。

「ククク、お手並み拝見、といかせてもらおつか

念のため、今侵入者を襲撃している腕部強化型以外の魔土偶を全てこの部屋へと召集する。今自由に動かせるのはアレ含め7体だ。一瞬部屋の前に残り6体並べておいてやろうかとも思った。が、仮に腕部強化型を突破していくような相手ならば、そんなものの威嚇に

すらならないだろう。単純な戦闘力ではアイツが最も優秀なのだ。

「……む。思つたより早かつたな……」

そうこうするうちに腕部強化型は頭と弱点を粉碎され、ただの粘土塊になっていた。いくら小手調べといえ、予想よりも大分と早い。こうなると、他の魔土偶は戦力外と見た方が良さそうだ。

そう判断した白衣の男は、手元の魔土偶を全て“休止モード”に切り替えた。手のひらサイズの土人形となつたそれを、隣の物置に放り込んでおく。無駄に物資を消耗させるのは愚策以外の何ものでもない。

「そういうえば、まだ昼食終えていなかつたな」

もう少しすれば、あの侵入者たちによつて食事時間なんぞどこかへ消え失せることだろう。そうなつては困ると最後の炙り肉を口へ丸ごと放り込み、飲料水で流し込む。

「……むぐ。う、がほつ、『ごほつ……』

……急に飲み込みすぎたらしい。盛大にむせたのを水で無理矢理押し止め、なんとかかんとか呼吸を取り戻したあたりで部屋の戸が勢いよく開けられた。なんだか、最大限無駄な時間の使い方をしてしまつた気がしなくもない。

「……誰？」

視線の合つた黒マントが、開口一番警戒オーラ全開の一言を発する。

「ふむ、それは住処へいきなり不法侵入されたこちらの言づべき台詞だと思うのだがどうだ」

「それもそだね」

「そうだろう」

「……」

何故かこちらに同調した笄の少年とアイコンタクトを交わし、頷き合つ。彼とは気が合いそうだ。

「何無言で意気投合してるので……」

「出会いは大切にすべき、そうだね。……それより、そのまま立

ち話というのも何だ、適当なところに座るといふ

見た目こそ幼い2人だが、その実、腕部強化型魔力偶をモノの数秒で破壊してのける猛者たちだ。でき得ることなら話し合いか何かで穩便に済ませたいとこら。

先に襲撃しておいてと言つかもしれないが、こればかりはじょうがないことだ。そこはもじゴネられてもなんとか納得してもらわなければいけない。

「何か用事があつて来たのだろ？ まずは話を聞こう

「誰が見知らぬ人間に……」

「わわ、このボール何！？ すっ、ぐく綺麗だよー。」

「……」

むやみやたらとドリドリしてくる黒マントに対し、好奇心満載で部屋に飛び込んでくる少年。少しばか他人を警戒しろと言いたいところだが、まあこのタイミングにおいては非常に助かるわけで。

「……うむ、その玉は位置把握センサーといってな。別の玉を登録すると、それのある方向と距離を……」

渋々とばかり足を踏み入れた黒マントを横目に見つつ、少年にこの部屋の道具についての解説をする。どうも様子からして少年は付き添いらしいので、用件は黒マントが口を開いてくれるまで一時保留だ。

「これはー？」

「つむ、”ひとつ押すとそのほか全部が震える石”という魔法道具だ。名前は長いが効果はそのままだな」

「それじゃ、このドク……」

「…………白河は、どこ？」

突然、黒マントが口を挟んでくる。だがまあ元々無視するつもりも無いため、しっかりと答えておこう。

「白河というのが白河 貴斗のことならば、知らんな。まあその人物自体は知っているが

「それはそうよね……それじゃ、あなたは誰？ ……どうして、こ

「にいるの？」

やつと話が進みそうだ。少年と魔法道具の話をするのも良いのだが、零下の視線に晒され続けるのは精神衛生上得策でない。

「俺の名は、大田宮 華月^{おおたみや かつき}。名前で分かるだろ？」が、来訪者だ。
「……で、こちらとしては次の質問に答えるのもやぶさかではないのだ
が、その前にそちらも名乗るのが礼儀ではないか？」

「こちらだけ名乗ったままというのもなんだか不公平だ。それに、いつまでも“少年”や“黒マント”と呼び続けるのも何だろ？別に今から喧嘩するわけではないのだから。

「……私は、金峰 夕依よ。こっちの騒がしいのは把臥之 双羽。
付き添いみたいなものだから気にしないで」

「まあ、だろ？」「さて、二つ目の質問だが、まあ俺は端的に言えれば居候といつやつだ」

「……居候？ 白河とは……」

「まあ待て、質問はひとつづつ、だ」

さつきから妙に白河について食いついてくる。そもそもここに入れたことからして、あの変態の関係者だろうか。……にしては真人間のようだが。

あと、ずっと話に付いてこれずふてくされている少年が見てて面白い。

「……俺が召還されたのは、ちょうど8ヶ月ほど前だ。正確な期間は分からんがな。で、しばらくは右も左も分からずさまよっていたワケだが、すぐに空腹で行き倒れた。そこを白河に助けられたのによ

まあどうせヤツのことだ、小屋の出入りの邪魔になるとかそんな理由だったのだろう。

「白河が、ここにいた……」

「まあ、ふと立ち寄つただけだつたらしいが、な。すぐまたどこかへ出掛け行つたのだが、そのとき俺をここに置いていったわけだ。誰もいないよりはマシ、とか何とか言つていたが

「……そつ

とりあえず、向こうの疑問は解決したらしい。それならば、次はこちらの番だ。

「さて、次はそちらの目的を話してもらおうか。俺に会いに来たわけでは無からう。こそ泥などの類でもないようだしな」

「……目的は似たようなものよ。ここに置いてある私物を回収に来たの。……昔、ここにいたから」

「ふむ、なるほど」

実のところ、華月にとつてここに置いてある物はそれほど大切でもなかつたりする。どちらかと云うとこの隠れ家自体を気に入つていただけで、魔土偶の警備はそのついで。仮に強力な侵入者でも來たときは、迷わずここに品々を差し出していたことだらう。

つまりどこ、夕依の目的はこちらの利害と何ら相違無いという事だ。回収目的が私物だというのであればなおさらである。多少そうでない物を持つて行かれたところで懐は痛まない。

「つむ、それならば問題無いな。好きだけ持つて行くとい

「好きだけ、つて……」

少しの呆れを滲ませつつも、棚にある魔法道具を選別し始める夕依。なんとか安息の地の平穏は守られたようだ、と肩を下ろす華月は、しかし重要なことを忘れていた。

……“いつも騒がしいヤツが静かなとき、口クな事はない”。この世の定理N.O. 1-13である。

「……む、何の音だ」

突然、隣の部屋から何かを叩きつけるような音が響いてきた。まるで数体の魔土偶が暴れている音にも聞こえるがそんなバカな。

「……何、この音」

「いや、少々思い当たる節が無いことは無いのだが……。む、そう言えばあの把臥之とかいう少年は?」

嫌な予感がする。

見回す華月の視界の端に、ガラス製のドクロを持ってひっくり返

る双羽の姿が映つた。……嫌な予感がする。

「……まさかとは思うが、貴様……」

「ん、なーに?」

「そのドクロ型と視線を合わせたまま、棚の上から飛び降りたりはしなかつただろうな……?」

「あれ、なんで知ってるの?」

「ぬぐおお……」

……まさか、あのドクロの発動条件“皿をしつかり合わせたまま自分の身長以上の落差を飛び降りる”を室内で実現するヤツがいるとは。世の中はなかなか広い……ではなくて。

「……で、双羽君のその変な遊び、何か問題でも?」

「あのドクロはだな……所有者に強力な不運をひとつだけ呼び込む魔法道具だ」

「不運……」

「ちなみに、今の行動で発動条件は満たされてる」

「そう言えば……あの音、魔土偶よね……」

「察しがいいな。まあ、そういうことだ」

あのとき華月は、魔土偶をすぐ再稼働可能な休止モードで隣部屋へ放り込んだ。何故に完全停止させなかつたのかといつあたり悔やまれるが、まあ今更言つてもしようがないこと。

「え、つと……僕、何かした?」

相変わらず付いてこれでない双羽は、今回に限り軽い殺意の対象だ。誰のせいだと思つてゐる。

「とりあえず把臥之とやら、簞を出しておけ。……来るぞ」

轟音と共に、部屋のドアが吹き飛ばされる。それによつて壁に空いた穴より、一ちらを睨む6対の目。

今回ドクロのもたらした不運、魔土偶の暴走だ。全部一気に来たのは予想外だったが。

「あ、さつきの粘土マン」

「……貴様の蒔いた種だ。死ぬ氣で何とかしろ」

「はーい」

さ、つとそれぞれの構えをとる3人。少々奇妙な即席メンバー、
ただし兵力としては十分だ。

……相手の出方を窺いつつ、なんでこんなことになつたのかと内
心頭を抱える華月であつた。

第九話 白衣字魔・かつき（前書き）

早々に一日置き連投稿は断念しました。話数2桁になるまで続かなかつたぜ。

とりあえず次は3日に一回投稿日指します。なんたって、こんな短いので週一とかやってちゃ終わらないですから。

第九話 白衣字魔・かつき

頭が、痛い。別に頭痛を発症したわけではなく、何かしら能力が覚醒しそうになつてゐるわけでもない。

しかし、今夕依は頭が痛かつた。原因是主に最近出合つた旅の連れの行動に拠るものだ。

「力ナちゃん、一体そつち行つたよ！」

件の原因の呼ぶ声で思考を現実に引き戻す。今は戦闘中、それ以外のことは一旦頭から追い払うべきだらう。双羽をとつちめるのは後回し。

迫り来る牛頭の魔人が振り上げた左手を見据え、落ち着いて右に回避する。

「しつかり押さえておけ。俺が崩してやる！」

「……呪術・金縛り」

ちょうど今襲つてきたのは、暴走した6体のうち3体目の魔土偶だ。戦闘場所は再深部の物置から移動し、どこぞの神社の境内となつてゐる。

「さて、貴様にはこいつをくれてやるつ。……“貫け”」

動きにくそうな白衣を翻し、意外な素早さで魔土偶へと接近する華月。動きの止まつた魔土偶の弱点に、手早く“貫”的一文字を書き込む。その墨汁滴る絵筆がどこから出現したのとかは、多分聞いてはいけないのだろう。

……数瞬後、牛頭人身の魔土偶は、その背から腹へと貫通した大穴によつて膝をついた。力を失つた土人形は自重に耐えられず、白い砂利へと崩れ落ちる。

「ざつとこんなものだ」

華月の魔法、どうやら字を書き込むことによつてそれに応じた効果を發揮するモノらしい。発動に一手間掛かるものの、汎用性と威力はかなり高いようだ。即効性に優れた夕依の魔法とは対極に位置

する性質と言つていいかもしない。

「もひとつ行くよ！」

双羽からのかけ声に反応し、次の相手を視界に捉える。不細工なライオンとしか表現できない四足歩行の獣が、こちらへ顔を向けていた。その更に奥では、残る2体の魔土偶が双羽の駆る箒に翻弄されている。

双羽がその機動力で敵を牽制、集団から外れた魔土偶をタリ依と華月のコンビネーションで速攻撃破。やり合いううちに自然とできあがつた配置だ。相手が単純思考のみの人形だからこそ有効となる戦法でもある。

「……悪夢・見上げれば釣天上」

「乾け」

何かにつられて魔土偶が上を向く。その隙に足元へと潜り込んだ華月によつて、その両の前足はパラパラと崩れ落ちた。“乾”の字が、粘土細工から水分を奪い崩壊を促したのだ。

そうやってバランスを崩して地に伏した魔土偶の背の弱点を、華月が思い切り踏み抜く。

「ていやーっ！」

見れば向こうでは、ちょうど双羽が魔土偶の弱点へと箒諸共体当たりを敢行したところだつた。同時に箒の先端を突き刺し、箒自体を伸ばすことでその場より離脱。横手より襲い来る尻尾の一撃を回避してのける。

「貴様が最後だな。……“壊せ”」

完全に双羽へと注意を向けていた最後の一體は、華月によつて文字通り弱点を“壊”され、沈黙した。

「……終わった」

「ふう、疲れたー」

「そもそもが貴様の自業自得だがな」

なんだか茶色い土だらけになつてしまつた神社の境内を眺め、三者三様に呟く。

……ふと、華月が双羽を見据えた。

「把臥之、貴様は強いな。相性の問題もあるといえ、魔土偶を複数体同時にあしらひとは」

「空飛べるって、便利だよねー」

「……余程戦い慣れているようだが」

「この世界に来たの2日前だけどね」

「そうか」

それだけ言って、いそいそと泥を片づけ始める華月と泥で遊び始める双羽。

なんとなくあぶれた夕依は、とりあえず再深部の物置へと戻ることにした。一時は住んでいたこともある場所なので、一切迷わず目的地へと辿り着く。物置はふたつ並んでいるのだが、今はそれぞれドアを内と外に吹き飛ばされた状態だ。これはなかなかに滑稽な光景である。

「……これと、これ……あ、これ、壊れてる……」

元來の目的通り、置きっぱなしにしていた私物や役立ちそうな魔法道具を回収していく。いくつか先の戦闘時に壊れたと思しき物があつたのは残念だ。この塔を象った置物など、お気に入りだったのだが……

「……ふう……」

一通りめぼしい物を回収した夕依は、堆く積み上げられた本の山に腰掛けつつ溜息を吐く。意外と安定していて座り心地も良い。考え事にはお詫び向きだ。

……あの、華月という青年。どうやら夕依の昔の知り合いと縁ある人物らしい。彼の言っている経験が本当かどうかは分からぬが、まあ嘘は混じつてなさそうだ。あと、こちらと敵対したくない、という意思が見え隠れ、というか見えまくっている。敵意が無いのも真実と見て良いだろう。

ただ、単に今までここに住んでいただけとは思えない。先の戦闘では、自らの魔法の特性を理解し、使いこなしていた。あれが相手

無しの鍛錬だけで修得できるモノだとは考えづらいのだ。嘘を言つてはいなくとも、眞実を全て伝えたわけではないのだろう。

「……敵でないなら、別に何でも……」

別にこれから生死を共にするわけでなく。少しばかり一緒に戦つたりもしたが、それだって一時の同盟関係。立つた今敵対しないのであれば、彼についてこれ以上考えることも特に無いだろう。

「……疲れた」

戦い続きの疲れもあつたのか。そのままの姿勢で、ウトウトと船をこじき始める夕依であった。

……

双羽にとつてこの異世界での3泊目は、なんだか変な小屋でとることとなつた。夕依はなんだか嫌がつていたが。彼女の元々の予定では今日中に沼地を抜け、その先の草原地帯で野宿をするはずだったとか。しかしあの騒動に時間をとられていたため、結局は小屋で寝ざるをえなかつたのだ。というか、そんなに小屋にいたくなかったのだろうか。

「……双羽、何笑つてるの」

「わ、笑つてないけど……」

「じゃあ黙つてて」

「ふひゃい」

そして、今現在。双羽一行は昼下がりに沼地を抜け、その先を歩いている。……のだが、彼女がなんだかとつても不機嫌なのは何故だろう。

口調とかいつも通りだが、明らかに言つてることが理不尽だ。だけど双羽のチキンハートでは逆らえる気がしない。なるほどこれが世の不条理というヤツなのかそうなのかな。

「どうした金峰、まるでこの世の眞理に気づいた肉牛みたいな顔して……」

「「つるさいわね」

そしてまたその不機嫌の原因 8割方を占めるであろう人物が余計なことを言つ。翻る白衣にマッドサイエンスなその横顔、文字魔法を使う華月だ。

……なんと今、彼は双羽たちと同行しているのだった。
「ほつ、つるさいと。しかし口を開けば音を発するのは人として当然の」

「じゃあ閉じて」

どうも夕依、華月が付いてくることが不満なようだ。なんで不満なのかはさっぱり不明なのだが、それが不機嫌の原因なのはまあ十中八九間違いない。

「まったく。把臥之、よくこんなヤツと旅できるな」

「えと、いつつもこんなんじやな……」

「黙つてて」

「ふひやい」

もう会話への参加すら許可してもらえないこの状況。理不尽だ。どうも夕依、華月ととことん馬が合わないらしい。華月の方はわざとからかってる節もあるが、夕依は本気だろう。イライラしているのが目に見える。

「双羽。籌降りて！」

「え」

「降りて」

「ふひやい」

まあどうでもいいと言えばどうでもいいのだが、こちへとばつちりが来るのは頂けない。

「くくく……そうか、嫌よ嫌よも好きの内、と……」

「……バカじゃないの？」

「残念、バカと言つた方がバカなのだよ。小学生でも知つてている知識だ」

「……」

……新しく増えたこの同行者、とりあえず賑やかな旅だけは約束してくれそうだ。

ベンフィード公国から北西へまっすぐ、更にまっすぐ行けば、とある山脈にぶつかる。連なるのは、赤茶けた岩肌の見える険しい山々だ。名をキシニイ山脈という。

険しいとはいえた草木一本も生えないほどでなく、人といふ逞しい種族はこの場所にもちらほら村を造っていた。

そんなこの地に住む人々の間で、聖地とも地獄の入り口とも言われる場所がある。レケヲク、と呼ばれるその渓谷には、死者の靈魂がさまよっているとされていた。実際ここへ入り、狂氣を持つて帰ってきた者も多くいるため、この話は広く信じられている。実害もでているのだから、誰だってこんなところにすき好んで入らないだろ？

……そんな渓谷に、討伐隊より命からがら逃げ出した盜賊団が身を潜めた。ある意味苦渋の決断だったと言える。

また、とある女性がここではないどこかより降り立った。よくあることでは決してないが、そこまで極端に珍しいことではないかもしない。

そしてこのふたつは、出逢うべくして出逢った。それが結果何を引き起こすかなんて、誰も知るわけがなかつたのだが。

第拾話 森中旅事・あるひもりのなか（前書き）

なんだか夕依ちゃんの性格がぶつ飛び気味。初登場時から「ここに至るまで大人しくしてた筈なのに、どうしてこうなった。

第拾話 森中旅事・あるひもりのなか

盛大に捻れた樹の群生する森の中を、3人は歩く。捻れてるところまでは草原の木と何ら変わりないのだが、実際にはこの森の木の半が別の種類である。

「……実は私、この森通るの初めてなの」「奇遇だな、俺もだ。……話に聞くのと实物を目にするとのとでは大きく違うものだな」

足を動かしつつも、どこかひきつった顔の夕依と華月。2人の視線は前方よりやや上方へと向けられている。そしてその先には、群れて実る真っ赤な実がたくさん。この木、年がら年中実を付けているのだ。

がしかし、それだけならばこの2人にこんな表情をさせるのに不十分だらう。そう珍しい話でもない。

問題は、この木の実の表面にそろって浮き出でている模様にある。「……全部こつち見てる気がする……」

「やめる、いくら何でもそれは気味悪過ぎるだらう。よくあるモナリザの怪談みたいなものだ、そう思え……」

実の上部にいい塩梅で並んだ2つの窪み、その下で少しだけ頭を出す突起物。更に下には緩やかなし字を描く溝が刻まれ、縦に長めな実の輪郭と細かく枝分かれしたヘタ部分が外形を整える。

……この森の木の実、人間の顔にしか見えない、ということ有名なのだ。しかもその色は真っ赤な上、ちょうどビビッドな人面サイズ。不気味なことこの上無い。

夕依は長い旅暮らしで、華月はすぐ近くに住むが故よく話だけは聞いていた。そのときは、とにかく不気味だったと連呼する体験者を訝しく思つたりもしたものだ。

なるほど、これは見てみれば分かる。頭上から無数の顔に見下ろされる光景はいろいろと圧巻で目に悪い。

「うーん。あれ、食べれるのかな

「……試してみたら?」

そして、着眼点が他とは一次元違う通常運転な双羽。夕依の言葉に頷くと、すぐに箒を駆つて木の実のなる高さまで飛んでいった。清々しいまでの有言実行つぶりである。

「……そう言えば、毒とか無いわよね、あの実……」

「知らずに言ったのか貴様は」

最近なんだか扱いの酷い双羽である。

「しかし、まあ安心し。あの実に毒などそいつた類のものは無い。……どのみち食つことはできんだろうが、な」

「……?」

一応地元の人間ということで、華月の方が情報量も多かったらしい。夕依は双羽を毒殺せず済んだことに安心しつつ、彼の言に首を傾げた。

……3秒ぐらいでその疑問は解消したが。

「んじゃ、頂きまーがつ……!?!? ……!?!?」

「……と、いうわけだ。堅すぎてまず普通には食えん

「そういうことね……」

思わず木の実を取り落とし、空中で器用に悶絶する双羽。思い切りかじりついたため、かなり痛かつたらしい。

そして、それを横目で見つつ解説する華月と納得する夕依。やはり双羽の扱いはこんなもんだ。

ちなみに落下した木の実は、「ゴンと鈍い金属音をたてて地面へとめり込んだ。そりや歯が立つワケが無い。

「痛いよ……」

「う、と涙目の双羽がゆらゆら戻つてくる。そして夕依の隣にぺたんと着地し、そのまま歩き始めた。双羽が箒に乗らず歩くとは口は重傷だ、余程痛かつたらしい。

……気が付けば、夕依の手はその頭をぽんぽんと撫でていた。何故だろう、違和感が無い。

「何をしていいのだ貴様らは」

「……」

そのまましばらく撫で続けていると、さすがに見かねたのか華月がツツコムを入れてきた。少し慌てて手を離す。

いや、本当に何していたのだろう。双羽はと見ると、先の涙目はどこへやら。ここにこと満面の笑みを浮かべている。

「さて、貴様らそこでわけの分からんことをしていたから氣づかんかったのかもしれんが……アレは、何だ」

華月が森の奥を指さしたので、これ幸いとそばへ田を向ける。

白い団まりがいた。

「……何、アレ？」

「俺が今聞いたところだろう。知るか」

具体的には、“どうからぞ一見ても何者かが真っ白な布を頭から被つたと思しき物体”がヒヨコヒヨコ踊っていた。黒く田が書き込んであるあたり、何だろ、幽霊の扮装なのか。素晴らしいまでにこの森とミスマッチだ。

「はつはつは、私はこの森の主だ、命が惜しければ荷物を置いて去れー」

そして、喋った。しかも一言田の内容が、コレついでに酷く棒読みである。

何がしたいのか、はよく分かったのだが、その他色々がさっぱり不明だ。

「……大田富。コレ、どうするのよ」

「選択肢は、1・無視する、2・埋める、3・消すの三択だな。他には思いつかん」

「はつはつは、やめたまえ、そんなことをすれば罰が当たるぞ……つて、消す！？」

思わずツツコムんでくるあたり、言動にそぐわぬ常識の持ち主なのかもしれない。しかしそうすると、次はこの状況の謎がより一層深まるわけなのだが。

あと、埋める、は別に構わないらしい。

「ちなみに俺は3推奨だ」

「……私は1で」

でき得る限りこの手の人間と関わり合いたくない。
「ふむ、ならば把臥之はどれにする……と、どうした把臥之?」

「……?」

そう言えば。こんな状況で真っ先に口を開きそうな双羽が、今回
に限り全く言葉を発していない。具体的には木の実をかじった後ぐ
らいから。

見てみればその双羽、顔色を真っ青にしてブルブルと震えている。
ただでさえ小柄なのが更に一回り小さくなってしまったようだ。

「……お……お……」

「……お?」

「お、お化けーーー！」

突然叫び声をあげる双羽。そのまま、ぱしゃっとものすごい速度
で前にいた華月の背へ隠れる。

「どうやら彼、怖いらしく。この白いのが。どう考えたって、あの

木の実の方が余程気味悪いと思うのだがどうだ?」

「はつはつは、そうかそうか、この私が怖いか」

さて、ここでの状況を喜ぶのがひとり。件の白いヤツだ。
「はつはつは、さて貴様、命と荷物、どちらが惜しい……?」

「う……う……」

「はつはつは、そうだな、まずは貴様を食ぶぎやつー?」

「……邪魔」

なんだか調子に乗り始めた白いのをやぐざキックで蹴り飛ばす。

華月が双羽の防護壁役に忙しいため、これは夕依の役目だ。

顔面に蹴りが直撃したらしい白いのは、もんぢりうつてそのまま
一回転。木の根に頭をぶつけ転げ回っている。多分押さえている
のは鼻だろう、見えないのでよく分からないが。

「はつはは……痛でええ」

頭から被っている布が邪魔なのか、足をバタバタさせるだけで起きあがる気配が無い。その裾から見えるのが裸足であることになるとなく嫌な予感を感じつつ、夕依はその布を一気に引き取った。

その下には、海パン一丁でもがく細身の青年が……

「…………？」

「はっはっは、おおう」

手に持った布を取り落とし、ピシリとその場に固まる夕依。後ろの香凪たちは夕依の陰になつて状況が見えないのか、特に反応は無い。

「はっはっは…………」「うう」

急に動きの止まつた夕依を訝しげに見る海パン野郎だつたが、そのうち何かに納得したかのように手を叩く。その音に夕依はちらりと反応したのだが、気づかないようだ。

「はっはっは、なるほどよーく分かったぞ、今になつてこの私の恐ろしさを理解して身がすくみゴベ」

皆まで言わせず、夕依の体重を乗せた右足が海パン野郎の顔面を踏み抜いた（非常に危険なのでよい子は真似しからダメ）。その顔に表情は浮かんでいない。

悲鳴すら上げず沈黙する海パン。

……これを見た双羽、後に“このときのカナちゃんはお化けなんかより数倍怖かつた”と語っている。

……

「はっはは……ぬうう……」

日が沈み、残光は木々に遮られ、早くも暗やみに包まれた森の一角。未だズキズキと痛む頭を押さえる海パン野郎がいた。自前のテントの中である。

ちなみにこのテントを出れば、前には2つ別のテントが並んでいるはずだ。片方はあの白衣の男、もう片方はあのおつかない少女と

少年の共同テントである。

「はつはつは、失敗したな……」

自作の幽霊装束で旅人を脅かして路銀を得る計画だつたのだが、のつけから頓挫してしまつた。

あの後気が付くと、何故か拘束されたまま紐で引っ張られていたのだ。この後もう一度出直して襲撃されてもうつとおしい、とのこと。まあ確かに全くではある。

……それにしても、ベンフィード公国までの道のりは長い。

「はつは……さて、どうする？」

何を隠そう、彼もまた来訪者だ。ちなみに双羽たちが3人とも同種の人間であることにもなんとなく気づいている。あの年齢層だけであそこまでお気楽な旅ができるのは、彼が知る限り来訪者という人種ぐらいのものだ。普通ならもう少し気を張つているだろう。

……今彼は、悩んでいた。

初めは普通の旅人を襲撃する予定だつたが、なんと遭遇したのは来訪者×3である。捕らえて換金すれば路銀なんぞ余るほど手に入るだろう。幸い彼の魔法は相手の動きを止めるのに向いているし、彼自身腕に覚えはある。

問題は、今までそんなことやつたことが無いという事だ。むしろ、それを避けんが為に今回のような手段を思いついたのであるからして。

「はつはつは、しかしやらねばならんのだ！」

相手が来訪者であれば、逆に脅しという手段は通じないだろう。この連行にだつて尤もな理由は付いていたものの、このまま町に着けば換金所行きかもしれない。それは嫌だ。

ということで、決行。黒マントの少女は正直怖いし、あの白衣の青年には隙らしい隙も無かつた。よつて最初の標的はあの少年。

忍び足でテントを抜け出し、少年の寝るところまで向かう。まずは奇襲で少年を無力化、できればそのときに黒マントの方も何とかしたい。最後は白衣のアイツだが、勝てるかどうか……

「……呪術・金縛り」

ぴし、という幻聴を聞いた。体が動かない。そして後ろから聞こえてくる声、これはあの少女のものだ。

またものつけから躡いた。なんと彼女起きていたのだ。しかも先手を取られたわけだが、ここはできれば油断しておいて欲しいところ。可能のことなら、このままだの盗人と思われていていい。幸い口なら動く。

「はつはつは、一体どうした、何か用か」

「……他人の寝床に忍び寄つておいて、言うことがそれ…………？」

すぐには、動かない。やるならば、チャンスは一瞬だ。

「はつはつは、いや、中々に大きな懐をしてるようなのでな、つい手が……」

「……来訪者なら、私たち捕まえた方が収入大きいわよ」「はつはは、いや、そこもバレていたのか行け、毒針っ！」

会話中に用意しておいた魔法、“毒針”を後方めがけて多数放つ。一発当たれば、この動きを封じる魔法を中断させる程度のダメージを与えるのはず。案の定、放った直後に拘束が緩んだ。

「はつはつは、予定変更、まずは貴様から」

「……凶運・頭上注意」

「はつは……頭上？」

釣られて、ふと視線が上を向く。お陰様で、彼は上空より飛来する真っ赤な顔面と衝撃のキスを交わすこととなつた。

「はつゴフヒ！？」

落ちてきたのは、この森特有の人面木の実。不気味さと同じくらい堅さでも有名なソレが、なんとピンポイントで彼の頭上へと落下してきたのである。

「ウン、と金属質な音を引き、彼の意識は暗闇へと落ちていつた。

「……」

「おうふ」

「……直後、目を覚ます。いや、強制的に覚ました。

なんとあの黒マント、背中を蹴り飛ばしたのだ。痛い。あと頭がぐわんぐわんといって立ち上がりそうに無い。

「はつはは、何だね、負けた人間に何か用ぶつ！？」

「……」

何故かまた蹴り飛ばされる。わけが分からない。

そう思いながら見上げたそこには、なんだか非常に怖い顔があった。後彼は語る、あの表情は彼自慢の幽霊装束とは比べてはいけなかつた、と。

「……なんか最近、色々とこいつ、溜まってるのよね。鬱憤が」

「はつはは……ソレは私のせいではないと思うが……」

「……このタイミングで、襲撃掛けるそつちが悪い」

「はは……んな理不尽ごふつ」

「……」

彼は、悟った。なるほど、自分はこうなる運命、いや役回りだったのか。

「……」

「……」

「……」

「……」

夜の森に、悲鳴が響き渡った。

「……」

「おはよー。……あれ、力ナちゃんどーしたの？」

「ふむ、妙に機嫌が良いな

「……そんなこと無いわよ……」

「ふーん。……あれ、そう言えばあの海パンの人どこ行つたんだろ

「確かに、姿が見えないが……」

「……目的地が違うから先に出る、つひそつせぬついたわよ

「ふーん」

第拾七話 新町新事・いかとほんとたたかいと（前書き）

……なんだか短いです、いつもに輪をかけて。

第拾壱話 新町新事・いかとほんとたたかいと

沼地を発つて早5日、双羽たち一行はそこそこ大きな町にいた。町の正中線を貫くメインストリート、そしてそのど真ん中に鎮座する時計塔が特徴である。地図と案内板に拠れば、町の名は“ナウェサ”といつりしい。

幸い時計の形式は針による円盤指示だったので読めない事も無い。動力は魔法らしいが、そんなもの外見には関係無いのである。

「うんうん、読めばいいもんね」

「……何言つてるの。置いてくわよ」

今回は夕依の用事にお付き合い、華月はとつてある宿屋で留守番だ。平和な町ではあるらしいが、外に出るときは2人以上が望ましい。忘れがちだが彼ら、一応は追われる身なのである。

エサンに比べて全体に木造建築の田立つ町並みを進む。メインストリートには石が敷き詰められてそこそこ歩きやすい。まあ町間の街道なんかよりマシ、という程度ではあるが。双羽たちの元いた世界のアスファルト舗装なんかとは比べるべくも無い。

メインストリートのあちこちには露天が出ていた。町の雰囲気が落ち着いていること、造りがしつかりしていることからして常設だろう。そのうち一軒、適当に見つけた店へと立ち寄つてみる。鉄板の上には鳥賊っぽい生き物の串焼きが並べられていた。

「うーん……テウエヨの姿焼き？ これ、おいしいの？」

「……この町の名産ね。食べたことは無いけど、見た目はちょっと

……」「

「おー、君らただの冷やかしよりも質悪いってこと自覚してるか…

……？」

焼いている商品を眺めながら正直に感想を持らすと、店主っぽい人に苦笑される。確かに少し申し訳なかつたので、一本買つことにした。

鳥賊っぽいと言いつつも、これが鳥賊でないのは確かだ。まあ足が13本に目が3つで頭部が丁字型になつてゐる鳥賊というのもかなり珍しいだろう。しかもこれ陸上生物らしい。一度生息風景を見てみたいものだ。

テウエヨの生態的謎に挑みつつ、上からカジツてみる。

「……あれ、おいしいよ、これ」

「そう。良かつたじゃないの」

海産物特有の独特な旨味が、いい。同じく特有のクセはあるが、それを補つて余りある……いやこれ陸上生物だつたか。

「力ナちゃんも食べるー？」

「……私はいいわ」

「んじや、全部食べちゃうよ」

どうも夕依はこの見た目が気になるらしい。こんなに美味しいのに、勿体ない。一度食べればヤミツキだらう。これは、特産だか名産だか銘打たれているのも納得の味、値段。いやホント素晴らしい。こうして双羽が食の素晴らしさに目覚め始めた頃。よつやつと田的場が2人の前に姿を現した。

少し周囲より大きめな店構え、そして同じく大きめな看板。そんなもつて一見ガラス張りに見えるほど大きな窓も特徴か。

「ここよ」

「えーと、“ラーシュバジ立本屋”……立本屋？」

看板に書いてある言葉には、聞き慣れない単語が混じつてゐる。まあラーシュバジとかいうのも大概耳慣れない響きではあるのだが、まあこちちは固有名詞だらうと、うことで自己解決。問題はその後に付いてる立本屋というヤツだ。貸本屋なら聞いたことがあるのだが。

「……立ち読み専用の本屋、よ。時間でお金を見るの」

なるほど、つまりと漫喫茶みたいなものだらう。中にはイスも見えるため、ずっと立つていなければならぬといふわけでもないらしい、いや当たり前か。しかし実際ずっと立ちっぱなしの客が見えるあたり、どこの世界でも本の虫というヤツは似たような性質

を持つてゐるようだ。

「……本読むのは、苦手？」

「嫌いじゃないよ。そんな好きでもないけど」

暇潰しとして本を読むのならよくあるが、他の何かに対しても読書を優先させようとは思わない。まあその程度。苦手とは言わないが好きとも言えないだろう。

ちなみにどうも夕依は読書大好き人間だ、おそらく。傍目には何ら変わらないが、立本屋を前にして少しばかり目が輝いている。あと多分これ言つたら怒られる。

「それじゃ、私はここで少し調べ物するから。……適当に本読んで待つておいて」

「はーい」

店の戸をぐぐる。いらっしゃいませー、というカウンターからの明るい声に、2人入る、と夕依。それではこちらに、と差し出された半透明な板に手を乗せる。どうやらこれがタイマー代わりらしい。出るとき差し出せば時間換算で精算できるやつだ。

……とこの店のシステムに感心してゐる間に、夕依は本棚の間をすり抜け姿を消してしまった。今更だがこの店、決行奥行きがある。

「じゃ、僕も何か適当に読んどこ、っと」

大体のジャンルによつて分けられた本棚を物色し、田端での料理の本を見つける。未だ野営続きなのでまともに料理ができる機会はないが、まあこの世界の食を知つておいて損は無いだろう。本を読むとなつたときから決めていたのだ。

「……ふーん、ほへー」

わりかし熱心に読み始める双羽。本自体の質は元の世界より落ちるが、読みにくい程でもない。どうやらある程度の製紙技術はあるらしい。

……さて、実はひとつ、彼は聞き忘れたことがあった。まあそこはなんとなく、と思っていたのが悪かったらしい。何か、と言えば店を出る時間について、である。本好きにこれを伝えず野放すなん

て自殺行為である、と双羽が思い知ったのは、探しても探しても夕依が見つからず閉店時間になつて諸共店を追い出されたときだつた。魔動式街灯に照らされるメインストリートを歩きながら、一度と同じ過ちは繰り返すまい、と心に誓う双羽であつた。

……

夜。暗闇に沈み、その役割を一旦停止させている時計台。もちろん夜だからと止まるわけではないのだが、ライトアップされるとかいうことも無い。よつて夜目の特別利くような人間以外には止まつていると同義だ。

……そんな時計台の端、人影があつた。通常、登れる場所ではない。つまり、この人間が通常ではない、ということ。

「町へ入つたのは3人だが今丁度2手に分かれているようだがどうする」

その口から発されたのは、女性のものと思われる高く綺麗な、そして棒読みの言葉。そこに感情の色は見えない。一流の役者に棒読みを依頼したかのような、声音。

もちろん今は問いただ、ということは問われた者がどこかにいるはず。しかしそんな姿は見えない。そして、見えないままに返答だけがこちらへ届く。

「いや、どうする、つて……」

「……そりやまあ襲うに決まってるでしょう」

一いちらは若い男性、の声ふたつ。中々物騒な返事だ。しかし棒読みセリフの主にとつては予想通りだったのか、何も言わず視線を下ろす。

街灯が裂く闇の中、連れだつて宿屋へ入つていく後ろ姿。遠くに見える、アレが標的だ。

「……いややはりしつかり寝静まつたところを奇襲する」

「いやあ、姉さん……」

「……性格悪いね！」

2人一組で返つてくる返答。言つては適当だがこれも了承だろう。いや、了承しかするはずがない。

「少し待ち合図と共に襲撃する……」

ふ、と田を細め、宿を窺う。しかし、その表情にはやはり何も映らなかつた。

夜も更け、時刻にして2の刻少し前。むくりと起きあがる人影がいた。双羽である。

宿は一室しか取れなかつたため、夕依も華月も同じ部屋だ。ちなみに双羽の横では夕依が寝ている。体格を考慮し、ふたつあるベッドの片方に夕依と双羽で寝ることになった。何故か夕依は反対していたが、まあ妥当な案だということで最後は渋々納得していた。

「…………」

ぽけ、つとした目で部屋の入り口を見る。そのまま、ふらふらと部屋を出た。旅装のまま寝ているのでまあそこは問題無い。

てここで廊下を歩き、階段を下り、宿の入り口に着く。そこで双羽は、ふう、と息を吐いた。伸ばした右手には、いつの間にか簞。目はしつかりと開かれている。

「ゴメンね、宿屋のおっちゃん」

一言呟き、右手を一振り。ちやちな宿のドアはその許容を越えた衝撃によつて吹き飛んでゆく。その後に追随し、宿の外へ飛び出す双羽。メインストリートから一本入つた裏通り、この時間なので人つ子ひとりいない。

……いや、いた。いい感じに飛んでいた扉を、手に持つ剣で叩き落とした人物が。

「ほう貴様は気づいたか」

「……誰さ

「名を聞くならどちらから名乗るのが礼儀とこいつだらけ」「…………」

「」の人物の突きつけてくる、殺氣。非常に久しぶりの感覚だが、どこか懐かしさを感じている自分が嫌だ。

首を振り、きつと前を見据える。

「把臥之……双羽、だよ」

「アリア・ハンケイジといふよろしくでは早速だが死んでもりおつ」「……ま、前置き無しつ！？」

地を蹴り、一足飛びで双羽へと接近するアリア。とりあえず簞に身を任せて距離をとる双羽。片や使命、片やなんのこっちゃな状況の中、戦端は勝手に切って落とされた。

「」せめて落ちる前に一言欲しかったな、とは思わないでもない双羽であった。

第拾弐話 夜宿賊戦・はといわせしー（前書き）

気がつけば戦闘ばかり。 閑話的な書くのって苦手です。

第拾弐話 夜宿賊戦・ばとむやべー

丁度双羽が宿屋の主人に心の中で謝罪していた頃。未だ夕依たちの寝る部屋へと忍び込む影がふたつあった。

「しつかり寝てる……」

「……寝てやがる！」

丁度幼稚園児ほどの体格。双子としか思えないほど似た顔。いや、よく見ればソレが人の顔でないことに気がつくはずだ。その身に赤と緑の色違いの服を纏うこの2人。

「あの少年、いきなり外行くもんだ……」

「……いやもう焦ったけどな。でもここにいらっしゃんといて良かつたぜ」

どういう原理で動いているのかは知らないが、おそらく生物ではない。人形だ。しかもどうやら華月たちを狙って侵入してきたようである。

ふたつあるベッドそれぞれに一体づつ忍び寄りてくる人形。赤いやつの振り上げた腕はいつの間にか鋭利な大鎌に変化している。緑の方はでかいハンマーだ。質量保存の法則どこいったとツッコみたい。

「さて、ここまで旅……」

「…………」「苦労さん、そしてよくならー」

言葉と共に、巨大なハンマーが落下してくる。明らかに本体よりハンマーのが大きいだろ重心どこだよ、ヒツツ「ふんでいる場合ではなさそうだ。

上半身を捻り、ベッドから転がり落ちる。残念ながらハンマーが粉碎したのはベッドの骨組みのみ。……流石にこのベッドは弁償か。これだけ粉塵だと修理とかそういう以前の問題だろう、新調するしかない。

「…………ぬう、俺のせいではないのだがな……」

「……避けただと！？」

驚いたように叫ぶ緑色。なるほど、先からワントンボ遅れで喋っていたテンション高めなのがこちらか。

「こいつら、起きてやがった……」

「……起きてやがったな！」

見れば、夕依も同様鎌を回避したらしい。向こうのベッドは見事なまでにまつふたつ。一晩でベッドふたつ弁償とかギャグにしたって酷い。いや、あれだけ見事な切断面なら接着すれば……いや、無理か流石に。

「金峰、ベッドの弁償は折半という方向でどうだ」

「……絶対、今真つ先に言ひ台詞としては間違ってるわよソレ」

金の話は重要だと思つたが、どうだらつ。先にしておいて大抵損は無い。

まあ、話す相手がいないのでは意味も無いわけで。とりあえずベッドの弁償額についてゆっくり検証できる時間が必要だ。それにはあの人形、邪魔である。

「……しなっちまえばしょうがない……」

「……まともに前から、戦うか！」

ざつとこちらから距離をとり、背中合わせになる人形ふたつ。向こうの戦法、互いに隣接することで精度を高めた連係攻撃、と見た。まあ余り関係無いが。

「俺たちの連けヘエッ……！？」

「……呪術・強制リバウンド」

「……んなー？」

突然赤色が床に沈む。夕依の魔法だ。といふか、そんなところで足止めるからだそちらが悪い。あと、相方がやられたからといって戦闘中余所見するのはもつと悪い。

たつと素早く緑色へ駆け寄る。驚いてこぢりを見るが、まずその反応からして遅すぎる。

「……“重く”なれ

「……ううつ！ お、重つ……！？」

“重”の字を書き込み、縁の動きを止める。書き込む場所は、もちろん額だ。あと重くしたのもタ依に合わせただけである。動きを封じる以外特に意味は無い。

自重でズブズブと床に沈み始める人形2体。まだ口は開けるようだ、ならばその出元とか色々答えてもらおう。

「さて、俺はこの人形共に聞くことがあるが。金峰、貴様はどうする？」

「私は……大田富手伝つけど」

「ふむ……」

……素直でないというかなんと言つか、何だうつ。先から聞こえてくる金属同士の打ち合い音、これを聞く度にちらちらと動く視線。何も言わず行けばいいものを、この年代特有の何かだろうか。面倒な。

「……いや、邪魔だな。金峰、貴様はこの部屋の外へ出ておけ」

「え、だから私も……」

「邪魔だ、と言っている。戸は閉めておくからな、出ておけ」

「ちょ、ちょっと待……」

まだ何か言つてゐるようだつたので、問答無用、扉の外へ押し出す。バタン、と音をたてて戸を閉め、振り返つて人形2体の埋まるところまで近づいた。

……しばらくし、たたたと廊下を駆ける音が聞こえてきた。全く、めんどくさい。

「さて、まずは貴様らがどこで作られたか、といふところからだ

「……そんなもん話すかつて」

「“回”れ

「ギュオオオ……！？」

「……だ、大丈夫か相棒！」

「さて、話すか？」

ドリルよろしく高速回転する赤をひとまづ無視し、尋問を開始す

る華月であった。

相対するのは、女性。アリアという名前らしい。丈の長い和服の
ような服装に片手持ち両刃剣が一本と軽装だが、それがその強さに
一片の曇も落とさないのは身をもつて体験済みだ。なんせ現在、簫
を縦横無尽に駆使してなんとか防戦一方を保つている状態なのだから。

「剣をそこまで受け切るとは中々の腕ではないか悔っていたぞ」

「……せめて、そーいう褒め言葉だけでも抑揚付けて言つて欲しい
よ……」

「以後気をつけよう

たん、と軽い音を残してアリアの姿が消える。いや、そう見えた。
静と動の差が大きいため人間の目は追いつけず、結果として消えた
よう映ったのだ。対処法は単純、一度視界を左右に振る。実際消え
る速度ではないため、中央に引き寄せられた意識を広げてやれば捉
えることはできる。

実際に凝視される人間が消えようと思えば、ある程度衝撃波を
耐え切る化け物でなければならない。そもそも、そんな速度を出せる
時点では十分人外だ。まあ、消えたように見せるだけでも若干人間
を卒業する必要はあるのだが。

「はっ」

「てえいつ！」

がきん、と音がして、双羽の左下方から跳ね上がった剣を簫が遮
つた。逆袈裟、というやつだ、確か。

「たあつ！」

「ふん」

やられっぱなしではジリ貧だろ？ 受けた簫をそのまま回転させ、
相手の剣を持つ手を狙う。当たり前のように逸らされ跳ね上げられ

たうえで突きが返つてきただ。普通ならこれだけで確実に死んでる。

「てやつ」

「ふ」

跳ね上げられた箒を反転、叩き落として突きを遮断。慣性の法則無視な双羽の箒だからこそできる荒技だ。「コレがあるからこそ、彼はこんな半人外相手に粘つてられるのである。

「やはり受けられるがならこれはどうだ」

「おわッ！」

す、と半歩下がるアリア。そこから残像を幻視しそうな速度でこちらの右側面へ。異様な早さの足払いが迫る。

足払い、と判断した時点で双羽は上へ。箒を利用して滞空時間を延ばし……

「はあっ……

「のわあっ！？」

空に浮く双羽の足元から、直角に跳ね上がる剣先。おかしい、あの剣はさっきまで普通の剣だつたはず。じゃあ何だあの慣性の法則無視な動きは。そんなのふたつもいらない。

慌てて箒を真横にし、突き出す。ギリギリのタイミングで、金属特有の衝撃が走り。そして双羽の右上から振り下ろされる普通の剣。「……っ！」

箒を自身に体当たりさせる勢いで後退する。咄嗟に上体を捻ったのだが、右肩が熱い。あと赤い。しつかりかつり切られてる。

今の一撃、二刀流などではない。下から跳ね上げた斬撃が箒を捉えた瞬間、その場で体を反回転させたのだ。言つなれば、胴廻し回転切り、である。

……などと言つのは簡単だが。これは先の説明に修正が必要だろう。半人外とか人間卒業しかけとかいう次元じゃない、こいつは歴とした人外だ。

「今の連撃で仕留められんとは

「いてて……」

幸い斬撃自体は肩骨で止まつたらしく、傷はそこまで深くない。しかし、出血がわりかしシャレにならない感じだ。今すぐ意識がブラックアウト、とはいかないものの、処置無しならその内倒れると請け合いである。

「しかしこれで時間の問題だな」

「いちいち言わなくたっていいじゃんか……」

実際言葉として聞くとゲンナリしていく。そもそも籌が利き手で扱うものでもなかつたのは不幸中の幸いか。

「さてどうだ」

「つととー」

それでも不利は覆せない。防戦一方この極み。跳ねる度響く痛みに顔をしかめる。

左方から来た大降りの一撃を受けると、勢いそのまま右上へ。そこから反転し、右上、真下、そして突きの三連撃が双羽を襲つ。後半受けのを諦め、大きく跳ぶ双羽。

地に足を着いた瞬間、視界が漆黒に染まった。

「わっ！？」

ちょっとした血液不足、それに起因する視界のブラックアウト。一瞬のことではあるものの、双羽の着地を阻害し、かつよろめかせるには十分。

踏鞴を踏むその視界に、研ぎ澄まされた剣先が迫る。

「……やっちゃん？」

「つまりこれで終わりか残念だな」

いちいち剣を振り上げたりはしない。最短経路をもつて双羽を貫くべく剣は走り。

「……呪術・金縛り！」

「おつと」

す、と身をかわすアリア。軽く地を蹴り、間合いを取る。その顔が微かな笑みを浮かべたのは見間違いでないだろう。ゆっくりと起き上がる双羽を庇つような位置取りで、黒いマントが翻つた。

……なんとなく、立ち位置が逆のよつな氣もある。

「カナちゃん。ありがと」

「双羽、血、出でる……」

「ん、大丈夫だよ。……今のところはねー」

一度深呼吸して鼓動を鎮める。やはりこれ以上血液を失うのは非常によろしくない。

「なるほど2対1かそれもいいな本氣を出そう」

今までので本氣でなかつたというのか。正直気が滅入る。

……が、双羽の状態はお世辞にも万全と言い難い。狙うべくは、

短期決戦だ。

「行くよー！」

VSアリア、第2ラウンド開始である。

第拾參話 剣速術師・ありあ（前書き）

題名は適當。あと双羽がなんかアレなのも仕様。
しかしまともな長さに仕上げたの久しぶり。続かない人間なので

…

敵が、増えた。アリアの体はその戦えることの悦びに震える。そこらの来訪者ごときなら、何人来ようとその剣の敵ではない。所詮平和の中から抜き出された者たち。生まれてこのかた剣を持つていない時間の方が少ないアリアにとって、その存在は蟻のようなもの。組織だつた行動をもつて初めて一矢報いることが可能となるような、か弱い存在に過ぎない。

その点、あのトモハネとかいう少年は違う。宿の外に潜むアリアの気配に気づき、その剣閃を受け切るその戦闘力。

……いや、そんなことではない。彼からは、同じ匂いがするのだ。仕方なくこの世界へと順応した来訪者とは違う、人生そのものに戦いを組み込まれた者たち特有の、匂い。詰まるところ、彼女は“同族”の気配をそこから感じ取っていたのである。

結果として“試す”という大目的をきれいさっぱり忘れていたアリアであったが。

「……呪術……」

「遅いな」

「えつ！？」

魔法を使おうとした黒マント、その懷へと瞬間移動の如く飛び込む。静から動へ、一瞬で。少年には効かなかつたが、常人ならば確実にこちらの姿を見失うだろう。

案の定、黒マントはすぐ脇へと滑り込んだこちらに気づけていないようだ。明後日の方向に注意が向いている。

余裕をもつて的確に狙つた足払いは、しかし地面へと突き立てられた簞によつて防がれた。少年の援護だ。

「力ナちゃん、下がつて！」

掛けられた声に合わせ、後方へと跳ぶ黒マント。追い打ちを狙うが、高速回転する簞に進路を阻まれる。その隙に体勢を立て直した

黒マントの右手がこちらへ向いた。

「今度こそ……呪術・金縛り」

ぐ、と収束される力。その雰囲気からして、どうも動きを封じる魔法らしい。が、まあ当たらなければ意味は無いわけで。

上体を逸らし、結集した力から座標をずらす。

「単純過ぎるな」

「避けられた……！？」

今までこのタイミングで避けられたことは無かつたのだろう、動搖が目に見える。しかし、その收まりを待つほどこちらもお人好しではない。

隙を突いた必中の切り上げは、しかしまだもや簞に阻まれた。い�い支援が的確過ぎる。

……これは、本当に全力で行くべきか。

「しょうがない出し惜しみはもう無しにしよう」

「……わざわざ教えてくれてありがとー」

「……まだ全力じゃなかったの？」

そろいつてうなだれる少年と黒マント。2対1とはいえその年齢でアリアの本気を引き出せたのだ、もつと嬉しそうな顔をすればいいのに。

まあいい、初めの一撃はサービスだ。不意打ちは彼女としても望むところではない。

「ツンセケハリクムアヤニエノイジノスアスウチスセニソ」

ぱす、と。なんだか氣の抜けるような音が駆け抜ける。咄嗟に反応した簞の少年だが、こちらの狙いはそこではない。もつと、後ろ。気づいたのか、油の切れたカラクリ人形のような動きでギギギと振り向く少年少女。そこには、細切れになつた街灯の残滓が。

「……カナちゃん質問。この世界の人つて、0・3秒で鉄の棒一本くらい簡単にバラせたりする？」

「それ言って信じてくれる人搜すのは大変ね……」

「うん、安心。あの人怪物なだけなんだね。良かつた」

「……全然良くない」

「そろそろ良いか行くぞ」

「良くない、って言つてんだたけどね!」

ここまでサービスしたのだ、コントまで終了を待つてやる義理はない。地を蹴り、右方上空へ。民家の二階部分に足を着き、次はそこを踏み台に篠少年へと跳ぶ。

「ヤコチシウツシコンアヤニエノイジノスアヤリツネウイヘン」

同時、黒マントに向けて炎魔法を発射。直線状に伸びる炎筋の速度は中々だが、辛うじてかわされる。しかし着弾時の爆風は流石に避けきれず、大きく吹き飛ばされる黒マント。民家の端に積んであつた布袋の山へと突っ込み、盛大に粉塵が立ち上った。

「カナちゃん!」

「他人の心配をするとは随分と余裕のようだが私はこちらだ

「……つ、わわっ!」

いつたん少年の背後へ着地し、そこから跳ね返るような急突進。遠心力を乗せ、剣速よりもパワー重視の一撃を放つ。しっかりと防御されたものの、そこは先の怪我が効いている。踏ん張りがきかなかつたのだろう、少年は丁度黒マントの吹き飛んだ方向へと転がつていった。

……まあ、双方まだくたばってはいなはず。そうでなければつまらない。

「えつと、ひ。ちょーっと、強過ぎるんじゃないかな?」

「……あの剣技にあの魔法つて……反則じゃないの……?」

ステレオの文句と共に姿を現す2人。少年には肩の傷、黒マントは裾の方が少し焦げているようだ。

満身創痍、というわけでもない。しかしあって、このままではアリアを倒すに不十分。さて、どうする。

「……ふう」

少年が、短くため息を吐く。何が変わったわけではない、が、しかしそ。

「カナちゃん、さっき言つてた通りに動いて」

「良いけど……どうしたの、双羽？」

「どうもしない。ただ、少しは頑張らないと、って」

「……そう

いやいや明らかに何か違うだろ、なんて無粋なツッコみ役はここにいない。アリアだつてそうだ。

「そうかそうかそれは楽しそうだな少年！……シダコスラサカウドリクミアヤニエノヌラウイジノスアネウイヘスキゾン」

つつけばつつくほど何か出てくるあの少年、面白い。さて次は何だろう。期待を全身に巡らせ、先の炎筋より更に一段階上の魔法を発動した。数多の刃が地より突き出で、宙を舞う。

そうやつて発生した無数の氷刃に紛れ、目指すは少年。それだけで軍の一隊を消し飛ばすであろう氷の刃群、これが全てアリアの意のままに動くのだ。

「あれは……戦略魔法！？ 双羽、アレ戦争で大砲代わりに使われるような魔法なんだけど……」

「大丈夫、なんとかなる」

言つと同時、少年は第でもつてこちらへと一直線に駆ける。正解だ。

この過多の魔法、つまり面で迫る攻撃に対しての最善手は“全てを相手にしない”こと。事実、少年は極一部の氷刃だけを回避しつこちらへ迫る。外周に位置する刃は内側の氷が邪魔になり、彼に届かない。

このまま接近戦に持ち込んでも良いのだが、それはアリアの流儀に反する。

「ウイクサケアヤニエノノスアネウイヘセ」「わ、つと！」

指先に収束した雷光を少年めがけて解き放つ。それに対し、少年は急ブレーキのち筆を避雷針代わりに回避してくる。……だが、こんなもので終わりではない。

「シロンアヤニエノイジノスアリススウ」

「シドハジイアヤニエノイジノスアヴァケジンテウ」

「クノネセリウアヤニエノイジノスアチツナカテ」

「わ、と、と……って、早口言葉！？」

熱線が飛び、真空の刃が振り抜かれ、そこに細長い氷槍が一撃。通常ならばまずもって驚かれるであろうこの連撃を、苦労しつつも少年はかわし切る。流石は来訪者、常識を知らない。

ちなみに黒マントの方は、氷刃群によつて射線を塞いでいる。あの手の位置指定型魔法は、たいてい相手の現在地をしつかりと認識する必要があるのだ。数度散発的に放たれてはいるが、この状況で当たる方が難しい。

「なんで、当たらぬのよ……！」

「だから言つただろう単純だとそれから不用意に言葉を発するのは狙つてくれと」

「ていやつ！」

「言つてゐるよつな、おつと」

黒マントを狙おうと手を出しかけたが、絶妙のタイミングで少年が飛びかかってくる。

「……呪術……」

さらに、そこに向けて魔法を放つ黒マント。一旦氷刃を集合させた壁としてそれを防ぎ、少年の篭をはじく。そのままバックステップをとつた少年を追撃、したあたりで異変に気づいた。

氷刃群が、動かない。基本、こちらの動きに追随するよう設定していたはずなのだが。

「何故氷が動かないとなるほどそういうことがやられたな」

黒マントの魔法を妨害せんと集めた氷刃が、逆にその魔法の標的とされたのだ。固めて壁としたことにより、一気に動きを止められたのだろう。

頭の片隅でそんな思考をしつつ、少年を追撃する手は緩めない。

残念ながら、あの氷刃の大半を無効化されたところで黒マントの魔

法には当たらないのだ。そもそもが防御より威圧用の戦略魔法、こうして少年が懐に飛び込んできたことで既にその役目を終えている。少年の方はといえば、流石に流血が効いてたらしく辛そうな顔をしている。動きも先より悪く、防戦一方で加えて下がりっぱなしだ。もう先は短い。

「わわっ！」

……と思う内に、こちらの切り上げを捌き切れず箒が宙に浮く。すくい上げられた箒はその場で停止するが、一瞬少年の手には何も無いという状態が発生した。慌てず騒がずそこを狙う。

「……っ！」

対して少年、転がるように大きく後退。こちらとしても予想外の動きだったため初撃は外すが、この無理な動きによる体勢の崩れは致命的だ。小細工は無し、大きく踏み込む。

頭上にあつた箒が振り下ろされるが、これはしつかりと剣で受け止めた。これで箒のやっかいな自動操作を一時的に押さえ込める。

「凶運・頭上注意！」

黒マントも援護に魔法を放つたようだが、慌てたためか照準は見当違い。無視して前進し少年を剣の間合いに収めた。

「これで終わりだ」

「……君が、ね！」

少年の言葉を聞いた瞬間、アリアの第六感が警報を鳴らす。思わず上を見た彼女の視界に、倒れてくる街灯が映った。

「なんだ一体何が」

ピンポイントでこちらに向けて倒れてくる鉄の棒。そこに疑問を差し挟む余地も無く、アリアは背後へ跳ぶ。なんとかこの一撃こそ回避はしたもの、これによつて崩した体勢は致命的。まさか数秒前のセリフがわが身に返るとは思わなかつた。

「たあっ！」

そこを見逃す少年ではない。箒を縦に構え、真正面から打ち込んでくる。これも足を踏ん張りなんとか防御。

「……呪術・強制リバウンド」

直後、体全体に尋常でない重圧がのしかかった。ここにきて、街灯の一撃以後黒マントが意識から外れていたことを思い出す。失策だ。

そうやつて後悔する時間も短く、今現在速度で勝る少年が後ろへ回り込むのを確認。慌てて振り向くも、そこにはもう少年の姿は無い。回り込むと見せかけ、アリアの周りを一周したのだ。

その事実に気づいた彼女は振り向いた体を戻しつつ、後ろへと跳ぶ。体の重さ故に転がるような移動となつたが、少なくとも少年の接近まで一瞬の間を作ることができた。

少年は高速でこちらへ突進してくるが、この距離ならば魔法が間に合つ。黒マントはこの重量魔法を維持するのに手一杯のようだ。いける、なんとかなる。

「シコンアヤ……がつ！？」

「はい残念」

アリアの頭部を、予想だにしなかつた衝撃が貫いた。しつかり脳を揺らしたその一撃は致命傷に遠く及ばず、しかし彼女の意識を刈り取るには十分な威力を持つていて。その閉じてゆく視界に、未だ警戒の眼差しを向ける少年。久々の強者との出逢いに感謝しつつ、アリアはその強固な意識を手放したのであった。

第拾肆話 交々理由・なぜなにそのわけ (前書き)

気がつけばバトルばかりしてる双羽たち。なんと全話の1／3

は戦闘シーン。けりや多い。

といひことでタグにバトルとか戦闘とか入れようか迷ひしそうか
悩み中。でも迷ひしそう。

第拾肆話 交々理由・なぜなにそのわけは

激戦から一夜明け。まだ朝靄の霞む時間、起き抜けの双羽一行は宿屋の裏手にある中庭に集まっていた。宿の部屋はすでに引き払い、全員しつかりとした旅装である。本来チエックアウトは昼頃なのだが、部屋やら扉やらぶち壊したことで半分追い出される形となってしまった。弁償はきつちりしたのだが、まあ心証的にしようがないところではあるだろう。

それにしても、3人とも妙に元気が無い。夕依はあちこちに傷跡が見えるし、双羽の右肩にはこれでもかと包帯が巻かれている。快調なのは華月くらいのものだ。それでも昨晩はあと2人の処置に係りきりだったため、寝不足の感は否めない。結果として全体に疲労の空氣漂う一行であつた。

「くそ、こんなところに埋めやがつて……」

「……お前ら人をなんだとボヘエツ！？」

「……あんた、人じやないでしょ」

そんな湿っぽい空氣もなんのその、地面から生えていた頭のうちふたつが騒ぎ立てる。そしてジト目の夕依に踏みつけられ、更に沈む。

生首オブジエとなつて中庭に鎮座するのは、今は頭の上しか見えない人形含めて3つ。残りのひとつはアリアだ。なんかロープとかで縛つただけだと抜け出しそうだったので、縛つた上でこうして首まで土に埋めてある。ちなみにこの状態、華月の文字魔法“埋”で3秒だつた。

「……それで、大田富。こいつら何なのよ

「普通の人、じゃないよね。まず半分以上人じやないし

「ふむ、それなのだがな」

双羽と夕依がアリア相手に頑張っていた間、華月は残る人形2体を尋問していたのだ。昨晩は色々と忙しくて、その結果内容を聞け

なかつたのだが。さて、一体この襲撃者たちは何者なのか。

「実は、さつぱり何も分からんのだよ」

「……は？」

「いやだから、こいつら何しても口を割らんのでな。さてどうしようかと思つたところで貴様らが戻つてきて、あとは知つての通りだ」

「……」

「うーん、せめて襲つてきた理由だけでも分かんないとねー。またいつどこで襲われるか、つて予測もできないや」

ピンポイントでこちらが狙われているのか、偶然巻き込まれただけなのか。この町この地域故の出来事なのか、どこへ行こうと付きまとうだらう事件なのか。そのところが分かるか分からぬいかで、この旅の幸先も大きく変わつてくれる。

「この人形共をいくら脅そうとしても無駄だ」

……と、今まで会話に参加していなかつたアリアが口を開いた。相変わらずの棒読みだ。赤く腫れた顎が痛いのか少し喋りにくそだが、誰も気にしない。

「……どういうこと？」

「こいつらは決して事情を話さないよう設定されているからな例え体が粉碎されようと話さないだろ？」

「ちょ、アリア殿……」

「……もごもご（それは喋つてはダメなのでは）！？」

「ヨクヲクテウエ、貴様らは黙つていろ」

「……」

アリアが一言呴き命令すると、あれほどひつた人形はピタリと口を閉じる。まあ片方は埋まつてゐるため分かりづらいが。

「ほう、特定の呪文を用いて命令する事によつて操れる、と。面白いな」

「残念ながら登録された個人でなければ命令は不可能だ」「なるほど、そいつは確かに残念だ。早速色々試そつかと思つたのだが」

なんだかよく分からないところに食いつく華月。それにしつかり返答するアリアも存外律儀な性格だ。

「……ちよつと。そんな話するために、わざわざ人形黙らせたの？」
しかし、このままでは話が進まない。そう思つたであらう夕依が華月とアリアの会話を止める。

放つておけばこの話題で口が沈みかねない、と。そう思わせる何かがあった。

「いや違うぞ」

そしてその質問にも律儀に答えるアリア。性格が窺える。

「じゃあ何ぞ？」

「端的に言つとおまえたちが気に入つたので事情を教えようと思つたのだが」

「ほう。気に入った、と？」

「私は強者が好きだからな」

「何とも武人気質な女性だったようだ。

「……ありがとー。じゃ、教えられることだけでいいから、よろし

れている」

「分かつたまではそудな私たちはベンフィード公国に属する者でその役目は召還した来訪者の選別で周囲の町に散在した上でやつてくる来訪者を篩に掛けるということをしていたのだがこの人形2体はその補助用に作られたカラクリ人形で私の命令に従つよう設定されている」

「なるほどなるほど」

納得顔でうなずく双羽。しかしその後ろでは、黒マントと白衣が顔をつき合わせている。

「……聞き取れた？」

「部分的には、な。早口な上に棒読みで言葉に節が無いせいで、まるで呪文か何かのように聞こえたぞ」

「……そうよね。……じゃあなんで、双羽はしつかり理解できるのよ……？」

もう一度首を捻る思案顔の2人だが、まあ答えが出るわけではなく。

結局、双羽ならいつものことだと納得していた。それでいいのか。

「うーん、それだけ？」

「そうだ残念ながら今私が教えられることはこのくらいだ済まないな」

「そつか。ま、知りたいことは分かつたし、いいかな」

ちなみにこの会話、片や土の中な状態で行われている。生首相手に屈んで話す少年というのも中々シユールな光景だ。

「……まあ、必要なことは聞けたようだな。出してやるか」

そもそもこの何とも言え無さに耐え切れなくなってきたらしい。

咳きつつ、“出”の文字を生首3つに書き込む華月。

「“出”てこい」

ばすん、と飛び出すアリアと人形たち。唐突な解放だったが、それでもしつかり余裕をもって着地したアリアは流石だろう。

一瞬遅れて人形ふたつが両脇にペちゃりと落ちてきた。まあ普通はこうなる。

「出してくれてありがとう済まないな礼を言つ

「ま、元々埋めたのは僕たちなんだけどね」

「そうされても仕方のないこととしたのだしそうがない」

元々の元々を連れれば、双羽たちはただ襲撃されただけの被害者なのだ。今この状況だけ見ていると忘れそうだが。

「ところで済まないついでにひとつその少年に聞きたいことがある」

「ん、僕？」

「そうだ」

何だろう。向こうの知らない情報をこちらが知っているとは思えないのだが。

「私は今まで負けたことが無いとは言わなくとも負けた理由が分からなかつたことは無かつたのだが少年があの戦いの最後に何をしたのかが未だに分からないのでは非教えてもらえないだろうか」

「ああ、それね。それなら簡単、こうしただけだよ」

取り出した箒の柄を持ち、誰もいない方向へと勢いよく突き出す。呼応して伸びた箒は建物ひとつ分遠い石塀に傷を付け、次の瞬間には双羽の手の中に元通り収まっていた。実際には箒の柄を高速で伸び縮みさせただけなのだが、傍目には神速の突きと見えないこともない。箒が伸縮自在であることを利用した、双羽唯一にして最速の遠距離攻撃である。

「この箒、自由に長さを変えられるんだ」

「戦闘中は一切そんな素振りは無かつたがそつかなるほどつまり私はまんまとハメられたわけか」

「人聞き悪いよ？」

ハメたのではない、歴とした情報戦略だ。どこが違うんだという意見はもちろん却下。

……つまり、のつけから全力で戦っているフリをしつつ、意図的にこじらせる能力を一部隠蔽するわけだ。情報を与えないことによって、ここぞというところで相手に作った隙をつく。ここでいう隙とは、あの街灯による一撃だ。それでも仮にアリアが箒の伸縮機能を知っていたなら、それを踏まえた上で体勢を立て直しだろう。最後の突撃時に魔法での迎撃という選択肢を選んだのも、ひとえに双羽のリーチを読み違えた故。知つてさえいれば、あの状況をも潜り抜けてきたに違いない。

ちなみに決め手となつた街灯転倒攻撃だが、アレは双羽の仕業ではない。夕依の“凶運・頭上注意”だ。“凶運”とは対象に特定の不運を呼び込む魔法である。その一種である“頭上注意”、これは文字通り相手の頭上から何かが降つてくる魔法なんだとか。少し前だが、海パン野郎を伸したのもこの魔法だ。

本来相手に当てるべきこの魔法を、あのとき夕依は双羽の箒に対して発動させた。これと同時に箒の位置をアリアの真上に持つて行けば、もちろん落下物は彼女にも被害を与える。夕依の魔法の着弾点を的確に見切る、あの超反応を逆手に取つたのだ。結果として、

自分を狙つていないと判断したアリアは倒れてきた街灯に対する反応が遅れた。

……変則技による精神的な圧迫、そこに先入観を利用した不意打ち。このふたつが重なってはじめて、双羽たちは勝利を得ることができたのである。

「そこまで詰められていたのかそれならば私の敗北も必然だな」

「……そんなこと全部蹴散らしそうなくらい強かつたけどねー」

「……ほんと、あれだけうまくいったのって奇跡よね……」

もちろんあのとき夕依は双羽の作戦を知っていた。それに合わせて動いた結果がアレなのだから。

しかしそこに今の解説を聞いて、改めてあの戦いの綱渡りっぷりが実感できたようだ。双羽に言わせればアリアのあのチート性能が全部悪いのだが。

「さて、もう俺たちは宿をチェックアウトしてきたわけなのだが。アリアとやら、貴様らはどうするつもりだ？ 仮にも俺たちとは敵同士なのではないのか？」

「公国側の目的としては強者の選別なのでここで見逃すことには特に問題無いというよりそちらの強さが判明した後も戦い続けたのはただ単に私の趣味だ」

「「…………」「」

そんなことで命の危機やらされたのかという意味のジト目×²が、アリアを睨みつけた。本人は堪えているのかどうか分からぬくらい無表情だが。

「済まないな悪かったとは思っているがどうもああなると抑えが効かんのだ」

反省の色も怪しいアリア。彼女、武人気質かつ根っからのバトルジャンキーもあるようだ。いい性格をしているが、巻き込まれる側としてはたまたものではない。

「というわけで私の方からそちらへこれ以上の干渉は無いので安心して旅を続けて欲しい」

「ん。それじゃ、これでお別れだね」

「そうだなそちらが公国を目標のならばまた逢つことがあるかも
しれんが」

「……次会つときは、敵じゃないといいわね」

まだしばらくはこの町に残るらしいアリアたちに別れを言い、双羽一行は旅を再開することにした。目的地のはつきりとしたこの旅さつむと終わらせるに越したことはない。寝不足気味の体に文句を言われつつ、3人は先へと進む。

……町を離れ、それからしばらく。最後尾を歩く双羽がふと呟いた。

「……やっぱ、アリアリ、かな。うん」

実は朝からずっとアリアの愛称考えてた双羽なのであった。

第拾伍話 道中小話・じょうごはなし（前書き）

なんだか説明回になってしまった。必要な話なんだけど、でもも「つちよつ」となんとかならなかつたのかな、と。技術不足です。

第拾伍話 道中小話・ひょつとした

『はいてんしょん白衣』

ひたすら続く平原を、ひたすら歩く。辛うじて見て取れる道を辿り、歩く、歩く、歩く。遙か遠くに臨む地平線へと、歩いて歩いて歩いて……

「……長いわ！」

「……どうしたのよ。とうとう頭やられた？」

延々と変わり映えしない景色への怒りを、何処へともなくぶつけみてる。が、しかし何とも酷い一言で夕依にぶつた切られた。せつかくのネタ振りだったというのに。

双羽だつたらしつかり拾つてくれただろうか、と後ろを振り向く。夕依と華月の歩調に会わせてふよふよと低空飛行する雛、それに跨る少年。……いや、跨るというのは間違いか。大の字うつ伏せの人間を体の軸だけ支えた状態。手足は重力に従つて垂れ下がり、寝息に合わせて微かに動く。絶賛お休み中の双羽である。よくあの体勢で爆睡できるなど感心してみたり。

数日に一回、双羽はこうして朝から夕方まで寝通すことがある。理由は知らないし知る気も無い。ただ、ちょっとやそっとで起きないことだけはよくよく身にしみて知つている。つまり、今この場での話し相手は夕依のみだということだ。

「いや、この道なのだがな。いくら何でも単調過ぎるのでないか？」

「……しょうがないでしょ。この乾草原迂回したら、旅の期間が月単位になるわよ……」

「まあ、そうだつたな」

このあたり一帯、一応草は生えるが人が暮らすに適した環境ではない。雨が滅多に降らないのだ。よって、町を巡ると丁度草原地帯の縁をなぞることになる。突つ切つて一週間のこの草原の、だ。い

くら何でも遠回りしがちだな。……しかし、今ならそれでもいいかと思えてしまうのが怖い。

それにしても、暇だ。無論、歩を進めるという旅においてこの上なく大切な動作はしつかり継続中。しかしあって、生憎華月も約一年程前まではただの高校生だった。3日連続の草原オンリーな光景を娯楽に転化するスキルは、まこと残念ながら持ち合わせていない。結果として、歩きながら暇を感じるという器用な状況と相成ったわけである。

「まあそれでも、暑かつたり寒かつたりしないのは良いことだな。これで真夏日とか言われでもしてみる、俺は歩かんぞ」

「……じゃ安置いてくわよ」

「その貴様の冷たさが俺を救うところなどだな」

「……は？」

何言つてんの「コイツ、つてな視線を差し向けてくる夕依。迂闊にも華月自身そこに異論は無い。

暇過ぎて自分の言動が制御し切れていない気もする。いやまず暇過ぎてとこり理由からしておかしいか。

「……さて、俺はしばらく黙つているとするか。口を開けば開くほどカオスへ突き進む気がしてならん」

「太田宮の口からカオスなんて単語が出てくる時点でおかしいわよ

……」

「そうだろうか。……確かに、言われてみれば彼が横文字を使うのは珍しいかもしれない。特に普段からそんなことを気にしているわけでもないのだが。

「ふむ。つまり俺がカオスと言つ事自体がカオスであるとして、しかししながらこれを俺の口で説明するためには最低二度のカオス発言が必要であるが、しかし今の時点でカオスと言つたのは3回、いや今まで4回目のカオス、といやまたもう一回増え……」

「……呪術・口パッテン」

「……！……？」

せつからく脳内の思考を口に出すことで纏めていたというのに、急に言葉が発せなくなつたため中断せざるをえなくなつた。どういう原理かはよく分からぬが、とりあえず舌が巧く回らない。夕依の魔法だらう、思つた以上に色々できるようだ。

そんな感想を抱きつつ、取り出した筆で左の手のひらに“喋”と書き込む。まだ墨の乾かぬその文字を口元に当て、望む効果を念じれば一丁上がり。

「……ふ、甘いな。それしきで俺の口を封じようとは3ヶ用早いわ」ちなみに発動した時点で対応する文字は消滅するため、顔に変な模様が付くことを恐れる必要は無い。自分で言うのもなんだが便利な仕組みだ。

「せつからく静かになると……」

「そうかそうか、そんなに俺の声が聞きたかったか。済まんな3秒ほど黙つてしまつて」

「……は？ 何わけの分からない……」

「訳の分からないとは残念なことだ。俺は貴様でも分かる程度には言葉の質を落としているつもりだったのだがまだ足りなかつたか」「……あんた、バカにしてるでしょ……？」

さて、暇だ暇だと言い続けようとおかしな事を言つてみようと、暇である事実は厳然として変わらない。やはり、暇潰しには何かをイジるのが一番。物とか、人とか。

「バカにしているとは心外な。貴様に対して出来得る限り丁寧に振る舞つた結果がこれなのだぞ？」

「……それをバカにしてるつて言つてるのよ……」

ただしこれまた人にしろ物にしろ、イギリ易さというはある。

例えば、イギリにくい人間筆頭、双羽。『何をやつてこの阿呆が……と、阿呆とは言葉が難しすぎたな、意味分かつたか？』といふフリに『うーん、コトバガムズカシスギタつてどういう意味なの？』と返ってきたときは転けそになつた。思わず『そこじゃないだろう』とツッコんだあたりで双羽が浮かべた笑みが素晴らしい輝

いていたのはよく覚えている。

対して夕依はイジり易い方代表だ。今だつて適当に放った言葉にしつかりと食い付いてくれている。しばらくは楽しめるだろ？

「そつかそつか。ふむ、困ったな金峰がここまで自己嫌悪に陥るとは。そんなに自分のバカさ加減を周りに」

「呪術・ロパツチン」

「（“喋”れ）……む、どうした金峰。そんな世の真理に気づいたつもりの黒マントみたいな顔してからに」

「……」

こうなれば完全に華月のベース。寝る時分くらいまでは退屈せずに済みそうだ。

……そつやつて、素晴らしい暇潰し方を見つけた華月。しかし、このとき背後より向けられる視線に気づかなかつたことが不幸の始まりだなどと、まだ彼が気づく由も無かつた。

「……何だこの締めは。続かんぞ」

……

時には、自らより優れたるを憎む。生まれたときから自分よりもテる幼なじみ然り、酒の席の盛り上げスキル持ちかつ上司のお気に入りな同僚然り。

まあそのあたりはしょうがないものなのかもしれない。人間妬んでなんぼの生き物だ。そこは認めよう。

……しかしまあ、妬まれるという受け身側の体験は、中々に辛いものがある。

「……不公平よ」

「えー。だってしようがないじゃんか、僕が選んだんじゃ……」

「……理不尽よ」

「えー」

……何つて、双羽の籌魔法が不公平かつ理不尽だとこうのだ。こ

つちは歩いてるのにその横を飛ぶのが田障りなんだとか。選択の余地無く修得させられた魔法について、さて上記のじょうがないは当てはまるのだろうか。

「……でもさ、例えばカツちゃんの魔法……」

「……あ？ 何だ、よく聞こえなかつたのだが」

「ん、 “カツちゃん”？ もちろん華月君のことだよ、略してカツち
ペギヤ」

「早急に撤回しろ

「ふあい

前々から考えてはいたのだが、どうやらお前に呪わなかつたよう
だ。残念。

「……で、俺の魔法がどうしたと？」

「そうだ、そういうばそんな話題だつた。

「例えばさ、華月君の魔法で“速”とか“浮”とか使えば、もつと
早く移動できるんじやないの？」

「何を言つてゐる。貴様とは違つだから、そんなことをすれば一
瞬でへばるぞ俺は

「そなの？」

「へばる、とはどういふことだらう。そもそも魔法の使用制限なん
てあつただろうか。

「……双羽。魔法はね、体力を使うの

「体力？」

「そう。魔力とかそういう何か別のものじゃなくて、体力

「じゃ、魔法使い過ぎると普通に疲れるんだ」

「そうよ。……あと、これは来訪者なら知つてることだから……」

来訪者なら知つてること。つまり、召還された際に植え付けら
れる基礎知識に含まれているのだらう。知らぬ様子のこちらを見、
華月が不思議そうな顔をするわけだ。

「……あれ、じゃあなんで僕疲れないの？ 最近いつも飛びっぱな
しなんだけど」

「知らないわよ。……だから、理不尽って言つてるの」「確かにそうだな。俺も“飛”で飛べるが、10分も続ければ立たなくなるぞ」

思つていた以上に魔法といふのは燃費が悪いものらしい。唯一使える籌魔法があのあたりチートだつたため、今初めてそのことを知つた双羽である。思つた以上に恵まれた状況だつたのかもしない。ちなみに彼は知らないが、魔法の消費体力には種類に関わらず法則がある。基本的には発生する現象分のエネルギーを消費し、さらに消費量は発生地点と使用者との距離に比例するのだ。例えば物を動かす魔法の場合、“重量×移動距離×使用者からの距離”だけ体力がさつ引かれる。ゼロ距離で使えば手で持つて運ぶより楽なもの、そう頻発できるものでもないのだ。

あとついでなのだが、アリアが戦闘で使つていた魔法の消費体力合計はフルマラソン2回分ほど。流石人外である。

「魔法つて便利みたいだけど、思つたより使うの大変なんだね……」「この世界、日常生活でも簡単な魔法は使われている。が、それに頼り切つた文明が形成されてないのもこの性質に拠るところが大きい。まあ、そこで機械文明の代わりに魔法道具が発達しているわけなのだが。

「ま、楽なことばかりしてちゃ、人間成長しないもんね!」

「……じゃあ歩け」

「……ヤダ」

廻り廻つて、結局話はそこに帰着するのであった。

第拾陸話 嵐港大船・あらじのちみなど

窓の外に見えるはずの大きな時計塔は、霞んでいてよく見えない。ナウエサのやたらと立派なやつに比べれば流石に見劣りするが、それでも町のどの建物より高く大きい三角屋根の塔。それが霞んで見えるほど、今天より降り注いでいる雨は激しかった。

「今は……ふむ、1の刻か。それにしても暗いな」

「……今日中に止みそうもないわね……」

「つてことはもう一泊?」

「そういうことだな。暇で死にそうだ」

乾草原地帯を抜け、途中目的地であるユヒナ港まで辿り着いた華月たち一行。あとはここから一週間船の旅をすればベンフィード共和国はすぐそこ、だつたのだが。

「それにしてもさ、あの河のところ凄かつたよねー。僕、雨の壁つて初めて見たよ」

「奇遇だな、俺もだ。……雨が降らない、というのも、まさかあのレベルだつたとはな……」

丁度乾草原地帯の端には河が流れている。信濃川とかよりは大きいが、アマゾンとかそのあたりよりは遙かに小さい、そんなサイズの緩やかな河川。曖昧だが、まあ大体そのくらいの流れが草原地帯の北半分を包むように横たわっているのだ。ちなみにその河まで辿り着いたのは、草原地帯に入つて8日目の夕方である。

で、その河に何本か架かつている橋を前に、3人は謎の光景を目にした。丁度河のど真ん中を境に、こちらは晴天、あちらは曇天通り越して大雨暴風警報状態。まるで河の形が天に写し取られたかのように、黒雲と青空との境界がそこには出来上がつていたのである。

そこから先は慌ただしかつた。華月の魔法“傘”で雨を突破して、港に着いたはいいけど風強すぎて船が出航できなくて、そのためには急遽宿を取つて一泊して、それでもつて今に至る。残念ながら、一

晩越した今朝でも変わらずの豪雨暴風フルコンボだ。これはまあ、ほぼ確実に2泊目突入である。

「気は急くけど……船が出ないんじゃ、しょうがないわよね……」

「ま、お金はまだあるしさ。いつまでに着かなくちゃってワケでもないし、今日は一日のんびりしようよ」

「そういうことだな。さて、問題は外にも出ずに何して時間を潰すかということだが……」

「……本でも読んでるわ……」

さて何かしようぜ、という華月の言外の誘いをのつけからぶつた切る夕依。なんだか少し悲しくもなるが、これもいつものこと。この程度じゃ華月はメゲない。

「ふむ。……把臥之、少し……」

「あ、この宿つてさ、確かに厨房借りれたよね」

「……あ、ああ。確かに借りられたと思うぞ。表の看板に書いてあった」

流石に無料というわけでもないが、厨房の貸し出しをしている宿は多い。特に、旅人向けのそこそこ余裕のある宿なんかは大抵やっている。旅銀の少ない旅人などは、ここで半自炊することで食事代を浮かせるのだ。貸出料金も、まあまとめて外食するよりはリーズナブルなお値段である。

「じゃあさ、僕久しぶりに料理してくるーーこの世界の料理教えてもらいたかったんだ！」

「む、そうか」

言つなり、てててと部屋から駆け出していく双羽。置いて行かれた感満載の華月。といふか料理などしたのかあの少年は。そこそこ驚愕の新事実だ。

なんとなく横を見るが、夕依は既に本の世界へ入ってしまっている。

それにしても、その大量の本はどこから出てきたのか。明らかに彼女の荷物袋の容積を超えている気がしなくもない。……いや待て、

明らかにこの町で発行されたと思しき本すらある。一体いつの間に。

「……ふむ。つまりすることが無いのは俺だけ、と」

なんだか悲しい事実に気づいてしまった華月である。いつも見えて元の世界ではアウトドア派だった彼にとって、外出を制限された状況というのは非常に辛いものだ。限られた空間を楽しむ術なんぞ生憎持ち合わせてはいない。

「……しょうがないな」

ここにはひとつ、考え方を変えよう。樂しもうと思つから、いけないのだ。何か……そう、何か今後の役に立つ暇つぶしか、無いだろうか。

「何かを買つ……のは無理か、外には出られん。ならば、何か作る、か？ いやしかし、旅に役立つものなど……」

まあ少々頭を捻つたからといって、そんなアイデアがすぐ出てくるほど華月は天才でない。といつも、まず自作できるお役立ち品といつ時点ではハードルが高過ぎる。なんたって華月はものづくりに関して素人だ。そんな彼が特別作れるものなんて……

「いや、あるぞ」

あつた。彼だけに作れる、特別な、それでいて役に立つ品が。「先ずは……そうだな、白い紙が必要だ。それから、紙の束を纏めておけるような……」

こうしてやることを見つけた華月は、ぶつぶつ言いながら部屋を出ていく。確かに宿の一階にちよつとした雑貨店があった筈。目的のものは、そこにあるだろつ。無くとも、意外となんとかなるかもしない。

「なるほど、なるほどな。こりこりやり方もあつたか」

暇つぶし探しの思わぬ収穫“文字魔法の新たな使い道”に、自然類の緩む華月であった。

廊下ですれ違つた宿泊客の尽くが、そんな彼のマッドな笑みにぎょっとしたといつのは余談である。

……
一夜明けた。バケツどころか風呂桶ひっくり返したみたいなのが雨も、今朝方12の刻頃には止んでいたようだ。窓から見える朝日には一片の曇りも無く。それに追随するような雲ひとつ無い晴天。どうにも両極端な天候である。

「ふあああ……あ、おはよ、カナちゃん」

「おはよう」

窓から入る角度の緩い日の日光に目を射られ、ゆるゆると起き出す双羽。昨日は結局宿の厨房の営業時間いっぱい居座っていたらしく、一行の晩ご飯は彼の実験料理フルコースだった。初めて作ったこの世界の料理と言う割に、そこそこの味を出していたことには驚いたものだ。料理好きというのは本当なのだろう。厨房係の人にも筋が良いと褒められていた。

「……む、朝か。いつの間にか寝てしまったようだな……」

部屋の空気が動き出したためか、華月もごそごそと動き始める。寝不足気味の目を擦り擦り、ベッドの周囲に散らばる紙切れをかき集め始めた。

なんか変な模様が書いてあつたり書いてなかつたり、長方形だつたり菱形だつたり丸かつたり。とにかく統一性の無いその紙が何なのか、夕依にはさっぱり全く分からぬ。しかし昨日の晩は遅くまでその制作に勤しんでいたようだ。夕依が寝た時点では散らばるばかりだった紙切れだが、今は完成品と思しき長方形の紙がいくつかの輪つかに纏めて留められている。けどやっぱり何なのかは分からぬ。

「ごそごそと身支度を整える2人を待ち、夕依は窓から外を眺める。いつもこの3人の中で最も早起きなのは彼女だ。ひとり旅が長いせいかもしれない、眠りが浅いのである。昨晩も雨の音で何度も起きていた。

「準備完了。華月君まだー？」

「つむ、もう少し待て。昨晩は結局片づける間無く寝てしまつたからな」

「そーいえば、それって何なの？ 昨日から一所懸命書いてたけどさ」

「まあ、俺の新兵器、といったところだ。具体的な内容は見てのう楽しみだな。……よし、こんなものか。終わつたぞ」

大量の紙切れを袋に詰め込み、華月が声を掛けてくる。見れば、双羽なんぞは早くも部屋の外へと行つてしまつていた。宿泊票も持たず何しに行くつもりだろうか。

「……鍵は閉めておくから。先に外出で」

「おう」

華月が出た後、忘れ物が無いか部屋を見渡す。無論他の2人も同じことをして部屋を出でいるため、これはただの確認だ。

来たときとほぼ変わらない部屋を一通り確認し、廊下に出て戸を閉める。そこに鍵穴らしきものは無いが、流石魔法が幅を効かせるこの世界。宿泊票である金属板を取つ手に翳す、これでオーケー。宿泊票に掛けられた魔法が扉の魔法と反応し、かちりと小さな音がする。試しに戸を引いてみるがびくともしない。施錠完了だ。

先にカウンターまで来でいた双羽と合流し、宿泊票を渡して料金を精算する。前の宿みたく頭の痛い追加出費こそ無かつたものの、2泊したためそこそこの値段だ。地味に双羽の自炊は助かつた。3人もいれば、一食分の料金だつてバカにならない。華月の手持ち含めてまだ余裕はあるが、この先どんな出費があるか分からぬのだ。

「……しかし、見事に晴れたものだな。あの暴風雨は一体どこへ行つた」

「そーだねー。ま、これだけ晴れてたら船も動くでしょ」

まだ濡れている石畳を歩き、夕依たちは港へと向かう。流石に海の近傍なだけあって、あちこちで海産物が売られていた。双羽は色々と興味深げに見回しているが、ナマモノ手に入れてもしようがない。こちとらまともに料理できない旅暮らしなのだ。

途中でたこ焼きっぽいものを購入して3人で分けつつ、海の音がする方へと歩く。

「……なんだこれは」

「鶏皮……じゃないわよね。海の幸って書いてあつたし……」

「んー、ま、美味しいからいいんじゃないの？」

なんか蛸でなくてよく分からぬ具材が入っていたが、双羽の言うとおり美味しいのでまあ良しとする。

丁度12個入りのたこ焼きもどきを食べ終え、さてこのゴミどうするよと入れ物の処分に頭を捻る頃、一行は港に到着した。漁師あたりが個人保有してそうな小舟から、そこそこ豪華な巨大客船まで。様々な船が一様に並んだその景色には、どこか元の世界を思い出せるものがある。

「えーっと、一昨日と同じだから……18番だつけ？」

「そうよ」

「今日の前にあるのが5番、ということは……そうだな、あの底の赤いやつか。思っていたより大きいではないか」

町に着いた日は、そもそも港へ入ることすらできなかつた。暴風で波が高くなつていたのだから、まあ一般人立ち入り禁止は当然の措置といえる。その時は乗船受付所で乗るべき船の番号だけ確認したのだ。

この町の港はいくつかに区切られ、それぞれ番号が割り振られている。1から20番港までが大型船、それ以降60番港までが小型船用だとか。客船が停まるのは、もちろん20番までのどれか。今回乗る“ゲイヌシン行き”の船は、18番港にその大きな船体をつけている。覚えているだろうか、ゲイヌシン。目的地たるベンフィード公国、その首都だ。

雨の明けた直後な為か、大体の停泊所に船があつた。ここでは先と代わり、華月がその日に興味を宿している。放つておけばまた雨で船が出なくなるくらいまで見てそうだ。

「ふむ、なるほど……側面から取り入れた水を、後方へと噴出する

ことで推力を得るわけか。実に興味深い仕組みだな。ただ吹き出すだけならば大して進まんだろうが……魔法で固めているのか？ それとも何らかの方法で質量を増加させて……

「はいはい、それはいいから先行くよー」

しかたがないので、双羽に言つて引きずつてきてもらつた。何故夕依がしないつて、んなメンドクサいことしたくないからに決まつている。

乗船受付所で受け取つていた札を係りの人へ渡し、3人分の乗船許可証をもらつ。これがあれば、対応する船には自由に乗り降りできるのだ。出港自体は昼頃になるらしく、それまでに乗つてさえいればいいとのこと。

ただ、これから一週間ほど居室となるであろう割り当てられた寝室も見ておきたい。あと、後ろに控える男2人がきつちり時間を守るかどうかも疑問だ。双羽は素でうつかりやらかしそうな雰囲気を醸し出しているし、華月も放つておけばふらふらと別の船を見に行くだろう。正味、その点全く持つて信用できない彼らである。

「カナちゃんカナちゃん、まだこの船出ないんだよね。じゃあちよつとあつち見てきても……」

「ダメ」

「えー……」

「……双羽は、大田高がどこか行かないように、しつかり見張つておいて。乗り遅れて置いて行かれました、なんて、『冗談にならないんだから』

ゲイヌシン行き、これを逃せば次の出港は4日後だ。本来3日の一度出でている便なのだが、雨による遅れを調整するため時間が開いているのだとか。合計一週間宿暮らしとか、ホント勘弁願いたいものだ。主に懐具合的な意味で。

「……ん、分かつたよ。万が一、ってこともあるもんね」

双羽の方は納得してくれたらしい。華月は夕依のセリフなんざ聞いてもいなかつたようだが、双羽が引きずつていったので良しとす

る。

「ここから一週間、船の旅だ。何事も無ければ、7度口を押んだ頃にはあのベンフィード公国の地を踏むことになる。そこには、おそらく……

「私も、乗つておかないと……」

……先のことばかり、今考えていてもしうがない。ともすれば暗く沈みがちな思考を引き上げ、船へと乗り込む夕依であった。

……

「へえ、大きな船じゃないの」

「そりやま、数百人乗せますからね。このくらいの大きさは要りますよ」

双羽たちが乗り込んでから大体一刻の後、1~8番港へと集まる十数人の男たち。総員荒事慣れしてそうな屈強な者ばかりだが、場所が場所だけにそんなに目立っていない。海の男なんてまあ大体そんな感じの人ばっかだ。

しかしそれ故、そんな集団の中央に立つ人物は逆にかなり浮いていた。女性なのだ。無造作に肩まで下ろした髪と、男集団の中でも埋もれない高身長が特徴か。気の強そうな自信に満ちた目をしている。

「姐さん！ 人数分の乗船許可証貰つてきましたぜ！」

「ありがと。あと、『姐さん』はやめてつて言つてるでしょーが」「でもなあ。姐さんほどその言葉似合つ女性もいないつしょ

「そうだよなあ」

「全く。そー言われて喜ぶ女性はいないわよ」

本当に慕われているのだろう、同意を求めた男に数人が真顔で頷く。いつもことなのか、女性も呆れ半分笑顔半分で男衆にチヨップをかましている。

……そんな彼女こそ、この集団、即ち“アーサニー盗賊団”的

ーダーに当たる人物だ。一見なんだか和やかな雰囲気流れる人たちだが、ユヒナ港より北西の地域で最近よく聞く新興盗賊団である。金持ちはかり狙うのと、絶対に殺しはしないということで有名だ。かといって義賊的なものかというとそういうわけでもなく、結局のところちょっと変わった盗賊団といったところである。むしろ、効率主義であるとすら言えるかもしない。金持ちはかり狙った方が稼ぎは良いし、殺しをしないことで無駄な抵抗を押さえられる。底まで考えているのなら中々だが、さてどうだろうか。

……分かる人がこの盗賊団の構成員を見れば、驚愕の余りその目を疑つただろう。その昔猛威を振るつた、残酷にして悪逆非道、史上希に見る大規模極悪盗賊団。北西の掃討戦で壊滅したはずの彼ら。そんな集団の中でも強者として知られた団員の顔が、そこにはずらりと並んでいた。

「だつてなあ。姐さんじやなきや兄貴とでも呼べば良いんギャツ！」「姐さんチヨップ！ あんまそんなことばっか言つてたら、そのうち湖に落とすわよ！」

「……自分で姐さん言つてるじゃないですか……」

……とてもそうとは思えないジャレ合いで続けながら、船へと乗り込む盗賊団なのであった。

第拾質話 船上発事・レーリヤフー？（前書き）

相変わらずメインキャラじゃない人は名前が出てきません。設定としては有るんだけど……なんででしょうかね？

第拾質話 船上発事・しーじゅつぐ?

「海つ、海ー！」

「どうした把臥之。海に何か未練でもあるのか」

絶賛ハイテンションな双羽が船上を駆け抜けた。船の端の柵を行き来しては海海叫んでいるその姿、まあ見た目ははしゃいでいる子供そのものだ。ちなみに補足しておくが、ここはだだつ広い塩水湖であつて決して海ではない。

軽いノリに身を任せ、彼は船上にいくつか置かれたイスのひとつへと狙いを定めた。んでもって全力ダッシュ、そして跳躍。……いや違う、最後跳んだのは何かに躓いたらしい。

「わああああ！」

「……え」

咄嗟に体を丸めた双羽は、走ってきた勢いそのままイスへと衝突する。バキガシャドカンとおよそ人間の衝突では出そうもない音を立て、少年とイスは衝突地点から放り出された。無論、そのイスの上で寝ていた人物も一緒に。

頭を押さえながら立ち上がった双羽は、目の前に黒衣の修羅の顕現を見る。

「……双羽」

「ひやー」

こちらも頭を押さえた夕依が、角とかオーラとか幻視しそうな形相でゆらりと立ち上がった。相当お冠のようだがまあしじょうがない。人間食べ物と睡眠の恨みは恐ろしいのだ。

「あなたは、何が楽しくて私の安眠を邪魔するの?」

「え、えーと……」

「言い訳しない

「ひやー」

「ここに限り、夕依の言つていることは大分理不尽である。し

かしもつて華月は双羽を弁護したりしない。この件、完全に彼の自業自得だ。それに見てて楽しい。だから止めない。

「ええっと、でも……」

「口答えしない」

「ひやい」

彼らの会話を横手に聞きつつ、華月は空を見上げる。今日で出港から丸3日、変わらぬ快晴だ。時刻は1の刻を少し過ぎた頃。太陽は南方を中心とした左右線対称な位置から水平線を照らしている。この世界に来た当初は見る度違和感しか感じなかつた双子の太陽だが、今では見慣れたものだ。むしろ太陽がひとつな状態の方が想像しにくくなつてゐる。この世界に慣れてきたということだろう、それが良いことかどうかは別にして。

因みに余談なのだが、華月はある太陽を『連星』なのではないかと考えている。季節によつて位置関係の複雑に変化するふたつの恒星、一点を中心に双方が公転する連星だとすれば説明がつくかもしない。別にそんなしつかり観測とかしたわけでもないため、現状ではただの推測でしかないのだが。

「……分かつた、双羽？」

「ひやい、分かりました……」

華月がこの世界の天体へと思いを馳せている間に、あちらの方も収束してきたようだ。いつの間にか双羽は正座、それに対し夕依は腰に手を当て仁王立ち。特に夕依、普段の内向的な彼女の性格からはちと想像し辛い程饒舌である。こちらも、少なからず船旅の空氣にあてられ昂揚してゐたようだ。

「……気楽な旅だな」

他人に便乗する船旅とは、これほどまでに気楽なものだったのか。今までの行程とは全く違うこの感じ。

まず、歩かなくて良い。体力を消費しない旅ほど楽なものも無いだろう。自分で操縦しているわけですらないのだ。疲れる要素が皆無である。毎食食堂を利用できるのも大きい。まあ、これには毎日

宿の一泊分ほど金を取られているわけだが。それでも、目的地まで宿屋」と移動していると思えばそんなものだつ。

また、道中の危険も大きく減る。例え船旅であつても悪天候等のハプニングは付き物だろうが、陸路に比べれば遙かにマシ。どういうわけか、陸地の上だと天災に加え人災が頻発するのだ。特筆することでも無かつたが、実は華月たちも数回野党の襲撃に逢っている。なんたつて子供2人に青年1人の3人旅。彼らからすれば狙つてくださいと言わんばかりなのだろう。

……まあ、それでも全て逃げ切り事無きを得たわけだが。逃走といふ点に置いて、無詠唱魔法のアドバンテージは計り知れないのである。

- 1 -

船旅の素晴らしさを噛みしめる華月の耳に、軽快な調子の短いメロディーが流れ込んできた。——3日で数回耳にした音。船内放送の呼び出し音だ。どこに忘れ物があるとか、もしくは誰かを誰かが呼んでいるだとか。船内放送の用途は大体こんなものであるため、基本華月には関係無い。何処からともなく聞こえてくる音声伝達の仕組みなら知りたいと思うけれど。

つまりこいついうわけで、華月はこの放送を意識半分に聞いていた。故に内容を聞いた時、他の乗客と同じく理解にワンテンポ必要だったのは致し方無いことだと言えるだろう。

『あー、あー、マイクテスマイクテス。聞こえてますね？　はい、
ありがとうございます。……えー、たつた今この船はアーサミー盗
賊団が占拠いたしました。命とか色々惜しい方は是非大人しく我々
の指示に従つてくださいお願いします。……あー、繰り返します。
たつた今、この船はアーサミー盗賊が…………』

3度程同じ内容の放送を流し、一旦スイッチを切る青年。防音性

に優れたこの部屋にも、にわかに慌ただしくなつた外部の空気がなんとなく伝わってきた。無論船として重要な操舵室と動力室は既にピンポイントで押さえてあるわけだが。まあ、早いとこ次の指示をすべきだろ。パニックに陥つた群衆なんて相手にしたくない。

「あら、終わった？」

背後の戸が開き、1人の女性が船内放送室へと入つてくる。髪を無造作に肩まで下ろし、安物のシャツに似たような長ズボンとともにく飾り気の無い人物。彼女こそが、アーサミー盗賊団のボス、通称“姉さん”だ。本人はこの呼称に違和感を訴えているのだが、むしろこれほどこの人を端的に表した言葉は無いと思う。

「終わりましたよ。けれど、早く指示を出しておいた方が良いですね。何も言わることで不安を強めた乗客が……」

「あー、そのあたりはアンタに任せると。アタシはそーいうの苦手だしねえ」

「……分かりました。と云うか、分かつてました」

訳あって彼女をリーダーとするこの盗賊団だが、大体いつもその頭脳役は参謀である青年の役割だ。姉さんは基本的にめんどくさがりなのである。故に頭脳労働もいつもこちらへ丸投げ。彼の心労は溜まる一方だ。

「……船底後方に、大型の貨物倉庫がありましたよね。そこに乗客全員の荷物を集めさせましょ。その上で、乗客の皆さんにはそれぞの船室で大人しくしておいて貰います。少々無理はありますが、これで乗客の荷物目的の占領だと思わせられるでしょう。我々は仮にも盗賊団なのですから、盗賊団らしくしておかないと余計な疑いを掛けられます」

「そんなもんなの?」

「そんなもんなんです。後ついでですが、ゲイヌシンへ直行するようになされましょか。一応寄港無しでもあそこまで辿り着ける程度の燃料は積んでいるようですし、何より姉さんの目的には……」

「んなこといちいち気にしなくて良いわよ。むしろアタシにとづち

や、その目的つていうの自体モノのつこでみたいなもんだしねえ。
無理して下手打つのは最悪よ？」

「まあ、それもそうですね。なら先ほど話した通り、乗客は全員最初の寄港地で下ろす、といふことで良いですか」

「だーかーら、そーいう細かいコトはそつちで考えて、つてば。アタシに振られても答えらんないわよ」

「では、そうしておきます」

こんな彼女だが、決して盗賊団の面々は嫌々従つてゐるわけではない。むしろ喜んでそこに付き従う者がほとんど。参謀役の彼にしたって同じである。……彼らは皆、“姐さん”が居なければ今こうしてまともに生きていること叶わなかつたであろう境遇なのだ。有り体に言えば、彼女は命の恩人なのである。無論、ただそれだけの理由でその下に付いているわけでもないのだが、そこはまあ話すと長いので省略する。

「ではまた放送しますので、姐さんは貨物倉庫の確保お願ひします。恐らく放送と同時に乗客が押し寄せることになるでしょうから、可能な限り迅速にやつてくださいね」

「誰に言つてんの、任せなさいって！ で、その貨物倉庫つてどこだっけ？」

「……船底後方です。放送室前の見張り1人2人連れて行つて良いですよ」

一瞬沈黙でもつて应えそうになるが、そこをぐつと耐える。大風呂敷を広げるだけ広げてど真ん中に穴ぶち空けるのは彼女の得意技だ。こんなことでいちいちメゲてちゃこここの参謀は務まらない。

「んじや、行つてくるわねえ。ここは任せた！」

「任せました」

とつとつという掛け声と共に放送室を飛び出していった彼女の背中を見送る。階段を駆け下りる音が聞こえなくなつたあたりで、青年は放送機へと振り向いた。

手慣れた様子で機器をイジり、船内全域放送であることを確認。

ついで扉が閉まっていることも確認した上でスイッチをオン。バン、と、魔動式放送機特有の重低音が響く。次いで放送開始を知らせるアナウンス音が放送され、船内が静まるのを感じた。

『あー、先ほどお伝えしました通り、乗客の皆様に今からいくつか指示を出します。どうぞ騒がず静かに聞いて、静かに従ってください』

我ながら無茶なことを言つてゐると思つ。しかし、ここは姉さんの仕事に期待だ。騒ぐ群衆の鎮圧とか、さうと彼女の得意分野に違いない。

『まずひとつ、船底後方の貨物倉庫へと手持ちの荷物全てを持って来て頂きます。これらは全てこちらでお預かりしますのでどうぞよろしく。次に、荷物の引き渡しが終了した乗客の方は各自の船室で大人しくしておいてください。下手に出たり彷徨いたりすればどうなるかとかは、まあ言わずともご理解なされていると思いますので敢えて言いません。ご協力お願いします。……えー、で、繰り返しますが……』

はじめの放送と同様、3度同じ内容を繰り返す。面倒だが、集団へしつかり意思伝達を行う上では必須の作業だ。これだけで伝達効率は大きく変わってくる。

『……というわけで、重ね重ねご協力お願いします』

数言数句違いはあつたものの、概ね同内容の放送3回目を終了。まず最優先でスイッチをオフに、そして放送が切れたことを確認した上で大きく溜息を吐く。

実はこの指示ふたつ、大きな抜け穴がある。まず、荷物を受け渡す必要が無いこと。少し冷静さを残す者ならば、とつとと荷物ごと部屋に引きこもるだろう。どこかの船室に集結されて、そこから反抗とかされるかもしない。たつたこれだけの指示で、確實に荷物を集めるのは難しいのだ。

「……ものの見事なまでに綱渡りですね、ほんと」

まあ、急場凌ぎの作戦としてはこんなものだろう。実は乗客の荷

物なんぞどうでもいいのだが、それを言つたところで混乱が深まるだけのは分かり切つたこと。ならば、ありがちなシージャックに見せかけるのが一番。見えない何かよりも、見える脅威にこそ人は冷静な判断を下せるものなのだ。

「さて、これからどうしますかね……」

さつき姉さんは見張りを2人連れて行つたので、今ここには参謀役の彼と見張りが4人。実際もう放送室はいらないのだが、あつさり放置して妙な勘ぐりされるのも鬱陶しい。よつてある程度固めておく必要があつてこの体制なのだ。

暇なのだ。そもそもここを取り返しに来るような、勇気ある一般乗客がいるとは考えにくい。傭兵だとか騎士だとか、そういう戦闘を生業とする人種が乗つていないことだけは確認済み。あと不確定要素としては素性不明の旅人数グループだが、彼らが急に連携できるとも思わない。単独で攻めるには、盗賊数人の壁は厚いだろう。「さつぱりやること無いですね。……放送室なんだから、何か音楽を放送できる設備とかないんでしょうか……？」

畜音魔石と呼ばれる棒状の石に音を記憶させ、再生する装置が存在する。なかなかに高級な道具であるため一般人はそう持つていないうが、こんな大型客船とかなら置いてありそうなものだ。なんたつてあの放送アナウンス音も何かしら音を記憶してあつたわけで……

「…………」

放送機器の裏をござごそと漁つていた参謀な彼だが、ふと気づいて耳を澄ませる。がた、どか、という何かと何かをぶつけ合つつな音、そして怒声。あれはそこで見張りに立つてゐる団員の声だ。

防音設備のせいで聞き取りづらいが、間違ひ無い。

「まさか、襲撃してくる人がいるなんて、ね……」

油断はあつた。まず防音機能付きのドアを閉めっぱなしというのがマズい。目の前でドンパチやってくれたから良かつたものの、下手すればそのまま奇襲受けるところだったわけで。

そう思考を回しながらも得物を回収してドアの取つ手に手を伸ば

し、ふと考えを改める。放送室の手前は細い廊下。仮にそんな地形に彼が加勢したところで、盗賊団側の戦力の増加はほとんど無いに等しい。襲撃者側が突破できなかつた場合、特に問題無し。もし見張りが突破される戦力だつた場合、青年の加勢に意味は無し。つまり、今彼に取れる最善の一手は、ここ入り口の手前死角で息を潜めること。

ここまでを〇コソマ3秒で考え、実行。彼の手に馴染む大降りのダガーナイフを脇に寄せ、気配を殺して壁に寄り添う。気配に関しては今更な気がしなくもないが、まあそこは気分の問題だ。

そういうする内に、扉の外での戦闘の気配が静まる。直後、自然に開けられる扉。そこから覗いたのが青年のよく知る顔でないことを判断、素早くダガーナイフを突きつけた。……が、あっさり棒で払われる。あの木棒、見張りの1人が持つていた得物だ。

「……やつぱり、部屋の中にもまだ居ると思つたんだー」

「『明察をどうも』

軽いバックステップで距離をとつたのは、少年。まだ10と少しぐらいか。ただ、纏う雰囲気はもう少し上。驚いたことに、彼以外に人の気配は無い。たつた1人で4人の盗賊を無力化してのけたといつんだろうか。

「さて、しかしこちらとしても、この部屋を明け渡すわけには……」「うん、それはどーでもいいんだよ。君が逃げ出そうとしてることも含めてね」

「……どういうことですか？」

確かに青年は逃走を第一に考えていた。目の前の少年の容姿に騙され、盗賊4人が敗れ去つた事実を忘れるほど彼は耄碌していない。……が、それで良いとはどういうことか。別に、これ以上の増援を呼ばれてもどうにかする自信があると。そういうことなのか。

「んー、どーいうことって言われると困るんだけど。とりあえず僕が聞きたいのは、アサミ、つて人について、なんだよね」

「……姐さんに、何か？」

アサミ。確か姉さんの名前だ。

「あ、やっぱり居たんだここに。名前からしてそーじやないかとは思つたんだけど」

……これは、思つていたよりずっと悪い方向へと事態が転がつているらしい。素性の知れない旅人が、姉さんを探す理由。十中八九、来訪者がらみだろう。

盗賊団の面々は、皆彼女が異世界からの来訪者であることを知っている。そしてそんな来訪者に懸賞金が掛けられていることも、もちろん。むしろ、それ故に彼女を守ろうとわざわざ盗賊団を結成したりという経緯があるのだが今それは関係無いので置いておく。

「端的に聞きますが……あなたが彼女を捜す理由は、来訪者、という言葉に関係有りますか？」

「んー……まあ、関係はあるね」

確定か。こうなれば、意地でもここでこの少年を足止めするしかない。賞金田当ての人物の汚い手に、姉さんを触れさせてたまるか、と。

「……ならば、あなたをここから移動させるわけにはさせん」

「……え」

「良くて足止めでしようが……その身削らせて頂きます！」

「え、ちょー？」

ダガーナイフを構え、素早く接近。牽制に突き出した左腕、その死角からナイフを振り上げ……

「がつ……！？」

「あ、えーと、ごめん、つい……」

側頭部に強い衝撃を受けた彼は、そのまま昏倒してしまひ。時間にして、僅か1秒以内の出来事。

時間稼ぎさえ無理だつたか。ブラックアウトしていく意識の片隅で、青年はそう自嘲した。

「……で、さ。一体どーいうことなの……？」

……ひとり、残された少年の疑問に答える者は、いない。

第拾捌話 船底遭遇・ふねのそりでいんこちわ

客船前部の職員用階段を一段とばしで駆け下り、角を曲がる。前方には船体に沿つて軽く湾曲した廊下が伸びていた。後はこれを船尾まで直進すれば、指定された貨物室だ。

はじめは全員で放送室へ向かっていた華月たちだが、その後の放送で貨物室の方も重要だと判断。そこで一手に分かれ、片方はそのまま船底へと降りてきたのだ。

「はあ、はあ……ちょっと、待つて……」

「……体力無いな、貴様」

軽く息を整えていると、手すりに乗りかかるような体勢で夕依が降りてきた。華月の全力ダッシュに付いて来たため、息絶え絶えである。

「しようが、ない、でしょ……走る、速さが、違う、のよ……」

「別に無理して喋らなくても良いぞ。どうせここからは急がん。少し休むか?」

「そう、させて、貰う、わ……」

壁に背中を預け、荒い息を整える夕依。たかが船といえ、甲板から船底階までは4、5階建ての建物相当である。それだけの距離を男性の全力ダッシュに付いてきたのだ。彼女もその年代の少女としてはスタミナのある方だろう。

言つておぐが、何も別に好きこのんで船内全力疾走していたわけではない。というか、船後部へ行くのにわざわざ前部の職員用階段使つてゐるのだからちゃんと理由がある。まあ隠すことでもなし簡潔に言おう。混んでいるのだ、後部の階段は。

そもそもこの船、前部に機関室や操舵室等の乗員室、後部に客室類が配置されている。通常一般人の訪れない船底以外は大体この基本構造通り。よって、乗客用の昇降階段は後部に2組、合計4つしか存在しないのだ。少ない気もするが、構造上の問題とかあるのか

もしれない。

そこに、先の放送。許容量以上に人間の押し寄せた階段は、完全にその機能を停止させていた。それを避け、こちらの職員用階段を使つたのである。

……因みにこの場所、本来ならば一般客立ち入り禁止エリアだ。よつて当たり前に掛かっていた鍵なのだが、これは華月の魔法で難無くクリアしてしまつた。立派な犯罪行為な気がするものの、今は緊急事態、つまり仕方無い。あと、急いでいたのも途中で“乗員に”見つからぬいためだつたりする。

「……ふう。……行けるわよ」

夕依の息も整つたようだ。

さて、ここからは隠密作戦である。とりあえずやることは、貨物倉庫を偵察し、相手の規模と程度を把握すること。あと、具体的な目的も。もし仮にそれがこちらのやることを阻害しなければ、このまま指示に従うというのも手なのだ。そのためにも、こちらの一般乗客とは違う怪しい動きを相手に見られたくない。

双羽の方は逆に放送室を襲撃し、あわ良くば占領する手筈である。いざという時、迅速な情報伝達手段である船内放送を掌握していること。これは大きなアドバンテージとなるからだ。これは双羽自身の作戦でもある。

因みに彼曰く、この役目は逃走に適した筹魔法が適任なんだとが特に否定するわけではないので了承したが、どうも双羽には別の目的があつたような気がする。最初の放送の時も、『もしかして、この名前つて……いや、いくら何でもまさかそんなことは無……くも無い、かなあ……』とか何とか呟いていた。相手に心当たりもあるのだろうか。

……まあ、今そんなことを気にしても始まらない。先ずはやるべきことを、だ。

「一応注意しておぐが、相手に見つからんよつにな
「分かつてるわよ。……呪術・路傍の石……」

「も」こと亥巳夕依。す、と存在感が薄くなる。意識を逸らせば、そこにいることを忘れてしまいそうな。そんな希薄な気配。

華月は知る由も無いが、双羽と夕依が出会ったときにも使われていた魔法だ。

「ほう、そんなこともできるのか。まあ俺も似たようなものだがな。

……“隠”せ

手のひらに“隠”的文字を書き込み、発動。自分では効果を確認しつらいが、今他人が華月を視認することは難しいだろ。『氣配云々ではなく、ただ単に対称へ焦点を合わせにくくする』といつ仕組みだ。まあ、結果としての効果は似たようなものだが。

「行ぐぞ」

足音に氣を付けつつ、廊下を進む2人。華月の場合見えなくなつてるのは姿だけなので、音で居場所のバレる可能性がある。その点、『氣配丸』と消してゆる夕依は気楽なものだ。普通にすたすたと歩けて羨ましい。まあこの先の貨物倉庫には乗客が押し寄せてる筈なので、あまり音とか気にし過ぎたところで仕方無いのかもしねえが。

そのまま廊下を進み、貨物倉庫の入り口が見えるところまで辿り着く。予想通り、そこには溢れんばかりの人の波。しかしあこの船、こんなに人が乗つてたのかと感心してしまう程だ。これでは盗賊団の姿なんぞ見えやしない。

「どうする、金峰。貨物倉庫に入るのは無理そうだぞ」「

「……壁に穴でも空ける?」

「なんだそののつけから物騒な案は。船壊してどうする」

「あら、確かにそうねえ。いい方法かと思つたんだけど」

「仕方無いわね……それなら、入り口に詰まつてる人を……」

「だから何故貴様はそう発想が物々しいんだ。もう少し様子を見てから決めても……ん?」

「いや、ちょっと待とう。今、明らかにおかしいセリフが混じつてはいなかつたか。

「でもあそこ入つとかないと困るのよねえ」

「ああそうか。……で、貴様は誰だ？」

ゆつくりと振り向き、いつの間にやら背後に立っていた人物を見据える。ざつぐばらんな黒髪を散らした長身の女性。誰だ。

「…………この間に……？」

遅れて気づいた夕依が、驚きに目を見開きつづくと後退る。華月だつて、会話に参加してこなければもつと気づくのが遅れただろつ。

「まま、質問はひとつづつ、つてねえ。あ、因みにここ来たのはついさつきよ。なんか会話してる二人組居たから、何かな、つて」何だ言って、律儀に答える女性。ちょっと順番が逆のようない気もするが、そこは気にしない。

「どうも回答を有り難う。……ところで、もう一度聞こうか。

貴様は、誰だ

「人に聞くときや自分から、つてよく言つたアタシはあんまり気にしないしねえ」

やつぱり気にしないらしく。

「アタシの名は、アサミ。名前のまんまだけど、今回シージャックしたアーサミー盗賊団の団長よ」

「ほう？」

「…………」

ぴし、と一瞬体を強張らせ、即座に戦闘態勢で距離をとる夕依。華月もそれとなく構え、警戒を強める。対してアサミはえらく余裕だ。何か秘策もあるのか。

「まあ、それよりも。アンタたち強そうねえ」

「…………それよりも、つて……」

「あ、もしかしてアンタたち、来訪者でしょ」

「…………なんで、そう思うの……？」

何故、分かつたのか。特に不審な行動はしていないはずだが。

「なんで、つて、変な魔法使つてるでしょうが、アンタたち。アタシの目は誤魔化せないわよ？」

そういえばこの女性、はじめから夕依を認識していた。つまり魔法が効いていない、もしくは何らかの方法で魔法の効果を潛り抜けたということだ。ならば、奇妙な魔法を使っていることにも気づくだろう。そこで、確信を根本に力マを掛けってきたわけだ。夕依はそれに見事に引っかかった、と。

「しかしな、言わせて貰おう。……それに何の意味がある？」

「大有りよ。なんたってやり合つ大義名分ができるじゃないの」

「……やり合つ？」

それまたおかしなことだ。華月たち襲撃された側が盗賊団へ挑むのならいざ知らず、彼女がこちらとやり合いたがる意味は無い。懸賞金目当てでもなさそうだが。どういうことだろう。

「いまいちそちらの言つていることが見えんのだが……」

「そうねえ。乗客の人巻き込むのもアレだし、あっちは行つてくれる？」

「……もつ一度言おうか。意味が分からん」

「んじや、5数えたら攻撃するわよ」

「おい」

なんかもう会話が成り立つていない。

「5、4、」

「おおい」

……まずい。このアサミとかいう女性、本当にやるつもりだ。しかも来訪者と知つて挑むのだから、それなりに実力はあるはず。何も無しに受けけるわけにもいかない。

「3、2、」

手のひらに“防”と書き込もうとしたが、ふと悪寒がして止める。これは、まず場所を移動すべき。

なんか展開について来れてない夕依を引きずり、とりあえず指定された方向へ離脱。華月だつて乗客の皆さんを巻き込みたくない。

「1、」

隠れる場所は無し、どこかに文字書く暇も無し。……もつと温存

しておきたかつたのだが、しじうがない。アレを、出そう。

「、〇、つたあ！」

「……“防”げ、防符！」

大きく振り抜かれたアサミの手元から、何か青白いものが迸る。同時、華月の懷から取り出された紙の束が散り、それぞれに描かれた“防”的文字が薄く輝く。一泊置いて、両者激突。相殺し合ったのか偶然なのかは知らないが、綺麗に両方吹き飛んだ。

「へえ、やっぱりやるじゃないの」

「そいつはどうも」

華月としてはわりかしフルパワーに近い防御だつたのだが。一撃で吹き飛ばされるなんて想定外も悪いところだ。

……というかそもそも、何なのだろうこの状況は。なんで華月は攻撃されているのか、答えてくれそうな人はいない。

「んじや、次いくわよ、次！」

「ぬお……！」

またも放たれた青白い何かを、今度は夕依ごと枝分かれした廊下に飛び込むことでやり過ごす。目標を失った攻撃は、華月たちの代わりに廊下の内壁を切り裂いた。一撃でなんか激戦後の光景みたくボロボロになつた壁を見、アレは絶対に食らつてはいけないものだとこう認識を強める。

「……聞いて良い？」

「なんだ」

やつとこせ、夕依が復活したようだ。余りにフルボッロな壁に驚いたためかもしない。

「……なんで、私たちが襲われてるわけ？」

「さあな。……しかし、分かつてていることがひとつあるぞ」とりあえず廊下を奥へ進む。逃げたつてしようがないのだが、アレはそう何回も受け止められない。

ならば先ずは、良いポジションを確保することから。当面の目標は、廊下の途中に放置されたあの大きな木箱だ。かなり頑丈そうだ

し、 “堅” とでも書を込んでやればじめりへは保つだらう。

「……あの人の名前？」

「それを含めればふたつか。いやな、まあ簡単なことだ。……とりあえず、一度奴をなんとかしなくては」

「……それもそうね」

「だらう。といふことで、やるだ

「しょうがないわね……」

どうも相手さん、話を聞いてくれそうもない。ならば、まずは倒すのみ。話し合いか他の手はそれからだ。

お互に戦闘の意思を確認しつつ、ついでに飛んでくる青丘の
も確認し、揃つて木箱の裏へ飛び込む2人であった。

第拾玖話 紙札蒼斬・おふだだつたりあおかつたり

多少背後を気にしながらも全力ダッシュ、突き当たりの角を右側へジャンプ。翻ったマントを掠めるようにして青白い閃光が迸るが、そんなもの気にしない。次の角を左に曲がった白衣を目に捉え、追隨して滑り込む。見れば前を走っていたはずの華月は歩を止め、壁に向かつて何やら「ゴソゴソ」していた。

「……何してるのよ」

「壁の補強中だ。流石に逃げるのにも飽きたのでな、一いつで反撃開始といぐぞ」

「そうね……」

短く答え、そつと角から頭を出す。どうやらまだアサミは向こうの角まで来ていないらしい。存外ゆっくりとした足音が聞こえるのみだ。……彼女が姿を現せば、その時が戦闘再開の合図である。「まあ幸い、奴の魔法とその特性、あと性格等は大体掴んだ。次からは、そうやられっぱなしということにもならんだろう」「それならいいけど

まあ、先程からかれこれカツブーメンの待ち時間2つ分は逃げ続けてる。そろそろ走り回るのにも限界が来ていたところだ。ここで腰を落ち着けた方がいいのかも知れない。

「……それで、どうするの？」

「まあ、基本は今までと同じだな。俺があの魔力を捌き、その内に貴様が攻撃を仕掛ける。今回は壁にも相当な補強をかけておいた。先と違うのはそこだ、これである程度は耐え切れるだろう」

あのアサミを相手取るにあたり、とにかく脅威なのが彼女の魔法、その攻撃特化した性能だ。あの青白い閃光自体は、どうも“斬撃”を射出しているものらしい。で、まあこれはいい。問題は、華月の渾身の防御を一撃で消し飛ばすその威力、そしてついでの如く廊下一本ボロボロにする攻撃範囲、これだ。この特徴のせいで夕依たち

は防戦、といふか逃走一筋になってしまつてゐる。

無論、弱点だつてちゃんとあるにはある。あの蒼い閃光、操作性が妙に大雑把なのだ。おかげで華月の防御札を用いた“逸らし”が有効なわけだが、それも前述の広範囲特性が補つてなお余つてゐる状態。狙いを絞ろうにも、余波がわりかしシャレになつていい。決定打こそ無かつたものの、華月、夕依共にあちこち傷だらけだ。あまり芳しい状況ではない。

「壁を盾にして、防御と攻撃を役割分担……結局は同じじゃないの？」

「いやまあ待て、誰もそれだけとは言つていない。ついさつき貴様に言つたあの作戦もあるだろう。他にもいくつか仕掛けはいるぞ。……なんせ、見るからに搦め手に弱そうな雰囲気だからな」

「……まあ、あんまり物事考えてなさそうよね……」

今さつき会つたばかりの人物だけに何とも言えないが、これは2人の共通見解だ。あれだけ戦闘向きな魔法なら色々とやりようもあるだろうに、ひたすら真っ直ぐこちらへ打ち込むのみ。バカとか何とかいうよりも、愚直とか武人気質とかそういうものに近い感じがする。

「さて、お出ましだ。まず仕掛けるか……」

向こうの曲がり角へ姿を見せたアサミをみとめ、小声で指示してくる華月。まあ無駄なことだとは思つただが、んなこと彼にだつて分かつてゐるはず。

「……呪術、金縛り」

ちらりと廊下の角から向こうを覗き、歩いてくる女性に照準を合わせて魔法を発動……するが、当たり前のように避けられる。今までと同じだ。特に見えたりする類のものでもないのに、しつかりかつつり回避されてしまう。

「そこねえ。ていやつ！」

気合いと共に放たれた閃光を見、慌てて頭を引っ込める。直後華月が投げ付けた紙切れによつてその軌道は逸られ、結果として天

井が一部薄くなつた。なんか破片落ちてゐし、上を人が歩いたら底抜けそうな氣もする。

「ちつ、コイツも少なくなつてきたな。何か別の手を考えるか……」

懐から取り出した紙束と睨み合い、ひとり思考を回す華月。様々な漢字一文字と複雑な模様の書き込まれたその紙切れ、彼の新兵器である。その名も“札”。今のところ、初めに使つた“防符”と今閃光を逸らすのに使つてゐる“曲符”のみ夕依は確認してゐる。もちろん他にも色々あるだろう。華月の魔法、その最大の弱点である発動の遅さと付隨する連射性の低さを補う強力な武器だ。

ちなみに実は文字周りに刻まれた模様とか適当で、ものとしては紙に書かれた文字を魔法として発動させてゐるだけ。非常に簡単な仕組みだ。よつて量産が簡単というのも利点のひとつではある。模様付けたのは男の口マンらしい。よく分からぬ。

「全く、いつまで逃げてんのよ。ちょっとはやり合つ氣無いの？」

「……そもそもそちらが勝手に仕掛けてきたのだろう。このまま見逃してくれさえすれば文句は言わんが」

「うーん、そりゃ無理ねえ」

「そうか……なら、多少の強攻策には目を瞑つてくれたまえ」

廊下の角越しに言い合いをするというのもなかなかに滑稽な図だ。しかもセリフの応酬しつつも攻撃の手を緩めないあちらさんのせいでツッコむ暇さえ無い。器用なものだ。

「良いわよ、何するつもり？」

「誰が敵にそんなこと教えるか。身をもつて知るがいい」

「ケチねえ」

「ケチでも何でも良いがな。……これでも食らえ」

突然身を乗り出した華月は、アサミに向かつて何かを投げつけた。いくつも重ねられていたであろうそれは、空中で分裂するとそのまま廊下の向こうへと散らばる。空を切り、結構な速度で飛ぶ細長いシリエットは……

「……か、紙飛行機……」

「無論ただの折り紙では無いがな」

明らかに不穏なこの紙飛行機群に対し、しかしアサミは冷静だ。自分の方へと飛んでくるものだけを確実の魔法で撃ち落とす。精度こそ悪いものの、ただの紙なんぞ余波が触れた時点で真っ一つ。そつやつてアサミを避けるように広がった紙飛行機たちは。

「……“爆”ぜろ、爆符」

突如、爆発した。どうも書かれていたのは“爆”的らしい。変則遠距離型爆符、とでもいったところか。

流石のアサミもこれには少し驚いたようで、もうもうと立ち上る土煙から一步引いたところで立ち止まる。……この、タイミング。

「今だ、金峰」

「……凶運・頭上注意」

予め決めてあつたタイミングで、夕依の魔法を発動。当たり前のようにアサミは回避行動をとろうとして、戸惑う。恐らく魔法の照準が自身でなく下方へズレていることをいぶかしんだのだろう。だがそれでいい、止まってくれることにこの攻撃の意味はある。

「え、ちょっとそれアリ?」

そんな彼女に向けて、いや違う、そんな彼女の足下の床めがけて、先程爆発させず煙に巻かれていた残存紙飛行機が雨の如く落下した。床に対して発動した“運悪く上から何か降つてくる魔法”に従い、空を漂う紙飛行機は落下軌道を描いたわけだ。いくら夕依の魔法を確実に避けてくる反射といえど、これは避けきれない。

「それって反則じゃないの、ねえ」

「芸が無くて済まんが……“爆”ぜろ、縛符」

ドゥン、と。廊下の遙か向こうまで響くよつな音を立て、煙はさらに広がる。ただ砂地とかでもないこの場所ゆえ、大した視界妨害にはならない。どうやってかあの爆発を受けきつたらしいアサミの姿もばっちり見えてる。

ならば、狙える。

「……呪術・金縛り」

「いったー、って、あら、動けない」

「これで何とか動きを封じ……」

「んじゃ、もうちょっと本気出すわよ？」

「え、本気つて……きやあつ！？」

突然夕依の体にものすごい負荷がかかる。アサミが、金縛りに抵抗しているのだ。しかもあれ、きっと腕力だけでやっている。人間じゃない。

「あらら、思ったより堅いじゃないの」

「……つ、これ、もう保たないわよ……」

「十分だ。……“縛”れ、縛符！」

華月の号令に反応し、廊下の隅っこに仕掛けられていた札が一斉に飛び出した。それらは瞬時にアサミに張り付き、体を覆つていぐ。それにつれ、夕依は体にかかる負担が軽減されていくのを感じた。

「あっしゃ、これは流石に無理ねえ。全く動けないわ」

「……済まんな、金峰。今しばらくその魔法を続けておいてくれ。正直俺の縛符のみでは止め切れる気がせん」

「まあ、まだしばらくは続けられるわよ……」

似たような魔法の重ね掛けでようやく動きを封じているこの状態。どちらかが気を緩めれば面倒なことになりかねない。そのどころか頭に置き、慎重にアサミに縛られる場所へと向かう。

「大丈夫よ、降参降参。別に放されたからってもう暴れないから」

「信用はできてしまうのがなんだが、そう簡単に解放するのは無理だな。貴様を使ってこの騒動そのもの止めさせる必要がある」

元々それは選択肢のひとつでしかなかつたのだが、アサミが問答無用で仕掛けてきたためこれ一択となってしまったのだ。今更盜賊団の指示に従うというのも変な話だし、この人質をネタに彼らと交渉、通常航海に戻させるのが今現在のベストである。

「うーん、でも仲間が捕まるのは嫌ねえ」

「観念しろ」

「アレ以外居場所無いのよ。人捜してんだけど、それにも足とか必要だし」

「事情は分かるが、じちらにものじらの都合がある」

「そうなのよねえ。困った困った」

いまいち困つてなむずうな口調だが、表情が陰つてているあたり割と本気か。それを見、さうどうしよう、なんか心証悪くなつてきたぞと腕を組む華月。しばらくその真似して首をひねつてみたが、夕依の発想力じや良い案は出ない。

そんな彼女は、特に何というわけでなく後ろを振り向いた。強いて言つなら首をひねることに飽き、新しいことをしてみただけだ。が、おかげさまで夕依はとても珍しいものを見ることができたのだった。

「……だよね、居ると思ったよ何となくそつ思つたけどじやつぱり聞こづ、お姉ちゃん、なんでここにいるのやー!?」

いわく、頭を抱えて叫ぶ双羽なんぞといつレア風景、そつ見られるものでない、と。

第拾玖話 紙札蒼斬・おふだだつたりあおかつたり（後書き）

……場面転換が無い。ついでに脈絡も無い。キャラクターが制御できない……

第廿話 心情内情・うひてひめたる（前書き）

……話が進まない。

もつと一気に沢山書くべきかもしれないですね……

第廿話 心情内情・ついにひめたる

「……双羽の、お姉さん、ね……」

「なんといふか……偶然といふのも、まあバカにできんものなのだな」

激戦の痕残る船底の廊下、そこに直接面したとある船室にて。とある姉弟の久方ぶりであろう語らいを、ぼけつとした顔で見守る夕依と華月が居た。上記の台詞は、そんな2人がどちらと無く漏らした言葉だ。まず姉弟にしては全然似てないだとか何だとか、そいつた小さいことはこの奇跡的出会いの前に震んでしまっている。

なんたって、拉致同然に連れて来られた異界で同様の境遇を持つ肉親に遭遇したのだ。偶然、で済ませるには勿体ないサプライズと言えるだろう。再会した2人の心中は推して知るべしである。

「…………」

「どうした金峰。……思い出しているのか？」

「…………そうね。もう、ほとんど忘れかけてたけど……」

「奇遇だな、俺もだ」

無論、というか何といふか。今やこの世界にも相当馴染んでしまつた華月だが、元居た世界に帰りを待つであろう人はいる。夕依だつてそうなのだろう。本来ならば祝福すべきこの再会の場面が、しかしどことなく寂しい空気を持っていること。それは、彼らがここにいる理由。いつか必ず帰るべき場所を持つ、彼らの。

「…………帰れると、思う?」

「ふむ……俺たちを召還したといふ、あの国まで行けばいいのではなかつたのか?」

「そう……よね。そのはず……」

「…………」

…………ひとつ、華月には不思議に思えることがある。明確な目的を与えられた来訪者の中には、何故夕依は未だベンフィード公国

へと辿り着いていないのか。

華月の場合、あの小屋を本拠地にしづづ行動範囲を広げる計画だった。そうしてこの世界の常識を学びつつ旅の準備を整え、全てがしつかり用意された状態で旅立つつもりだったのだ。基本彼は用心深い人間なのである。まあ、結局本拠地を滅茶苦茶にされたゆえ半強制的に放り出されたわけだが。

対して夕依。彼女が既に長い旅暮らしだといふことは、見てればなんとなく分かる。一行の中でも最も旅慣れているのは彼女なのだ。しかし双羽と出会った経緯を聞くに、ベンフィード公国を目指していたとも考えづらい。どこかしらよりあの国へ至るにあたって、どのルートを用いるにせよキヅキを経由するのは不自然なのである。一応無理して通ることも可能だろうが、旅慣れた人間の採る旅程としては理に適っていないこと甚だしい。そんな仮定より、彼女は全く別の目的を持つて旅していた、という方が余程可能性として有り得る話だ。

それだけのことを考え合わせ、思い至る可能性。道中への異様な詳しき、そして公国が近づくにつれ次第に悪くなつてゆく顔色。そこに今の煮え切らない発言が加わり、華月はほぼ確信に近いものを得た。

……夕依の旅の目的地、それは公国でないどころか。そして彼女の“今”旅の出発点、それは恐らく“ベンフィード公国”。つまり、夕依は一度あの国へ到達し、そして何らかの理由をもつてこの旅を続けている。そう考えれば、様々な事象の辻褄が合つのだ。

「……まあ、とりあえずはベンフィード公国を目指すしかないだろう。俺たちに『えられた目的は、それのみなのだからな』

「そうよね……」

しかし、以上の思考は全て華月の仮定に過ぎない。全て、あの国に着ければ分かることだろう。ここで辿り着いた結論。それは、今とこり彼の心中で完結させておくべきことなのである。

そう結論づけ、華月は未だ頭に渦巻くそれらへの思索を振り払つ

た。

「あ、そうだ。カツちゃんカツちンギヤウ」

そうしておいて、何の前触れ無く謎の名を連呼し始めた双羽に殴符を投げつけ黙らせる。一いつ時、発動の早い札術は便利だ。もう少し種類を増やしてみようか。

「イ、イタイ……」

「……双羽つて、懲りないわよね……」

「……で、なんだ。何か用事か？」

なんだか危険な感じに目を光らせた朝美より目を背け、話題を進める。まだ一度魔法合戦しただけだが、その性格ならなんとなく掴めた。あの手合い、隙を見せれば喜々として人の弱点抉つてくるタイプだろ？ この渾名ネタからはとつと離れるに限る。

「あ、それなんだけどさ。乗客の人たちに、盗賊捕まえました、って言つところかなって」

「……でも、他の盗賊はまだ……」

「あーそれねえ。実はアタシら、通信用の石持つてんの。それでアイツらには降参つて伝えといたし、まあアタシが言うならつて納得してたわよ」

ちなみに彼女、今回の件起こした盗賊団のリーダーなんだとか。ついさっきそれを聞いた直後は驚いたが、少し考えるとなんだか納得してしまった。まだ彼女とは出会つて少ししか経つていないが、早くもそのキャラクターが見えてきた気がする。

「……なるほどな。そんな物を持っていたからこそ、俺たちを見つけられたわけだ」

「そーいうこと。副長から連絡来ないんで、ちょっと気張つてたのよ。そしたら、隅つこでこそと気配隠して2人組見つけたつてわけ。ま、白衣のアンタは隠すの下手だつたけど

「ふむ、そいつは手厳しい」

……なんとの女性、華月や夕依の隠遁魔法を素で見破つていたらしい。重ね重ね本当に人間かと問いたくなるスペックだが、まあ

双羽の血縁というからには分類的には人族なのだろう。魔法だ何だとファンタジーなこの世界においても、残念ながら未だ華月は人間以外の知的生命体を聞いたことが無い。だから多分、鬼とか魔人だとかそーいうのではない、はず。多分、きっと。

「それでさ、僕とカツ…華月くんでお客さんの誘導しようかなって」「……それなら、全員でやればいいんじゃ……？」

そういう作業は多人数でやつた方が効率が良い。その観点からは夕依の言うことも尤もなのだが、何かワケがあるのだろう。

「実はねえ、アタシが行っちゃあマズいのよ。なんせアタシ、あの貨物室で荷物の受け取りしてたから。大半の乗客に盜賊だつてことバレてるのよねえ、多分」

「なるほど。まあ、そんな貴様が行けばパニックになるのは当然か。……では、金峰が残るのは何故だ？ 今更貴様を独りにしたところで、そう裏切りなどするとは思えんのだが」

そもそも、双羽と合流した時点で朝美の拘束は解いている。彼女なら、今の時点でこの場の3人から逃げ出すなどわけも無いだろう。そこに夕依一人残したところで意味があるとは思えないのだ。

「そりやま、アタシが暇だからよ」

「……は？」

聞き間違いだらうか、と。己の耳を疑い過ぎて、不覚にも夕依とハモつてしまつた。不覚だ。重要なことなので2度言つた。

「やー、流石に独りこの部屋で待つのは暇過ぎるでしょ。だから話し相手が欲しいな、つて。それにできれば同性が良いし」

「……そう、ですか……」

「……何故だらうな、今の説明に納得してしまっ俺がいる」「しょーがないよ、お姉ちゃんいつもこんなだもん」

自分勝手というかマイペースというか、いや何なのだろう。当初、弟であるはずの双羽とはえらく似ていないとthoughtたものだが。しかもつて、朝美の行動原理を成す独自のリズムにはどこか彼を彷彿とさせるものがある。まあ、それでも対極姉弟であることによく変わり

は無いのだが。取り扱い辛さばかり似るとは、どうにも傍迷惑な人たちだ。

「……んじゃ行こつか、華月くん。力ナちゃん、大変だと思つけどお姉ちゃんをよろしくね」

「そうだな……うむ、まあ金峰、精々頑張ると良い。応援だけはしておくれぞ」

「……え、と。頑張つて朝美さんの相手、を……つて、あれ、頑張つて……？」

「なーんかアレねえ、アタシの扱い悪くない?」

「ん、気のせいだよきっと。それじゃ行つてくるねー」

言つことだけ言つて、とつとと部屋を出て行つてしまつ双羽。こういうところが似ていると思うのだが、さて彼らに自覚はあるのか。

……いや、自覚有りの方がいくらか厄介な氣もする。
「む。流石に一人任せにするのは悪いな。……とこいつで俺も行くとしよう」

適当に理由を付け、部屋を出る。その際夕依が何か言つていた気もするが、まあ聞こえない。当たり前のように部屋の前で待つていた双羽と合流し、船後部の階段へと歩を向ける。

「僕がお客様さん飛び越えて上の階に行くよ。華月くんはこの階の人お願い」

「ふむ、理には適つてゐるな。よし、良いだろつ。この階は任せたぞ」

「ん、お任せします」

いつも通り篠で樂する双羽に並び、あちこち抉れた廊下を歩く。改めてこう見てみるとアレだが、派手にドンパチやらかしたものだ。とはいえる、まあ残る傷跡の大半は朝美なわけで。いやしかし、全くもつて豪快な女性である。そしてやつぱり、双羽とはほとんど似てない。ホント似てない。

……しかしそんな朝美が、弟にだけは似合わぬ優しげな表情を向けていたこと。まああれだ、兄弟のいない華月にとつては羨ましさ

半分、といったところか。

「……んー、お姉ちゃんも遠慮無しだね……華月くんとかカナちゃんがやつたんじゃないんでしょ、コノ」

「俺にこんな大量破壊可能な技は無いぞ。ほほ逃げていただけだ」「そつか。……うちのお姉ちゃんが、『迷惑おかげしました、と』まあ、確かにご迷惑は被つたな。……が、良い姉ではないか。弟を、本当に大事にしている」

「ふふ……そだね。僕の、自慢のお姉ちゃんだよ」

そう言つて、自然に笑みを浮かべる双羽。今までのどこか何かを被つたような、作り物臭い笑いでなく。恐らく華月には初めて見せたであろう、素の表情だ。

……また少し、思い出してしまつ。あの日、一いつ切ちらへ来なければまた出会つていただろう人たち。やつていたであろう様々なこと。兄弟云々は置いておいて、また双羽に何か羨望に似たものを感じる華月であつた。

「おつと」

少し考える間に足が止まつていたのだらうか。気がつけば少し先行していた双羽の簫を、心持ち早足で追いかける。

「済まんな把臥之、少し遅れ……」

軽く掛けた声は、しかし途中で中断する羽目となつた。ちらりと見えた少年の目に溜まつた、透明な滴のせいだ。

「あ、華月くん……えつとね、別にちょっと用ひ用ひが……」

「……把臥之」

なんかよく分からぬまま言い訳じみたこと言い始めた双羽を、華月は手で制した。先まで自分のこと考えてた頭を、手早く外向的に切り替える。口八丁は華月の得意とするところ、ここは自分の役目だ。

「ひとつ言つがな。年下に遠慮されるほど、俺は落ちぶれた記憶はないぞ」

「……うん?」

「まあ聞け。……俺はな、貴様が外見より上の年齢だらうことは分かつてゐる。精神的なものなら更に上をいくのだろうことも、なんとなくだが理解はしてゐる。俺たちを完全には信用していないことも、な。むしろ、警戒している、と言つた方が近いか

「……華月くん……」

泣き顔寸前の目でこちらを見上げてくる少年。しかしその実、精神的なものではこちらを遙かに凌駕する人間。

旅は人の内面を浮かび上がらせる。その節々で見えた彼の聰明さに、似合わぬ落ち着きに、何度違和感と驚きを感じたことか。

「だがああ、ここまで一ヶ月程の旅路を共にしてきたわけだ。そろそろ少しば信じてくれても良いだらう」

「えつと、でも僕は……」

「聞けと言つているだらう。貴様が話すと簡単に言いくるめられかねん」

「……」

「何があつたか、貴様は身の丈にそぐわん精神力を手に入れた。そして、それを誤魔化しながら生きているわけだ。まあそこに何かしら理由は有るのだろうが、俺は聞かん。興味はあるが、ここでは聞かん。貴様が自發的に話すまではな」

押し黙つたまま、見上げる目に真剣さを宿す双羽。その表情は、暗に華月の指摘を肯定するものだ。

「しかし貴様はひとつ忘れてる。貴様はな、まだ子供だらう」
華月だつてまだ法律的には子供だが、それとこれとは別の話。今はツツ口むべきでない。

「子供が泣くのを控えてどうする。感情を思つままに発散してこそ、

だ

「でも僕は、そんな……」

「だから聞けと。……ただ泣くのを控えていれば、それで良い。そう、思うか？ 貴様なら分かるだろう。感情を押さえつけること、その弊害。外面ばかり気にしていては潰れかねん」

「…………」

「まあ」これまで偉そつなことを言ひておいて何だが、ひとつ免罪符を用意してやる。……男泣きとこうのはな、女に見せない」とで許される。嬉し泣きならなお良しだ。……『うつする』、『ここにその条件を邪魔する者はいないぞ?』

「…………うぐ、ひつぐ…………」

割と適当に言つたのだが、最後の台詞は一番効果が有つたようだ。俯いたまま、軽くしゃくりあげる声が聞こえ始める。ここで女性なら抱きしめるなり何なりしてやれば良いのだろうが、あいにく華月にそつちの氣は無い。代わりに、軽くポンポンと頭に手を置いてやつた。

「泣け泣け、たまには感情表に出してみる。しつかり泣いて、それが終わつてからやること見据えればそれで良い」

「…………うう、ひぐつぐ…………」

決して大声は出さず、しかし俯いた顔には満面の笑みと涙を浮かべ、双羽はしばらく泣き続けた。無論華月もそれに付き合つ。

……似合わんことをしたな、と、いつもソリシリアス疲れを吐き出す華月であった。

第廿話 心情内情・うひにひめたる（後書き）

最後の華月君の一言は作者の代弁に近いです。マジメなお話は疲れる。もつといつたりの軽い会話を書きたいなー。

第廿壱話 終船未先・まだあとも「ひょひょ」と

田の前に、黒マントを羽織った小柄な女の子が座っている。正直あまり似合わないとと思うのだが、そこは口を閉ざしておいてあげよう。なんせ朝美が指名し残つてもらつたのだから。

……それにしても彼女、さつきからなんとなく挙動不審である。「えーっと、夕依ちゃん、だつたつけ？」

「あ……えと、そう、です……」

……確かに朝美の記憶が正しければ、彼女は弟のことを呼び捨てでいたはず。というか、旅の仲間と思しき2人に対してこんな懇懃な態度を取つてはいなかつた。いやまあ当たり前なのだろうが、それにしては低姿勢過ぎるのではないかろうか。

そういうえば先の相談時、夕依は朝美の言葉に一切反応していなかつた。双羽の言つことにばかり受け答えしていた様だ。避けられているのか。それにしたつて、原因が全く分からぬ。一応、ついさつきまで魔法を交わしていたという心当たりも有るには有る。しかしもつて、それはなんだか違つ氣がするのだ。

「あのさ、夕依ちゃん」

「……何、ですか……？」

しかし朝美、ここに大人しく悩むタイプの人間ではない。見えている解決手段の中で、最も短絡的経路を選ぶ。そんな彼女の採つた手段は、もちろん。

「なんかさ、アタシ夕依ちゃんに避けられてない？　いやー、お姉さん傷つくわー」

直接、聞く。ここで、ちょっとした事情を鑑みるとかいう配慮、もしくは選択肢を期待してはいけない。

「え、ええ……そんなのじゃなくて……」

「じゃ、何なんかしらねえ。もしかして、まだ会つたばかりつことで緊張しちゃつたりしてる？」「

「それも、違、います……」

「もー、それじゃなんでアタシにはそんな他人行儀なのよー」遠慮なんぞ一切無く夕依を追いつめてゆく。朝美がじわじわ距離を詰めると、夕依もじりじり後退する。そんな移動は少しばかり続いたが、間も無く部屋の壁にまで到達してしまった。もう逃げ場はない。

「さて、なんで逃げるのかしらねえ」

「……え、それは……朝美さんが寄つてくるから……」

「だーかーらー、そのご丁寧な態度の理由教えてくれればいいのよ。別にそんな無理言つてるわけじゃないでしょ」

なんか話し相手が余所余所しい、というだけの話題だったはずなのだが。どうしてこうなったのだろうか。まあ、結果として暇つぶしにはなっているので止めないが。

「……えと、私、年上の人には敬語使うことにしている……」

「あらら。それだけ?」

「そ、そうです……」

なんだそんなこと、と納得しそうになつたがちょっと待とう。見た感じ、あの華月とかいう白衣の青年も彼女よりは年上に見えたのだが。実は背が高いだけのガキンちよだつた、とでもいうのか。それにしたつてマセすぎだろう。将来が心配なレベルだ。もしそのままいけば、確実に禿げる。

「あの白衣、帰つてきたら生え際に気を付けるよう言つといふかしらねえ」

「……は?」

「やー、なんでもないわよ。気にしない気にしない」

どうも朝美には、頭の中の思考を結論から喋る癖がある。そのために時たま、今のような一見謎の台詞が飛び出すのだ。某剣の人風に言つてみると、考即言、つてな感じ。かつこよく言つて何がどーなるワケでないが。

とりあえずはあれだ、華月が禿げる云々は置いておいて、本題に

移ろい。

「ところで夕依ちゃん、なんで年上には敬語使うの？」

「……別に、大した理由は……」

問いかに返す夕依の目を見るが、何か裏があるようでもない。実際ただの習慣とかそのあたりだろう。ならば、大丈夫だ。

「それならねえ。夕依ちゃん、今からアタシに敬語使うの禁止！ そんな大して歳離れてないみたいだし、部活の先輩後輩とかでもないんだから」

「え、でも……」

「でも、じゃないの。あのねえ夕依ちゃん。確かにアタシは年上かも知んないけど、この世界に来たのはつい最近なのよ。つまりここに関しちゃ夕依ちゃんのが先輩つてわけ。分かる？」

「そ、それは、そう、ですけど……」

「夕依ちゃん、この世界来て長いんじょ？ 双羽もねえ、アンタは頼りになるつて言つてたわよ」

「……双羽、が……？」

何故そこに反応する。アレか、青い春過ぎて秋じゃなく春来てる感じなのか。よし、双羽には後で拳一発落としておこう。理由なんて、なんとなく気にくわない、で十分だ。

……ちょうどその頃壁何枚か向こうでは、件の双羽が頭を押さえつつ2連続でくしゃみをしていた。

「でもねえ、アタシが夕依ちゃんに敬語使つていつのもやつぱり落ち着かないでしょ？だからさ、アタシ達は対等。どちらが上といふことは無く、見下すことも低頭することも無い。アタシは、夕依ちゃんとそんな関係で話してみたいの。ダメかしら？」

「……別に、ダメってことは無いけど……」

「それじゃ決定ねえ。今から敬語は禁止、アタシと夕依ちゃんは同じ目的持つた同志、よ」

「……分かつたわ。よろしく、朝美さん」

「んー。まあ、いきなり“さん”付けまで止めるつてのは難易度高

いわよねえ。そこはしょつがないか。んじゃ改めまして、よろしく、

夕依ちゃん

どちらともなく右手を差し出し、握手を交わす。話し相手約一名確保、である。

「……そういえば……」

「ん、何？」

しかし、やはり今まで多少無理して敬語を使っていたようだ。先ほどまでの切れ切れな喋り方に比べ、今は随分と聞き取り易い良いことである。

「……なんで、朝美さんはシージヤックとかしてたの……？」

「そりゃま、足が欲しかったからねえ」

水上の移動において船ほど有効なものも無い。それは当たり前のこと。

「えと、そうじゃなくて……」

しかし、夕依が聞きたかったことはまた別らしい。

「……ベンフィード公国を目指すなら、何もせず大人しくしていれば……」

まあ、それは確かにそうだ。そもそもこの船はゲイヌシン行き。元から目的地へ舵を取っているわけで、そこをわざわざ占領することに意味が無い。

……それはあくまで、本来ならばそうだった、というだけのことだが。

「ま、いくつか理由はあるんだけど。実は、アタシの目的って人捜しだったのよねえ。何処に居るとかさっぱりだから、とりあえずあの国を目指してたってだけで。だからある程度自由の効く移動手段が欲しかったのよ」

「探してたのって……双羽？」

「そのと一り。どーもアタシと同じことになつてたつぽかつたしねえ」

ある日突然消えた弟。そして、何故かそこに关心を持たない周囲

の人間。朝美自身、気を抜けば双羽のことを忘れてしまった。た。

そんな中で朝美はこの世界へと呼び出され、この地へ降り立つた。状況から考へるに、双羽の身にも同様の現象が起きたのだろうと予測できる。ならば、ここは草の根分けてでも探し出してやろう。

見つけ出して、そして一緒に元の世界へと帰るのだ。

「ま、双羽は運良く見つけられたわけだし。こつからは来訪者らしく旅するだけねえ。つてことで、この先付いて行くんでよろしく」「え、と。別に、良いと思うけど……他の2人にも聞かないと……」

「ま、無理にとは言わないけど。どうせ目的地は一緒なんだしねえ」どのみち、ここからベンフィード公国まではほぼ一本道だ。双羽や華月が同行を許可してくれなければ、今まで通り盗賊団を率いつつの國を目指すだけ。そうなると、移動速度的に考えて双羽達を追いかける形になるだろう。一緒に多くとも、大して変わらないわけだ。

「あ、そーいえば。夕依ちゃん達に付いてくとなると、アイツらと一緒にするか考へないとねえ」

「アイツら、つて……盗賊団の人たち?」

「そーそ。元々、双羽を見つけるまで、つて話で付いて来てもらつてたんだけど。流石に何にも無しでほつぽり出すのもアレよねえ。なんだかんだでいいヤツばっかだし」

初めは力付くで言つことを聞かせていたのだが、気が付けば団員達全員に慕われていた。正直、暴力でもつて色々と強いていた記憶しかない。どこでどう転がつて今みたく懐かれたのか、いまいち心当たりも無いのだ。分かるのは、彼らがしつかり自らの意志で朝美に付き従つてくれている、ということだけ。まあ実際、それで十分なのだけど。

「……朝美さんは……なんで、盗賊団のリーダーなんてやつてるの? ……女人なのに」

「別に女性が盗賊率いぢやダメってことも無いでしょ。まあ、アレよ。
そもそもの切つ掛けはねえ」

思い出すのは20日程前。朝美がこの世界の地を初めて踏んだ直後だ。そう、右も左も分からなかつたあの時……

……朝美の思い出話により、ゆっくりと時間は過ぎていつた。

「で、この船の船員の人には盗賊だつてバレちゃつてねえ。今更シラ切り通すわけにもいかないし、じゃあいつその「」と盗賊らしくこの船占領しようか、つてことになつて」

「……朝美さんつて、思い切りいいわよね……」

「あら、誉めたつて何も出ないわよ?」

誉めてるのかどうかは正味微妙なラインだが。まあ、プラスに受け取つてもらえたのならそれで良いだろつ。

流石に長かつた思い出話に聞き疲れを感じたため、壁に背を預ける。巨大な船だけあって、いかにも頑丈そうな材質だ。合金か何かだろうか、金属の冷たさが心地良い。……ついでだが、改めて朝美の魔法の規格外っぷりを認識してみたりする。木造建築とかなら樂々と撃ち抜けるのではなかろうか。

「ん、そういうば。なんかさつさからちよつと騒がしいわねえ」

「え? ……あ、言われてみれば……」

朝美に言われ、耳を澄ませてみる。微かにだが、複数人の話し声っぽいものが聞こえてきた。……あと、なんだらう、少しづつ大きくなつてゐるような。

「近づいて来てる……?」

「みたいねえ。といふか、アタシあの声に聞き覚えあるんだけど」

「……誰?」

「招かれざる客、よ。ホント、忘れてたわ。この船の船員さん」

「……あ、それは……」

朝美の身の上話によれば、シージャック決行当初、手当たり次第船員を叩きのめしては荷物置きに放り込んでおいたらしい。一応出会った船員にはもれなく同様の措置をしておいたのだが、そもそも遭遇していない者も居たのだろう。妙に音声識別能力の高い朝美の聴覚を感じるならば、近づいて来ているのはこの船の乗員全て。仲間に救出された船員達は、船を襲つた賊に立ち向かおうとここまでやつて来たわけだ。その勇気、もつと別のところで發揮して欲しかった。

更に問題なのは、彼らが恐らくは放送を頼りにここまで来たということ。もちろんその場合、目的地は船後部の貨物倉庫になる。十中八九、通るのはこの部屋の前を抜けていくルートだろう。んでもつて、件の貨物倉庫では乗客の誘導に双羽たちが動いているわけで。「……放つておくと、このすごくややこしいことになりそう……」「ま、勇んで来たとこ悪いけど、ここ通すわけにはいかないのよねえ。うん。つてことでアタシはアイツらの足止めするけど、夕依ちゃん Bieber する?」

「え、と……私は、朝美さん抜けてきた人、止めてみる」
本来ならば一緒に手伝いたいところなのだが。朝美の魔法の性質上、あまり付近に味方がいると逆に戦い辛いだろう。廊下という密閉された細い空間なら尚更だ。よつてこの部屋の辺りに隠れつつ、運良く朝美の弾幕をかい潜れたラッキーな船員の足を止める。これが多分、最も効率の良い配置だ。

「りょーかい。もちよつと夕依ちゃんと話してたかったんだけどねえ。ま、良い暇潰しつてことで、精々暴れてくるわ

「……気をつけて」

朝美なら問題無いとは思うが、万々が一といつもある。気をつけるに越したことは無い。

「誰に言つてんの、アタシがそんな柔そーに見える?」
「見えない……」

「その即答、女性として喜ぶべきかどーか微妙なラインねえ。つと、

そろそろ行くわよー」

「……呪術、路傍の石……」

自身に気配薄化の魔法をかけ、部屋を出る朝美の後を追う。ちょうど、部屋を出た位置からギリギリ見える角に一団の人が居た。音だけでどうやつたか知らないが、朝美はこのタイミングを狙つていたのだろう。この位置取りならば、夕依は朝美の戦闘を目視しつつ機に乗じて動けるのだ。

「…………ん？ おい、人がいるぞ！」

「乗客か？」

「いや……ちょっと待て、あいつだ、あの女が盗賊団の首領だ！」

「なに、あの女性が！？」

朝美を発見したことで少し戸惑い、乗員の集団は足を止める。そこに、無造作な足取りで近づく朝美。それを見てもまだオロオロしているあたり、彼らは戦闘に関して素人なのだろう。……まあ、当たり前だが。むしろ乗員が皆戦闘のプロな客船とか何それ恐すぎる。むしろここで気をつけるべきは彼らでなく、その肩に担がれた円筒形の物体だ。通常業務中の乗員があんな物を持つているところは見たことが無い。それに何となく、元居た世界のバズーカ砲か何かを彷彿とさせる造形である。

これらのことより推測できるひとつ的事象。即ち、あの白い長筒は不審者対策の武器か何かなのではないか、と。

「…………とにかく、ヤツを拘束する！ 全員構えろ！」

「へえ、やり合つてワケねえ。面白いじゃない」

バズーカもどきの先端が、全て朝美へと向けられる。夕依の予想は大体合っていたようだ。まだ爆発物なんかを打ち出す物かどうかは分からぬが、あの距離の取り方からして、飛び道具であることは間違いないだろう。対する朝美も腕を引き、完全に戦闘態勢だ。あまり直線上に居座ると流れ弾を受ける可能性があるため、部屋の入り口から体半分だけ中に引っ込んでおく。

「撃てつ！」

「つ、ていやつ！」

バズーカもどきから、真っ白な球状の物体が打ち出される。それらは全て朝美へと殺到するが、ぶつけるように放たれた蒼い閃光がそれらを阻んだ。一瞬にしてバラバラに切り裂かれ、周囲へ飛び散る白い物体の破片。いくつかこちらへも飛んできたため、扉の奥へ頭を引っ込めやり過ぎです。

……直後、破片の着弾地点から次々と白い炎が吹き上がった。どうやらあの物体、当たった対象に張り付いたのち高温で燃焼し始めるという性質を持つようだ。一介の客船に装備される個人火器としては、少々やり過ぎな気がしなくもないが。しかし実際に盗賊やら怪物やらが彷徨くこの世界、その手の備えに行き過ぎという言葉は無いのかもしねりない。

「ふつ、つと、せい！」

「がつ！？」

「つく、距離を取れ！ 近づかれるな！」

夕依がそんなことを考える間に、朝美は乗員を3人ノックアウトしていた。どうやら怪我をさせるつもりは無いらしく、全員素手で叩きのめしている。魔法はあるバズーカもどきによる砲撃を防ぐのに使っているようだ。そうしつつ、巧く位置を取ることで乗員を全て廊下の片側へと留めていた。正直、夕依の出る幕なんぞ全く無い。……更に2人ほどの乗員が、朝美のハイキックと続く回転蹴りを頭部に受けて昏倒した。すぐ仲間に助け起こされているものの、すぐには動けないだろう。そのお返しとばかり、足を振り抜いた体勢の朝美へとバズーカもどきの一斉砲撃が降り注ぐ。それを、先行数発は魔法で叩き落とし、残りは地面へと大規模な閃光を打ち込む反動で回避。一瞬援護しようと思ったが、まだまだ問題無いようだ。ついさっきまで朝美の立っていた位置には、一瞬遅れで白い球体が次々とぶつかつた。

そして、吹き上がる水柱。

「な、何だ！？」

「あらり」

一言話す間も無く、朝美と乗員たちは溢れ出した水流にのみ込まれる。強力な攻撃を立て続けに受け、船底が破れたのだ。そう理解したときには、夕依の元へも荒れ狂う水は迫ってきていた。

「……っ、呪術・強制リバウンド……！」

体を極限まで重くし、ドアにしがみつくことで鉄砲水のような第一派を何とかしのぐ。しかしすぐに水位は上がり、塩水は容赦なく夕依の顔を叩いた。仕方なくドアを放し、魔法も解除することで夕依は浮き上がる。

初めのような荒れ狂う水の流れはもう無いものの、狭い廊下をまるで川のように巡っているため流れが速い。それでも、ここは何とかして階段のある方面へと泳いでいきたいところ。だんだん水嵩も増してきているため、時が経てばこの船底部に呼吸ができるような場所は無くなるだろう。

しかし……

「……泳げないのよね、私……」

夕依は、力ナヅチであった。学校での半強制的な水泳の授業を受けたことだって、もちろんある。むしろ、そうでなければ今頃浮くことさえ出来ずに沈んでいるだろう。なんたって着衣水泳なのだ、浮かんでいられるだけでも彼女は頑張っていると言えるだろう。

……が、それでも多少泳ぐことさえ出来れば、流れを利用して上の階へと向かうことも可能ではあったはず。今この現状では、ただ流れされるままだ。そろそろ位置把握も難しくなってきている。それに、気合いと根性八割で保たせていた立ち泳ぎもそろそろ厳しくなってきた。

「……なんとか、壁に……きやつ！」

塩水が顔にかかり、息が続かなくなつてゆく。流される途中で何かにぶつけたのか、右足の感覚が無い。

ゆつくりと、非常にゆつくりと、体が水流へと沈んでいくのを感じる。そもそも視覚が役を成さなくなつてきた。

……なんともしょもしない終わり方ではないか。生きるため、ただ生き延びるために続けてきた旅の終着点がこんな場所とは。なんだか、罰が当たったような気がしなくもない。自嘲と共に涙を出でた諦念が、夕依の意識を曇らせてゆく。

「…………ん！ 力…………ん！」

薄れゆく意識の中、夕依は誰かの呼ぶ声を聞いた。彼女の記憶は、一日そこまで途切れる」ととなる。

第廿弐話 漫潮流廊・ながれみず「みのみち

盗賊団の指示と偽つた上で、乗客を各自の部屋へと誘導する。双羽の容姿に一瞬怪訝な顔をされたが、そこは“脅されて従つて”いる体でクリア。我ながら驚きの演技力だった。頑張つて悲愴な顔をして見せていたとき、横で吹きだし掛けていた華月の向こう脛を小突くのだつて忘れてない。

……そんなこんなで、まだ貨物倉庫へたどり着いていなかつた乗客含め、とりあえずほぼ全員を上の階へと移動させ終えたのだった。やはり、慣れない仕事は疲れる。階段の一番下の段に腰掛け、うーんと伸びをする双羽。船底部のこの場所に、今人はいない。

一仕事終えてグッタリしている間に、各自部屋への誘導も終わつたらしい。こちらも普段より疲労度2割り増し状態な華月が、一段一段踏みしめるように階段を降りてきた。『苦勞様である。

「華月くん、お疲れさん」

「む。把臥之も、な。しかし、慣れないことをするものではない。妙な箇所に疲れが溜まつたぞ」

言いつつ、肩をコキコキとまわす華月。こいついた類の作業は、えてして使っていない筈の体の部位に効いてくるものだ。双羽にしても、今一番疲れているのは足だつたりする。ほとんどずっと篠で飛んでいたというのに。

「とりあえず、あの部屋へ戻るとしようか。一旦集合すべきだらう」「だね。船員さんも結局一人も来なかつたし、お姉ちゃんと力ナちゃんが止めてくれたのかも」

「そもそもここへ来る気からして無かつたのかもしけんがな。まあ、そこは俺たちの知るところでもないが」

朝美たち盗賊団がノした上で一纏めに放置して置いたという船員たち。見張りすら付けていないあたり、あの盗賊団の適切さが滲み出ているが、まあそこはいい。

船の運航係であり、同時に船の安全管理者でもある船員たちが、このまま大人しくしているだらうか、と。双羽の見立てでは、十中八九この船には不審者撃退用の武器か何かが配備されているはずだ。無論、それらを使いこなす為の訓練だって行われていると考える方が自然。ここは元の世界と違う、危険と日常どがコンスタンツに接近する異世界なのだ。こんな的みた的な船が、狙われることを想定していないなんて考える方が難しいくらいである。

……なんて色々言つてはみたものの、結局は誰も来なかつたわけだが。まあ双羽としても出来れば外れていて欲しかつた予想だけに、ここは素直に納得しておくこととする。

「んじや、早く部屋に戻ろ……ん？」

「どうした把臥之間、何か忘れ物でも……む、何だ？」

簾に乗つていざ行かん、という体勢で双羽は停止する。一瞬遅れ、華月もソレに気が付いた。何かこう、廊下を埋めて押し進むような、圧迫感のある振動音。階段を下りてすぐのところで廊下は曲がつているのだが、その向こうを見てみる気がちよつとしない。

「何だ、この重低音は……」

「うーん……なんかどつかで聞いたことがあるよーな……」

頭に手を当て、記憶を高速検索に掛けてみる。……一件ヒット。あれだ、昔行つた防災科学センターとかいうところで見た、暴風時の高潮模型……

「……華月くん、壁作つて！」

「なに……いや、立ち上がり、『壁』！」

双羽の意を汲み、聞くより先に防壁を展開する華月。“壁”と書き込まれた船底の床が盛り上がり、廊下を下ハーフ目まで隙間無く塞ぐ。

……次の瞬間、廊下の向こうから猛烈な勢いで流れ込んできた水流はその壁にせき止められ、一時その勢いを弱めた。水位はだんだん上がつてくるが、あの壁を越えるまではまだ時間があるだろう。

「……狭いとこを水が勢いよく流れてくる音、だつたんだよねー…

…

「……把臥之が、そんなどうでもいいことを覚えている奴で助かつたな」

まさに間一髪、であつた。

それにしてもこの大量の水、一体何処から出てきたのだろうか。状況からして、おおかた船の外部から流れ込んだもので違いない。とすれば、最も考えられる可能性は“船底に穴が開いた”こと。

ちなみに穴が開いていたとして、その位置は船の横でなく底辺部だろう。もし横つ腹やら喫水線あたりに穴が開いていたならば、この壁なんざあつと言う間に越える勢いで水が流れ込むはずだ。そうならないのは、底辺部に開いた穴から少しづつ、空気を押しのけながらの湖水流入が発生しているためだと思われる。

ついでにひとつ。この船内洪水事件に夕依や朝美が関与していないことはまず有り得無い。船底構造部なんて頑丈な物に大穴空けられる存在、正直なとこ朝美くらいしか思いつかないのだ。この世界の船の詳細構造なんぞ知らないが、多少岩なんかにぶつけた程度じゃ穴が開いたりはしないようになっているだろう。でなけりや危なつかしくて航海なんぞしてられない。

「……さて、どうする？ 上の階へ行く、もしくは廊下を完全に塞いでしまうというのも有りだが」「んー、それもいいんだけど……」

夕依や朝美がこの現象の原因だとすれば、その時に近辺にいた可能性が高い。とすると、2人ともこの暴水の初動に巻き込まれたのではないか。

……ちなみに、だが。残念ながら双羽は姉の心配を余りしていない。なんせ、魔法が無くても色々チート氣味だつたあの朝美だ。“この世界に来た”彼女が、水流ごとに飲み込まれたところでビックリにかかるとも考えづらい。

問題は夕依である。まず、使う魔法がこういった状況に弱いと思わることがひとつ。また、それなりに運動音痴であると思しいこ

とでもうひとつ。旅の途中、盗賊やら猛獸やらから逃げるときにま
ず疲労を見せるのが彼女だったのだ。……初めに足を止めるのは双
羽だつたりするのだが、まあそれは今置いておこう。とにかく、こ
のはつきり異常と言える事態の渦中にあって、彼女の現状と安否こ
そが最大の懸案事項なのだ。

なんたって、旅の仲間なのだから。

「……ということで、僕向こう側見てくるね」

「何が、ということだ、だ。何でもかんでも貴様の基準で考えるな。
しつかり理由を言え、理由を」

「ん、じゃあ……力ナちゃん心配だから見てくるねー」

「姉の名が入っていないあたり気になるが……まあ、アレだからな。
……うむ、とりあえず合格だ。行つてこい」

「行つてきまーす」

なんか今、自分の姉に対して地味に失礼な台詞が呑かれた気がす
る。が、しかし、双羽は気にしない。だつて彼も同じ認識だから。
朝美の前じや絶対言わないけれど。

そんなことを考える間に、簫は無意識を汲み取り高度を上げてい
た。そのまま、特に意識するでもなく最も入りやすい角度で廊下を
塞ぐ壁の上部をすり抜ける。初めの頃に比べれば上達したものだ。
これまで意識して簫を使ってきた甲斐あって、今では物理的に許さ
れる大抵の動作が可能である。単に飛びだけならば、姿勢に関わら
ずほぼ無意識で行うことだって出来るのだ。バック飛行に悪戦苦闘
していたのがまるで嘘のような上達ぶり。自画自賛を嫌う双羽だけ
れども、こればかりは他に誇れる技だろう。誇つたつて仕方無いけ
ど。

「うーん……これで部屋の中に居るとかだったら、ちょっと見つか
んないよね……」

廊下の天井スレスレを比較的ゆっくりと飛行する。一部の小部屋
は戸が閉まっており、まだ中に水が入り込んだりはしていないよう
だ。しかし、すでに水圧で扉が動かないところまで水位が上がつて

きているため、もし夕依や朝美がその中にいるとなるとビックリしようも無い。双羽としてはしつかり退避してくれたことを願うのみだ。

とりあえず、夕依たちの待っていた部屋へ向かってみる。この廊下から上階へ行く階段は、位置的に双羽たちが居たところとあとひとつだけ。そうなると、彼女たちがそのもうひとつの中段あたりにいる可能性は低くない。んでもって、そこへ行くにはどのみちあの部屋の前を通った方が近いのだ。もしドアが閉まつていれば、その部屋だけは中を見ていいこうと思う。

「えっと、こっちがこっちで……うーん、ややこしい」

それにしてもこの船底部、流石本来乗客の降りてこない階層なだけあって、廊下の作りが非常にややこしい。最も外周を船の輪郭に沿つて一周する道はいいとしよう。しかしまつて、そこから内部に伸びる大小様々な通路は、正直人を迷わそうとしているようにしか見えないヒネクレツぶり。こちらで合流しているかと思えば隣はすれ違つてあちらに伸び、あっちが行き止まりだつたとすればこちらはループして枝分かれで一部は結局リターン。そして道の先を隠すかのように林立する柱群。十中八九、外周以外は後から増築した空間だろう。元々がらんどうだったところに様々な壁材などを組み込んだに違いない。それにしたつて設計者の正気を疑う程度には力オスな構造なわけだが。

とはいえる、普段ならそれも笑い話の種で済んだだろう。それらの道は階段部分で全て外周通路に合流しているため、階段から階段までの行き来なら特に迷うこと無いのだ。問題は今みたいな人探しに限り難易度が急上昇すること。全域を風漬しどとか、んなことしてたら日が暮れる。

「……んー、見あたんないね。やっぱ部屋に……ん？」

……というわけで、双羽がその細い通路に目を遣つたのは、ほんの偶然だった。いや、そこに一瞬注意を向けたこと自体は、人捜し故必然だつたかもしれない。しかし、人間ひとりがやつと通れる道の向こう、そこを双羽とは反対方向に横切つた物体を、意識の端に

捉えたこと。これはもう奇跡とか幸運だとか、そういうふた言葉で表現するべき稀なる事象だろう。

「……っ、アレは……！」

流れていた物、それは黒くて分厚そうな布で、それはとても見覚えがある物で、それは確か夕依の着ていた……

……そこまで考えたときには既に、双羽の無意識が簾の先をそちらに向けていた。その時点で、もうその物体は見えなくなっている。水の流れが速い。回り込もうにも、こう入り組んでいてはその行く先を予想することも難しく……

「……行くよ！」「

考えるより、動け。今はとにかく、流されていったあの黒い物体に追いかけること。一言声に出すことでの、それを自身全体にしつかりと認識させる。

一瞬身を屈め、空気抵抗を減らした姿勢から渾身のスタートダッシュ。すぐに眼前へと迫った柱を掠るようにかわし、眼下の水流を巻き上げ簾は空を切る。

この超常の移動手段を手に入れて初めて初めて、双羽は本気で飛んだ。この世界に来て早々木にぶつかりかけてから、すっと避けていたフルスロットルの全力飛行。人が目で追える速度を超えて、物理的な限界すらをも超えた急制動で角を曲がりきる。体に掛かる強烈な慣性を意識から外し、僅かな間に距離を空けた目的物に集中。しつかり捉えたその姿は、もう紛れもなく、夕依だ。

「力ナちゃん！……力ナちゃんつ！」

名を呼びつつ、流れる海水を割つて夕依のもとへと飛ぶ。一瞬彼女がこちらを見た氣もするが、直後その体が沈み始めた。意識を失い、水を吸った衣服に引きずられたのだろう。このままでは、間に合わない。

……焦りを押さえ、身を屈め、他の全てを意識の外へ。流れで底の見通せない水流に、飲み込まれ行く少女を。まさに一筋の銀閃と化した双羽は、間一髪その手を掴むことに成功した。そのまま勢い

と力に任せて夕依を引き上げる。気絶した人間の片手を引くのは直しくないのだ。そうだが、今そんなこと言つてゐる場合でない。いつの間にやらすぐそばまで迫つて、いた壁に驚くが、そこは慌てず騒がず急減速。風圧で流水を盛大にまき散らしつつも、何とか壁ギリギリで止まりきることに成功。減速ついで、慣性に任せて夕依を抱き上げておいた。俗に言うところのお姫様抱つことかいうやつだが、まあ今この場にそんなことツッコむ余裕のあるヤツなんぞいない。

「カナちゃん！ 大丈夫、カナちゃん！？」

とりあえず、息はしている。少し足に痣が見えるのは気になるが、骨が折れているようには見えない。しかし意識が無い。目を開く様子も無く、グッタリとしていて……

「カナちゃん、カナちゃん……ん？」

ふと、靴をまたぐ足に冷たい感触を覚える。帯空位置は、相変わらず天井ギリギリ。つまり、水位がかなり上がつてゐるのだ。このままここにいては危ない。

「……ふう。とりあえず、ここ出なくちゃね」

珍しい双羽の焦りを、足に触れる冷たい水が洗い流してゆく。まづ、今やるべきこと。水に埋まりつつある船底部からの脱出、及び旅の連れとの合流だ。夕依を叩き起こすのは、それからでも遅くなればな。

「一番近いのは……確か、こっち！」

今の位置から最も近いであろう階段へ、双羽は飛行を開始する。夕依に負荷が掛からないよう、今度は安全運転を心がけて。

……数分後、大型客船の底部は、流れ込んだ湖水によつて完全に水没することとなる。

第廿弐話 漫潮流廊・ながれみずつみのみち（後書き）

双羽視点にすると、地の文が長くなるの法則。だからこゝで書くの嫌なんだ。

……でも、主人公って双羽なのよね、一応……

第廿参話 生存難航・なんとかなつたはいいけれど

ゆらりと波に揺られ、夕依は緩やかに目を覚ました。ほんやりとした視界に入つたのは、見慣れた緑の布。少し首を捻れば、3、4人がゴロ寝できそうなテントの内部っぽい空間も見て取れる。ただし、初めに書いた通り、ここは陸上でない。夕依が今まで寝ていたのもテントでなく、定員4名の屋根付きゴムボートだ。もひとつ付け加えておくならば、そのボートは現在推進力無しで大海原（塩水湖だけ）を漂っている。いや、もう少し簡潔に言おう。この船は、現在絶賛遭難中であった。

……寝起きの鈍い頭を起こしついで、彼女はここ数日の記憶を遡つてみる。今のこのゲンナリする状況と、その発端について。あの時、船の底で水流に巻かれた夕依は、そのまま意識を失い……

ゆらりと波に揺られ、夕依は薄く目を覚ました。意識こそ覚醒したもののは、頭痛が酷く、とても目を開ける気にならない。そのまま小声で唸りつつ痛みに耐えていると、正面から聞き覚えのある声が降ってきた。

「ん？ もしかして……カナちゃん起きた？」

相手を見ようと、細く目を開く。輪郭がハッキリとしないが、そのシルエットは確かに夕依のよく知る少年のものだ。

「……と、双羽……」

「あ、喋るのキツかつたら無理しなくていいよー。今は安静一番だしね」

「……」

無言のまま頷き、否定の意を示す。視界を閉じ、改めて体の力を抜いたところで自分が横になっていたことに気づいた。背にあたる

感触は、何だらう、ビール素材に近いような気がする。

それにしても、一体何があつたのか。残念ながら、氣絶する寸前までの記憶は意外にしつかり夕依の脳に焼き付いている。まさか頭打つて記憶が改竄とかいうこともまあ無いだらう。最後、夕依が水流に巻かれて沈んだというのは確かにはずだ。しかしもって、ここが水の底でも地の底でもないことは双羽の存在より自明。

……まあ、いくら考へても知らないものは知らない。ここにはその間の経緯を知つていそうな人物に問うのが正解なのだらう。目を閉じたまま、なるたけ少ない単語数で質問を双羽に伝えてみる。

「……なんで、私、ここに……」

「もー、無理して喋らなくたつていいってば。……力ナちゃんさ、自分が溺れかけてたのは覚えてる？」

「……ハツキリ、覚えてる。そのまま、沈んだことも……」

命の危機を目前にしたとき、人の意識というものは極限にまで研ぎ澄まされる。それは恐らく、記憶力という感覚機能のひとつにもしつかり作用するのだらう。種々様々な記憶よりも遙か鮮明に、夕依は水の中で意識を手放す瞬間をしつかりと覚えていた。

「んー、半分正解。実は、完全に沈んじゃう寸前で僕が間に合つたんだよ。ま、そのときのことは覚えてないみたいだけどねー」「間に、合つた……？」

「……把臥之に感謝しろよ、金峰。コイツは船に水が流れ込む中、簾でもつて水流渦巻く廊下を巡り、貴様を探し出したのだ。……いくら空を飛べるといえ、把臥之自身が言つほど軽く、そうおいそれと成し遂げることではない。その能力と精神、どちらかが無ければ今貴様はここに存在することすら出来なかつたのだぞ」

少々不足する双羽の説明を補足したのは、相変わらず長つたらしい華月の口上だつた。いつの間にか夕依の側まで來ていたらしい。言つてのこと自体はもつともだが、いかんせん後半部分が不需要である。もう少し物事は簡潔に述べて欲しい。

それにしても、あの時聞こえた声は双羽のものだつたということ

か。確かに、思い返してみればそんな気がする。それにまあ状況的に考えて、あそこから夕依が生還する経緯はそんなものだろう。

「……分かつてゐるわよ。……ありがと、双羽」

「ふふ、どういたしましてー」

目は瞑つたままだつたが、双羽の微笑む顔が瞼の裏に浮かんだ。同時に、どつと安堵感が押し寄せてくる。

一度生存を諦めていたためか、夕依の感情は、自らのぐぐり抜けた死地をごく淡泊に捉えていた。自分はあの時死に掛けたのか、そうなのか、と。単なる現象として、それらの事実を受け止めていた。……それが、何故だろう。今はただ、自分は生き延びたのだ、という実感が心を埋め尽くしている。目覚めてから初めて、夕依は自身の体温を感じた。

「さて、俺は他の場所も見てこようか。把臥とはここに居るといいん、僕も行くよー。今は飛べた方が何かと……」

「一般人の前で飛び回るつもりか？ 一瞬だけならまだしも、そんな高機動を見せてみる。この世界の大抵の人間は不審を抱くぞ」

呪文魔法にも飛行魔法は存在するのだが、えてして使い勝手が悪い。そうでなければこの世界、もっと空路が発達しているだろう。

「うーん、じゃあちょっとしか飛ばない方向で……」

「……言葉の裏を読め。貴様はここで金峰を見ていろ、と言つているのだ」

「あー……うん、りょーかい」

渋々、といった感じで了解の意を示す双羽。しばらくして足音ひとつが遠ざかり、華月がこの場を離れたことが分かる。見えないためハツキリとはしないが、今この場所にいるのは双羽と夕依の2人だけだ。

「……」

「……」

が、しかし両者喋らない。元々無口な方である夕依はともかく、いつもなら独りでも騒いでそうな双羽まで何故か無言でただそこに

居るのみ。だんだん楽になつてきたといえまだ頭痛は残つているので、この静寂も悪くはない。悪くはない、のだけれど。

「うなると、視界を閉ざしている夕依には周りの様子がさっぱり分からぬのだ。しようがないのでうつすらと目を開いてみると、見えるのはなんだかビニール質な天井のみ。そりやまあ仰向けに寝転がっているのだから当たり前ではある。

「……双羽」

「なーに？」

まだ続きそうな静寂を破るうと、双羽の名を呼んでみる。思いの外返答は早かつたものの、いかんせん次の言葉が続かない。特に何か用事があつたわけではないのだから。

「……どしたの、カナちゃん？」

「あ……えと、今、私たちの居る場所だけど……」

なんだか不審がられてしまつたため、慌てて質問を取り繕つ。よく考えてみれば、今現在の状況はさっぱり分かつていないので、この機会に聞いてしまおつ。

「あ、ここ? これねー、あの客船についてた緊急救命ボートなんだつてさ」

「救命ボート……」

「船の底に穴開いてや、機関室が浸水しちゃつたとか何とかで船が動かなくなつたんだ。それでね……」

朝美と船員たちとの交戦により発生した水の流入は、結局船底より3つ目の階層を床下浸水させたあたりで鎮静したそうだ。おかげでこの船の動力を発生させる装置が水にやられ、動作停止状態に。一応乾燥させれば復旧も可能とのことだが、装置自体が水面下の部屋に固定されているため現実的でない。

結果、乗っていた人は乗員含め船を放棄することとなつた。この船の救命ボートには、緊急戻港機能とかいう機構が備え付けられているらしい。なんでも、漂つていれば自然と直前寄港した港へ近づくという便利機能なんだとか。船が動かない今、とりあえずそれを

用いてユヒナ港まで戻ることと相成ったのだ。単独で漂うのは流石に危険だが、これだけの集団ならまあ無事に戻れるのではないか、とのことだった。

「ちょっとだけ後戻りになっちゃつたんだよねー」

一応定期連絡船代わりだつたこの船が大破したことで、しばらくユヒナ港からゲイヌシンへの湖上ルートは使えない。その復旧など待つては、ベンフィード公国へ辿り着くのはいつになるやら。ここは湖の外周を回り、他の港を経由する方向で予定を組み直すべきか。

ほとんど癡でこの先の旅程を考える。双羽の説明を聞きながら湖岸の都市を思い浮かべ、人伝に聞いた話から行き先を絞り……

……そうする内に、夕依はまた自然に眠りへと落ちていったのであつた。

……

……次に目を覚ましたときには頭痛も治まり、夕依は初めて自分の乗つていた救命ボートから外を見た。そこで見た緑一色のゴムボートの群に軽く圧倒されたのは記憶に新しい。乗客・乗員は寄り添い、一つの船団として動いていた。

降伏の意を見せたことで、とりあえずはアーサミー盗賊団も同行。港に着いた時点で町の警備隊に引き渡され、処遇が決定されるところに軽く圧倒されたのは記憶に新しい。乗客・乗員は寄り添い、一つの船団として動いていた。

降伏の意を見せたことで、とりあえずはアーサミー盗賊団も同行。港に着いた時点で町の警備隊に引き渡され、処遇が決定されるところに軽く圧倒されたのは記憶に新しい。これと決まった法律のようなものは少ないが、町毎にある程度原始的な司法施設は存在するのである。

……そつやつて、丸一日ほど航海したときだつた。予兆は無かつた、と思う。もし仮にあつたとして、一体誰があんなこと想定できただろうか。

ちょうど昼食時で、一行3人に朝美を加えた4人がひとつの中に入っていた。朝美の同行については華月、双羽共に快諾したのだが、どちらかと言えば彼女がアーサミー盗賊団の首領であるこ

とがネックであった。扱いとしてはこの件の主犯なのだ。そのままはいサヨナラというわけにはいかない。幸い死人は出なかつたこと、ユヒナが貿易港であることを考へるに、恐らくは罰金刑を言い渡されるだらう。ここは素直に罰を受け、色々と精算した上で旅立つべきだと。

……はつきりと覚えている。そういうことを話し合い、さて他の盗賊団員にもそのことを伝えてくる、と屋根付きポートの出入り口をぐぐつた朝美。その彼女が、にわかに固まつた。一生に一度見れるかどうかの珍しい光景だつた。

次いで、それ不審がつた双羽と華月が後ろから外の景色をのぞき込み、以下同文。待つても事態が動きそうになかつたので夕依も、以下同文。

視界には、遙かなる水平線。流れる水と青い空、吹き抜けるちょっと潮っぽい風。それらは今、この船が高速で動いているということを示していた。無論、「ゴムボート」と思しき緑色なんぞ足下以外にやどこにも見えない。……こうして、夕依たち4人はめでたく遭難者となつたのであつた。

因みに後ほど船を調べた華月曰く、緊急戻港装置が誤作動を起こしていただらしい。通常ならば方向の補正を行つだけの装置が、何故か全出力であらぬ方向に向かつて推進していたのだそうだ。おかげで装置は燃料切れ。方角すら分からず波に揺られて流されて、それでもつて冒頭へ戻る、と。

幸い食料は大量に積み込んでいたので、数日間なら餓死する心配は無い。すでに遭難開始より丸一日ほど経過したのだが、まだまだ余裕がある。今は見た感じどうも双羽が哨戒に出ていくよひなので、特にやることも無いだらう。

……暇潰し代わりの回想も終えてしまつたため、夕依はもう一度眠ることにした。正直眠たくないが、それでも横になる。この薄いビニール状の感触にももう慣れてしまつた。

ポートの底を通して伝わる波は、未だ緩やかな繰り返しを崩さな

い。それは待ち人の如く静かに、しかしさはつきりと蠢いている。

第廿肆話 危険湖域・さいなんのいるといへ

疲れ切つた体を引きずり、船のテントの入り口前に横たえさせる。ちらと奥を見れば、べちゃつと広がる黒い布切れ、ではなくヘバる夕依がいた。普段ならここで気力回復がてら適当な言葉を投げるところだが、流石の華月にもそんな余裕は微塵も無い。なんたってこの一日、彼らはこの湖の真の姿をたっぷりと見せつけられていたのだ。

例えば今、前方恐らく300メートルほどで遙か天高く立ち上る巨大な渦潮なんなかがそれである。分かり難ければ、巨大竜巻の風を水に置き換えたものとでも考えてもらえればいい。発生原理なんて知らない。知りたくもない。

……とにかく、こういった超自然現象に昨日から丸一日晒され続いているのが現状である。むしろどちらかと言えば、あの巨大渦潮を見て心が和む程度に今まで起きたことは常軌を逸していた。立っていることすら難しいような豪雨、いつか見た太陽表面のように3Dでねじ曲がった水流、突然真横から飛来する巨大な氷塊etc..

最後の現象など、どこからの攻撃かと辺りを警戒したものだ。が、それはまあいい。つまり、それらを乗り越えたゆえにこうしてへばつているのは至つて普通なのだと、そう言いたかつただけなのだ。

「……揃つて妙なスペックを持っている姉弟だな、全く。あれか、特殊な退魔士の血筋とかそういう中二的な何かなのか」

魔法は超常現象でありながら、決して万能なる奇跡の業ではない。エネルギー効率がとても良く、かつ多少なり物理法則を度外視できる夢の技術。しかしあって、起こした現象に見合うだけの体力をごつそりと奪われるというのも、また事実だ。

よくあるような、熱線をバスバス乱射したり氷塊の群を操つたり、

なんていうのはまさに達人の領域なのである。常人ならそんなもの

1回発動した時点で気絶昏睡確定だろう。

それを、片や丸一日に近い時間飛行を続け。片や100メートル全力疾走に匹敵する体力を消費するであろう魔法を乱発し。よくもまあそれでなお動き続けられるものだ。何つて、華月たちと似たような勢いで仕事してきたはずなのに、まだあそこで元気に飛び回っている姉弟のことだ。今も渦潮相手になにやら奮闘している。まあ放つておけば巻き込まれる可能性がある以上、そこに対策するのは何らおかしくない。……真っ向から渦潮を消し飛ばす、とかいう方法でなければ、と注釈は入るわけだが。

「む……終わったか」

先程まで渦潮のあちらこちらで断続的に発生していた蒼い閃光が、一瞬止む。直後、立ち上る渦の根本付近で巨大な閃光が炸裂し、逆巻く水をすべて天上へと跳ね上げた。大質量の落下による津波の発生を防いだのだろうが、それにしても相変わらずの破壊力である。

朝美の恐らくフルパワーと思しき魔法の威力に感心していたところで、跳ね上げられた後落下してくる湖水が視界の端に映った。この世界にも変わらない重力というものが存在する以上、いくら上へ飛ばしてもそのうちに落下してくるのは自明の理なわけで。その法則に従つた水滴群は、豪雨よろしくボートへと降り注ぐ。

「……面倒だな。……撥ね除けよ、“傘”」

また少し減つた華月の体力に呼応し、ボートの上に不可視の障壁が展開された。こんなこともあろうかと、予め各所に仕込んでおいた“傘”の文字を一斉に起動させたのだ。結果、降り注ぐ水滴はうまくボートを避けるように湖面へと着水してゆく。いまいち原理のよく分からぬ現象なのだが、便利なのでよく使つている魔法でもある。特に最近使用率が高い。

「たつだいまー」

「ふう、流石に疲れたわねえ」

一仕事終えた双羽の幕が、水を滴らせながらボートへと滑り込ん

できた。どうも帰つてくる途中で雨に降られたようだが、まあ自業自得である。

「うわあ、びっちょびっちょ

「そこで絞るな。外へ出せ外へ」

双羽が簾に乗つたまま服を絞ろうとしていたので、とりあえず引きずり下ろす。そのままボートの端へ引きずつていると、簾から朝美が降ってきた。いつもより簾の柄を長めに固定し、それでできた双羽の後ろのスペースに乗り込んでいたのだ。足場は金属の棒一本なわけだが、彼女曰くなかなかに良い乗り心地なんだとか。……まあ、乗つてみたいとは思わないが。

「お疲れ、ととりあえずは言つておこづ。しかしだ、この雨は何とかならなかつたのか？　“傘”の魔法もタダで使えるわけではないのだぞ」

「まあいいじゃない。こんな美女の濡れ姿拝めるのよ？」

「自分で言つた、自分で。あと貴様を見て眼福など思えるほど俺の脳は腐つていなくて」

「それ、女性に言つ言葉じゃないわねえ」

「なら貴様には問題無いな」

一応言つておくが、朝美は決して醜女ではない。というか、まあぶっちゃければ相当な美人である。……が、先にその内面を目の当たりにしたせいか、どうもそういうふたところを評価する気になれないのだ。一言で言つと、残念なイケメン（女性）、ってな感じである。あんなこと言つちゃいるが、そもそも本人だって女性扱いされないことなど気にしてなさそうだ。

「……終わったの……？」

「あ、カナちゃん復活ー」

黒いボロ切れ、ではなく相変わらずへちゃばつた夕依がテントの入り口から頭を出した。魔法の使い過ぎといつものもあるだろうが、それより客船での溺死未遂が効いているように見受けられる。ずっと顔色が優れないのは、極度の疲労のみによるものではないだろう。

「つむ、とりあえずは何とかなったぞ。その影響でさつきから」の
土砂降りだがな」

「……渦潮抜けて、土砂降り……？」

夕依は渦潮に遭遇した直後から伏せついていたため、そもそもの作戦と事の顛末を知らない。そんな状況では、まあ水の竜巻と土砂降りの雨に共通点は見いだせないだろう。あの超自然現象を直接消し飛ばすなんて方策、一体誰が思いつくというのか。

「あの渦巻きね、お姉ちゃんが振き飛ばしちゃったんだよ。だからその水が降ってきてるの」

「……え？」

「やー、アレは流石にちょっとキツかつたわねえ。かなり全力に近い威力で打ち込んだんだけど」

「……吹き飛ば……す？……えつと？」

「気にするな、金峰。俺も一度は通った道だ」

「……あ、ありがと？」

朝美のオーバースペックっぷりは夕依も良く知るところだろう。しかし、真実はより奇、だつたわけだ。そこはついつき華月も経験した思考ルートである。

同意と同情の念を込めて夕依の肩を叩いたのだが、なんだかお礼を返されてしまった。どうやらかなり混乱している模様。ここは優しく放置といこう。

……まあ、当面の危機は去つたわけだ。しばらくは、次の災難に向けて英気を養うと……

「お姉ちゃんお姉ちゃん、アレ、何だと思つ？」

「んー、アタシの目にはくじびきのひん曲がつた鳥の大群に見えるけど」

「……多分それ、キヒキソナウ、だと思つ……」

キヒキソナウ。確かに、穴を開ける鳥、とかいう意味だったと記憶している。ドリル状に発達した嘴でもって、遭遇したあらゆる無機物に穴を開けていくとかいう、まこと傍迷惑な飛行生物だ。もし航

海中の船舶なんかが遭遇してしまえば、その被害は甚大だろ。しかし大きな群の移動経路は地域ごとにほぼ固定されており、大抵はそこを避けるように航路が設定されているのだとか。

以上、華月の脳内にインプットされていた“キヒキソナウ”についての情報である。

「…………問題は、アレだ。会つてしまつた場合の解決策が見あたらぬことか……」

「んー、全部打ち落とせばいいんじゃない？」

……その単純過ぎる思考回路が羨ましい。しかし、それしか方法が無いのも確かだ。何かこうキヒキソナウ除けになるような物とかあるのかもしれないが、夕依の絶望に沈んだ表情を見るに望み薄だろ。ここで最大にして唯一の問題点は、あの群の数がどう覇覇目に見ても云千云万の単位な事くらい。大したこと無い。

「…………まあ、どのみちアレに対抗するには把臥之の箒が必須なわけだが」

「休憩無しだねー、頑張らないと」

「んじゃ、も一回行つてきますか」

華月は直接戦闘に向いておらず、夕依は“ごらんの通りダウソ状態だ。支援はできても真っ向からやり合える状態ではない。悪いが、ここは先程と同じペアで出でもらうとしよう。残りは頑張つてボートの守備だ。

「さて、と。…………面倒だが、もう一頑張り、だな」

朝美を乗せて飛び立つた双羽と箒を見送り、本日何度目か分からぬ溜息を吐く華月であった。

…………

「…………で、だ。」

「…………どうしてこうなった……」

唐突に華月の呟いた言葉に対し、無言ながらその場の全員が同意

の意を送る。そりやまあ、あんなことになれば誰だってそう言いたくなるだろう。

因みに現在地は水面から数メートル上空、総員もつて飛行中である。リムジンの如く伸ばしきった簾に4人全員が乗っている状態。流石にバランスが悪いらしく、さつきからふらふら低速飛行だ

「ほーるいんわん、って感じだったねー」

「……双羽、それ違う。どこにも入ってない……」

「じゃ、バッティングセンターのホームランが近いかしらねえ」

……何のこっちゃ、というツッコミはひとまず脇へ置いておいて。まずは起こった出来事がありのままに説明しよう。

途中まで、キヒキソナウ迎撃作戦はうまく機能していた。双羽と朝美はものすごい速度で群を撃ち落とし、華月と夕依もボートへ向かってくる散発的な集団に対し余裕を持つて対処できていた。こう言うと途中で何かしら破綻が生じたのかとも取れそうだが、実はそうでもない。もう少し厳密に言えば、それは破綻とかそんな生易しいものではなかった。突然なる終局、とかが一番しつくりくる。

あるキヒキソナウを、朝美が撃墜した。衝撃を受けて吹き飛ぶキヒキソナウは、そのままひとつ的小集団に突つ込む。そこまではまあ、問題無い。効率良く数を減らすための作戦だ。

……問題は、ちょうどビリヤードよろしく弾き飛ばされた群の中の一羽が、真っ直ぐボートの方向へすつ飛んでいったことか。タイミング良くか悪くか、華月と夕依の防衛組もそこそこ大きな群に対処していた。僅かな隙、というか何というか。一閃の矢のように飛来したキヒキソナウは、薄い素材で構成されたボートにしつかりと大穴を開けることと相成ったのであつた。

「……バッティングセンター、ね……」

「でしょ？ やつぱその表現が一番合ってると思うのよ」

「うーん、弾き飛ばして的に当てる、って意味なら結構ぴったりだけど」

口を開く気力も無い華月は放つておいて、3人はしょうもない話

題で盛り上がる。

食料とかその他諸々がほぼ水中へ沈んでしまった、今のこの状況。もし長期間続ければ、彼らの旅はここで終わりを迎えるだろう。それが分かつていてるからこそ、こうした賑やかな雰囲気なのだ。

……そうやって、全体に口数が減っていき。全員が沈黙したままただ進む幕の上で、ふと進行方向から逸らした視線の先に、それは映つた。

「……あ！」

「どうしたの、カナちゃん……わ、やつたじやんか！」

「何とかなったかしらねえ！」

「……なっていることを、祈ろうではないか」

船の沈没から、体感にして数時間の後。夕依の指さした方向に、一行は久方ぶりの大地を見たのであった。

第廿肆話 危険湖域・やいなんのこゑじゆく（後書き）

新章突入、つてな感じになるんでせつか。確かに今までとは少し
変わりますけど。

まだ章管理機能使つ氣は無いんですねー

むしろ前半がオマケ。

第廿伍話 某或時処・とあるときの出来事

見渡す限りの、地平線。所々に木がぽつぽつ生えている以外、ま
ず緑色成分からしてほぼ見当たらない。後ろを振り向いたって、そ
こには見飽きた水平線なわけであつて。今のところ、夕依たち一行
の周囲に能動的な動作を行う物体は一切存在しなかつた。

強いて言うなら、先から夕依の前でずっと会話をどきを続けてい
る華月とか朝美とかが、この状況の数少ない例外ということになる。
「しかし何も無い場所だな。無人の孤島とかだと、まだ俺たちの行
き先はあまり変わつていないという事になるぞ」

「一旦地に足着いただけマシでしょ。それに、まあ、これだけ広け
りや人間の1匹や2匹生息してるつて、ねえ」

「人をネズミあたりと同じ感覚でカウントするな。それに貴様、こ
こが割と人口密度低めな異世界だということを忘れてはいるだろう」「
だいたいこんなところで、荒れた場所だからこそ住んでる奇特者
とか居るもんじゃないの？」

「一体何の設定だ。そもそもだな、普通そういう奴もだいたい町の
近くにいるのではないのか。人間単体で生活するのはなかなか難し
いからな」

「それがわざわざ入つ氣の無い場所に住むなんてねえ。何という生
命力、まるでG」「G言うな。というか、どういう流れでそうなつた。何故そこでG
が出てくる」

暇が高じたのか、延々無意味な言葉の応酬を続けるふたり。今回
の遭難を経て判明したことのひとつなのが、こうなつてしまふと
夕依はもう間に入れない。雰囲気がどうとかでなく、ただ交わされ
る言葉の速度に追随できないのだ。話のテンポが違い過ぎる。

おかげさまでやることの無くなつてしまふ夕依だったが、幸いそ
の状態はそう長く続かなかつた。遙か上空より、先行偵察に出てい

た双羽が帰還したのである。

「たつだいまー！」

「あら、双羽。お疲れさん」

……見知らぬ大地へと降り立つた一行は、少しの休憩を挟んですぐ、これからの方針について相談した。右も左も分からぬ土地なのだ、向かう先も知らぬまま動くのは危険である。よつて、まずは周囲の情報を得る事を優先。ひとまず双羽が上空へ昇り、そこから周辺の町などの有無を確認する運びとなつたのであった。

「じ苦労だったな、把臥之。町か村、もしくは集落のようなものは見つかつたか？」

「何かこう、実はめちゃくちゃ強いお爺さんとか住んでそうな一軒家なんてのもアリよ」

「うーん。残念だけど、直接人の住んでそうなところは見つかんなかったね。一軒家とかそーいうの含めて。ずっと見渡す限りの荒野だよ」

「やー、まじめに返されるとお姉さん悲しいわ」

朝美の独り芝居は置いておいて、それは残念な情報である。森でもあつたのならば、上空から見えない人の住処とか存在していそうなものだが。見える範囲がずっと荒野ではそちらも望み薄だ。

ただ……

「……直接、つてことは……双羽、間接的には何か見つけたの……？」

「そゆこと。実は、あっちの方に道みたいな筋があつたんだ。両端はそれぞれ地平線の向こうだつたから見えなかつたんだけどね。そこだけ明らかに地面の感じが違つたし、人が造つた物なのは間違いないと思うよ」

道さえあれば、物流、もしくはそれを必要とする人間集団が付近に存在する確率が高い。道でなくとも人工物さえあれば、それはこの場所が完全なる無人ではなかつたという事を示す。

これで一先ず、今後の大まかな方針が決定した。

「それが何であるにせよ、今のところ唯一の道標というわけだ。」
「とりあえずはそこを目的地に動こうと思うが、いいか？」

「さんせーい」

「別に対案があるわけじゃないしねえ。それで構わないわよ
「……私も、それでいいけど」

「そりやまあ、現状反対意見など出るわけもない。

「把臥之、その道らしきものの正確な方向は覚えているな？」

「んー。まあ、どっち、つて聞かれたらあつちなんだけね。分か
んなくなつたら、また上から確認するよ」

「それで問題無い。……さて、と。見知らぬ土地、どころか世界単
位で知らん場所なわけだが。どちらにせよ歩かねば始まらんからな、
行くぞ」

「出発進行ーー！」

双羽の号令に合わせ……たわけではないが、一行は荒野を歩き始
める。華月の言つ通り、見知らぬ尽くしなこの大地。そこを往く旅
路には、一体何があるのだろう。

先の空に見えるのが希望の星か、それとも暗雲か。今居るこの場
所からは、未だ判別すること叶わない。

……

少し時を遡り、どこかの山奥にあるボロくさい廃屋にて。人なん
ぞ年単位で寄りつかないであろうこの場所に、一人の旅装を纏つた
男がいた。所作や身のこなし、そして何よりその巧妙に隠蔽された
気配。これらを考慮すれば、この人物が単なる旅人でないことが伺
えるだろう。山を包み込む夜の気配に紛れ、今の彼を意識に捉える
のは至難の業だ。

「ほう。4人ほど、その後の足取りが追えなくなつた、ということ
じゃな？」

「身を隠したというよりは、單なる事故と推測されますが

実際、彼はある王国の秘密任務部隊に属す人間である。普段はあちらこちらを旅して周り、適宜所在地近辺での任務に参加するのだ。

……今回の任務は、“この廃屋にて、とある国の重鎮数人が会談を行う”という情報に端を発するもの。内容は単純明快、そこで交わされるであろう情報の入手、だ。何故、とか、そもそもある国つてどこの国だよ、とか、そのあたり聞いてはダメというのはお約束。まあ、相手の国についてはだいたい見当が付いているのだが。彼の知る限り、本国が秘密裏に内部情報を得ようとする相手なんぞ、そう數は無い。

「状況から考察すると、あの水域へと入り込んだ可能性が98%を越えています。生存に関しては期待できません」

「やー、カウチ、あいつらのしぶとを舐めちゃダメよ。そう簡単にはくたばんないって」

「お主も同類じゃろうが。他人事みたいに言いおつて」

しかし、指定された会談場所へと集結したメンツには流石に驚かされた。まず、老人が一人。まあこれは良い。次に、年の頃10歳ほどの女の子。この時点で何かオカシイが、これに関しても、まあ、まだ、なんとか納得は、できる。

……で、最後に獸が1匹。茶色く長い毛並みにだらんとたれた尻尾、そして突き出た鼻面。立ち上がりければ大人1人程度の背丈になりそうだが、全体通して可愛さを醸し出すフォルムのせいか恐ろしさは感じない。そんな獸が、何か妙に丁寧な口調で会話に参加しているのだ。初めは見間違いかと思ったが、その口の開閉と丁寧な台詞のタイミング、リズムは完全に一致していた。事ここに及んで、彼もその事實を認めざるを得なかつたわけだ。

「しかしまあ、お主の言つことも一理ある。殺しても死なんような連中じや、生存を想定しておくに越したことはないじやろう」

「了解しました。引き続き搜索、及び発見後の監視を続行します」

廃屋の壁の隙間から覗き込むような視界に、領きで肯定の意を示す獸が映る。実際は少し離れた木の上から監視しているのだが、遠

見の魔法を使つていいの故、このようだ見えたのだ。同時に使用中の遠聴魔法のおかげで、音声も雑音無くクリアに拾えている。双方彼の所属部隊では必須の魔法だ。

「あつそだカウッち、アレツてどうなつたの?」

「……アレ、とは?」

「主語が抜けている。お主の悪い癖じやぞ」

「『めんごめん』アレだよアレ、『シワクカカシコ』計画。ボク、アレの顛末全然聞いて無いんだけど」

「シワクカカシコ」と。魔法の呪文に使われる言語に似た響きだ。意味はよく分からないが、何かしらこぢらにとつて重要な意味を持つのではないか。彼の勘が告げるその予想に従い、じつと耳を澄ませる。

「それは、ここですべき話ではなかろう?」

「え、そなの? あつちゃん、これはやつちやつたね」

「……は? 一応、この場所に相応しい機密レベルの話題かと……」

「違うよカウッち、『聞かせちゃダメ』なお話、つてこと。……気づいて無かった?」

今の単語は、聞かせてはいけないものだ、と。ならば、今までの話題は聞かせても良い話題、といふことになる。だとすれば……

「……済みません、今初めて確認しました。こいつらの不手際です、始末してきましょうか?」

「いやいや、直接トチつちやつたのはボクだし、自分で何とかしてくれるよ。爺ちゃんとかカウッちじや、時間掛かるでしょ?」

「年寄りに働かせんあたりは感心じやの。行つてくるがいい
「はーい」

……今まで会談内容は、“聞かせられていた”。つまり、聞かせる相手が、居た。冒頭に述べた通り、まず一般人の近寄らないであろう場所に、この廃屋はある。そうなれば、その“相手”とは詰まるところ……

「……つてことで、キミには消えてもらつことになりましたー。」「

メンね、ボクさえ間違えなきゃこんな予定じゃなかつたんだけど

……詰まるところ、自分、である。

彼の背後には、ついさっきまで遠見の視界の先で歓談していたはずの少女が立っていた。そのときには気づかなかつた、しかし今背中にひしひしと感じる常人離れした気配。なるほど、これならば“あの国”の幹部を任されていることにも納得がいく。

旅装の男だつて、何も無策で監視していたわけではない。こんなこともあるうかと、彼の周囲には大量のトラップが仕掛けられている。こんな時のために、今まで磨き上げてきた対人格闘術もある。

「ほんと、ゴメンねー」

しかし、それらが使われることは一切無かつた。彼の本能は察したのである。これは、逃げの一手すら通用しない相手。動くことだつて、もちろん許されない。そんな厳然とした格の差が、そこには存在するのだ、と。

「んじや、さよなら」

闇に生きる者の最後の矜持か。およそ悲鳴に相当するであろう音声を一切残さず、僅かの断末魔さえ体の奥底に沈め。ただ静かに、一人の男がこの世界から消え去つた。

第廿陸話 黒無終道・くろむくのうぢ

双羽の報告した“道のようなもの”。それが地上から視認できるようになつたのは、ちょうど丸一日歩き通した後であつた。それから一度沈んだふたつ太陽も、再び天上に昇り盛大に大地を照らしている。昨日の晩は冷え込んだのだが、今はそこそこ暑い。季節の変わり目なのか、もしくは地球で言うところの砂漠みたいな気候なんか。どちらにせよ、あまり長い間野宿生活を続けるわけにもいかなれやうだ。

「えーと……に、て、い、ふ、き……って読むんだよね、これ」「アタシにもそう読めるわねえ」

地上から目的地を確認した、その翌日。つまりこの陸地に漂着して2日間が経過した頃。一行はその道らしき筋に到達した。

見渡す限りの荒野に、遙か地平線まで延びる黒い一筋。幅は広めの車道ほどもある。この辺り一帯は全体的にモロモロとした土質なのだが、この黒い部分だけ固めた粘土のようなものが敷き詰められていた。

そして、ぽつねんと突つ立つたひとつ看板。到達した場所からそれなりに離れていたのだが、キヨロキヨロと周囲を見渡していた双羽が発見した。さすが、徒步2日先の構造物を目視で捕捉しただけはある。

「ニテイフキ、か。聞いても意味が思い浮かばないあたり、こいつは固有名詞なのだろうな」

その看板まで歩き、全員が書かれている内容を読み上げたところで初めの台詞に戻るわけだ。

「これ、看板だから……町の名前じゃない？」

「んじや、こっちに歩いていけばニテイフキって町があるって事だよね」

「これが本当に道なら、ねえ」

「……実は雨が降った跡でした、とでもいうのか？無論確實とうわけではないが、十中八九人工の通路だらうな、これは」
華月の言つ通り、まあこの黒い筋は道だらう。そこはいい、むしろ歓迎すべき事だ。

「問題は、その行き先がどつち見ても延々地平線まで続いている」とぐらうか。元居た世界の先進国なんならともかく、車も電車も無いこの世界でこの長さ。さらにここ数分、誰も通っていないし通る気配も無い。本当に、今現在機能している道なのだろうか。

「まあ幸い、目的地と思しきものができたわけだ。とりあえずはこの道に沿つて移動するとしようか」

「うん、やっぱそれ一択だよね。無理矢理真っ直ぐ行つたつてしまいがないし」

進路変更、果ての見えない黒筋に沿つて荒野を進み始める一行。常に行き先が示されている分、ここ数日の旅路よりかは数段気楽である。

「ホントにちゃんとした町とかあればいいよねー。もう保存食飽きちゃつたよ」

「そーそ。いい加減、荒野も見飽きたし。いつも同じ景色じゃねえ」

「私は……そろそろ、体洗いたい……」

ここ最近、漂流含めて野宿が続き氣味だ。多少なら氣にもしないが、ここまで連續するとなれば話は別。何だかしちゃいけない臭いとかする氣がするのは、いくら旅人といえ正直女性としてどうかと思う。

「まあ、周りはんなこと気にしそうにない連中ばっかりなわけだが。把臥之姉弟は言わざもがな、華月にしたつてあの白衣一張羅を見れば一目瞭然。んな事に氣を使う必要が見当たらない。むしろ、そのせいで余計身嗜み関連の感覚がルーズになつてきている今日この頃な気もしたり。

「やう言えば、こっち来てから風呂に入つた覚え無いわねえ。そゆーのって、この世界にあるのかしら？」

「まあ、似たようなものは存在するな。そこまで習慣として定着しているわけではないようだが」

風呂といつても立派な浴槽なんぞあるわけではなく、ちゃちな五右衛門風呂に近い。人ひとりがギリギリ入れるような木製の樽に、湯を張つただけのものがほとんど。無論沸かすという考え方も無く、冷めれば全部捨てるのみ。宿によつても設備が有つたり無かつたりだ。

では、通常ならばそのあたりどうしているのか。まあ、野宿なら川とかで沐浴になるだろう。これが宿になると、なんとシャワーが使えたりする。一般的には、火の魔法道具で湯を沸かし、風の魔法道具で気圧を操作して吸い上げるという仕組みだ。魔法つて便利である。

「ふーん。あるんなら、一回ぐらい入つてみたいわねえ」

「……そうだな、久しづぶりに風呂に入るのも良いか。ならば、そういう宿を探さんとな」

「宿付きのお風呂に行かなくても、銭湯みたいなものもあるんだよ。知つてた?」

魔法道具とは、いわばこの世界の“機械”に相当する。とはいっても、流石に一般家庭でそうほいほいと備えられているものでもない。それは先述のシャワーにしろ同じ事。

……よつて大抵の町には、そんな一般住民向けに大衆浴場が設置されているのだ。浴場といつてもシャワーのみのところがほとんどだが、まあ特に問題など無いだろう。

「銭湯、だと。それは初耳だ……が、ところで把臥之、何故貴様はそんなこと知つている?」

「キヅキにあつたもん。カナちゃんに連れてつてもらつたんだよー」「む、あの町にそんなものが……近い割にあまり行かなかつたからな。二ティifikki、という町にそれがあればいいのだが」

「……大丈夫だと思つわよ。普通、町や村には一軒ぐらいあるから

……

「ふふ、それは今から町に着くのが楽しみねえ」

何故かそのまま、しばらく風呂の話題で盛り上がる一行。まあこれも珍しいことではない。年齢、性別ともにバラバラな集団故、共通の話題というものが少ないのだ。趣味からして料理、読書、ものづくり、スポーツと統一性が無い。因みに誰のがどれかは推して知るべし、である。

「そーいえば、さつき双羽がキヅキって言つてたけど、それむごいかの町？」

「うん、カナちゃんと会つたとこのすぐ近くなんだ」

「へえ。つまりアレねえ、夕依ちゃんと双羽の馴れ初めの地、つてどこかしら？」

「……朝美さん、言葉の使い方間違つてる」

「ちなみに俺が住んでいた場所のすぐ近所でもあるぞ」

「アンタにや聞いてないわよ」

「だろうな」

……南の草原で双羽と出会つて、今でほぼちょうど1ヶ月。それが早1ヶ月なのか、まだ1ヶ月なのか。大きな出来事だけ並べればテンポの緩い日々だつた氣もするが、実際は何でもない旅の途中にも色々あつた。

夕依の独り旅ではあまりそうでもなかつたのだが、どうもこの第少年と出会つてからアクシデントの勃発率が高いような気がする。盗賊とか何かよく分からぬ生き物とかから逃げ回つたのだけ、一度や2度ではない。もしかすると10や20でも足りないかもしない。

「……双羽つて、割と疫病神よね」

「えつ……と、カナちゃん、急に何かな？」

「……何故にそういう台詞が出るに到つたが、いまいち分からんのだが」

「ま、言いたいことには割と同意するけどねえ」

「ちよ、お姉ちゃん！ なんでそこ肯定しちゃつてるの！？」

「因みに俺もそこだけに關しては賛成だ」

「わあい、まさかの孤立無援……つて何せこの流れ」

「……知らないわよ」

「あれ、多分カナちゃんが発端だつたと思つただけど……」

よく分からぬ話をする内に、周囲には所々緑色の草塊が増えてきた。土の質が変わつたように見えないのだが、何だろう、ちよつとした地下水脈もあるのだろうか。どのみちこの荒原風景に変化が訪れるのならば、喜ばしいことではある。

「ちょっと景色変わつてきたわねえ。ちよつと草原っぽくなつてきたんじゃない？」

「……まあ、まだ見えるのは似たような背の低い草ばかりだがな」「中に何か隠れてたりしないかな？」

言つり否や、どこから取り出したのか手頃な石を、近くにあつた草むらに放り込む双羽。また余計なことを、と思つたがまあ無害そうなので何も言わない。

「うーん、じゃあ次こっち！」

どうも反応無しという結果は不本意だつたらしく、その標的は別の草むらへと変更される。これだけ生命の気配の無い場所で、その行為にいかほどの意味があるのかとか思わない」とはないけど止めもしない。双羽の余計な行動からしていつものことだ。

「ほいっ！」

「またよく分からん」とを。そんなことしてもだな、ビリせ草むらがバクつとは？」「

「あ……うーん、ちょっと予想外」

……どーにも不穏な空氣を感じ、華月と双羽、その視線の先を辿る。あつたのは、緑の草むら、つぽい体毛を全身に生やした細長い、なんというか、まあミニズみみたいな生き物だつた。体の太さは人ひとり分、後半地面の中なため長さは不明。顔と思しき部分には大きな口と歯が覗き、田とかそういうものは見当たらないけど動いてるし多分生き物だわつ。あと、気づけば周囲のあちこちの地面か

ら同じのが顔を出していった。双羽の投げた石に反応したのだらうか。

「アレねえ、毛虫が近いかしら」

「ゴカイ、つてたしかあんなのじゃなかつたっけ」

「……その議論はどうでも良いから……逃げない？」

「奇遇だな、金峰。俺も同意見だ」

ちょうど久々の「馳走を喜ぶ感じで、草ミミズ（タ依命名）たちはうなり声を発した。発音器官を持つ」とを考えると、見た目に反して脊椎動物の一種なのかもしね。こちらの世界にその分類があるかどうかは知らないが。

「……幸いこの道の先を塞いでいるやつはいなによつだな。そのまま走るぞ」

威嚇か何だか知らないが、上半身をゆらゆら揺する草ミミズたちの間を走り抜ける。時折こちらに反応してくる個体には、華月もしくは朝美から強烈な一撃をお見舞。そつやつて、黒い筋をなぞるようく移動していくのだ。たまに地面の下から奇襲を仕掛けてくるヤツもいたのだが、どうも黒い筋部分は貫けないらしく、大概不発に終わっていた。

「それにしても、多いわねえ」

「あの辺り……草が無くなつてゐる。多分、出でこないんじやない？」

…？

「それは嬉しいニュースだね、つと！」

だんだん出現も疎らになるミミズを蹴散らし、一行は黒い土の広がる部分へと到着。だいたい一定幅を保つこの筋だが、たまにこうやって広くなつていてる箇所も存在するのだ。今回の場合、とりあえずの休憩場所としては使えそうである。

「絶対安心、つてわけじゃないけどね」

「しかしまあ、この距離があると襲つてくる様子も無さそうだ。交代で見張りを立て、少し休もうではないか」

「……賛成」

黒い土の真ん中に屋根だけのテントを立て、しばらくの休息をと

る一行。因みに初めの見張りは双羽だった。ジャンケンによる公正な審査の結果とは、本人の語るところである。

……こうした休憩を挟みつつ、夕依たちは広野を進んでゆく。夜も同様に見張りを立て、交代で周囲を警戒した。幸い草ミニズは感覚が鈍いらしく、ある程度近づかなければ反応してこない。それでもその密集度合い故、小戦闘は頻繁に発生する。おかげさまで、延々続く偽草原地帯を突破する頃には道の発見から早5日が経過していた。

一度そこで大きく休息をとった一行が大きな建物群を遠目に発見するのは、それから更に丸一日経つた頃である。

第廿質話 大遺都巿・にていふき（前書き）

投稿忘れてたー。

第廿質話 大遺都市・にていふき

大陸と言えそうな程巨大な島、カーテナウイウキ島。その南部に位置する都市、“ニティifik”は、漁業と観光の街だ。

広さは凡そ半クヌフヌ四方。この辺り一帯では、北にあるメウェノンに次ぐ人口の大都市である。面積ならば、島にある町村中最大を誇るのだと。因みに、クフヌフ、というのは大人が丸一日歩き通した場合に移動できる距離らしい。まあ睡眠、食事に一日の半分使つたとして、概算で48キロメートル。その半分で24キロメートル四方なわけだが、確かに大きい。

因みにこの都市、漁業という割には内陸部に位置する。もちろん、そんなところで魚が取れるわけもなく。結果、数日をかけて大人数で海まで出るという独特な手法の漁が行われているのだ。この妙な町の位置の由来については諸説あつて、曰くその昔この地に降り立つた神を祀るためだと。地下に眠る強力な魔法道具を封印するためだつたとか。まあどれも推測の域を出ない、というか半分都市伝説みたいなものらしい。

また漁業の他に観光を地域産業としているこの都市は、街並み自体がひとつ歴史的建造物である。何でも、この島で1、2を争うほど歴史が古い街なのだと。これという目玉スポット無しに観光産業が成り立つのは、街全体が大きな遺跡のようなものだからだ。もちろん新しい建物も多く立ち並んではいるが、街の北西部などは綺麗な赤土の歴史建築がそのままの姿で保存されている。特にキャーウェテナウーナ通りにはそんな建物を利用した大型商店が軒を連ねており……云々。

「以上、街の観光パンフレットでした」

「……どこでそんなもの見つけてきたのよ」

「宿の入り口すぐの棚の下から2段目の中に出しひいてあつたけど?」「

「読ませる氣無いわねえ」

「むしろ、とも当たり前のようだそれを持つてくる貴様に驚かない俺が嫌だ」

とある宿の一室。風水亭といつ、施設は悪くないのに立地がヒドいせいで流行つてない、残念な宿屋でのやりとりである。

……数日には渡る、縁ミニーズからの逃亡戦。単体毎では大したことのない相手でも、幾度重なれば疲労が溜まるもの。一行が街としき建物群を発見したのは、そうやってわりかし心身共に疲れが無視できなくなってきたとある朝方だった。そのあたりから石盤が堅くでもなったのか、ほぼ同時して縁ミニーズの追撃も緩まる。ようやく気を休めることができた4人はそこで一休みし、建物群へと向かったのであった。

ちなみに、そうやって街に着いたとき真っ先に行き当たったのがこの宿屋である。街の南東側に到着した一行なのだが、どうもこちらは比較的は寂れているらしく、人が少ない。ぱっと見一軒しか無かつた宿へと入ったとき、久々の客がどーのとか喜ばれたのは聞かなかつたことにした。その割に宿のクオリティ自体は高かつたのでまあ良しとする。なんと、きちんと風呂設備も付いていたのだ。

「……で、これからどうするの? 特に行くアテも無いけど」

「うーん、僕街の中歩いてみたいな。観光の街つていづくらいだし」「アタシもそうねえ、ちょっと外出てくるわ

「……いや、正直俺は体力が限界だ。寝る」

「……この先どこへ向かうか、だつたんだけど……まあ、良いわよね」

「よし解散だ。とりあえず俺は寝るのでな、貴様ら全員出て行け」
時は経ち、今は昼頃。各自一人一部屋づつ取つた上で、華月の部屋へ集合して話していたのだ。別に何か理由があるわけではなく、单

に双羽と朝美が押し掛けただけである。強制連行されてきた夕依はどちらかと言えば被害者側のよつた気もするが、まあいい。

華月に部屋から放り出され、位置的に反対側にある部屋へと戻る朝美と別れ。双羽と並び、自分の部屋へと廊下を歩く。

「そだ、力ナちゃんはどうするの？」

「私は……えと、どうしよう？」

聞かれ、特に何も考えていなかつたことに気づく。疲れてはいるが、正直この時間帯から寝るのはどうかと思うし、かといってどこか行きたいところがあるわけでもない。そもそも、知らない街を独りでウロウロするのは割と危険なのだ。まあ朝美とかなら問題無さそうだが。

「じゃあさじやあさ、力ナちゃん一緒に来ない？」

「……どにに？ 私、歴史建造物とかそういうのに興味無いけど」

「ふふふ、だいじょーぶ、絶対力ナちゃんの気に入る場所があるからさ」

「……まあ、良いわよ」

特にやることも無かつたのだ。部屋で独り暇するぐらいなら、誰かにくつついて外行く方を選ぶ。

「それじゃね、宿屋の前で集合だよー」

「ん、分かった」

ちょうど部屋へ着いたので、そこで双羽と別れる。さて、持つて行く物の選別だ。

常備している緊急護身用セットはまあ持つて行くとして、あとはお金と、念のため携帯食料を少し、それからもし別行動になつた時用の……

「……こんなもの、ね」

十分近い時間をかけ、荷造り完了。終過ぎることなく、また不測の事態とかにも備えられる。完璧だ。

満を期して部屋を出、宿の入り口を女将さんに会釈しながら通り抜ける。その先の出入り口の扉横には、暇そーな顔した双羽が突つ

立っていた。

「……待った？」

「んーにや、全然」

……結構待たせたらしく。そののとひり少し申し訳なく思いつつも、まあ相手が双羽なので良しとする。

「じゃ、行くよー」

どこかアテがあるらしく双羽について、宿の前を出発する。……ふと、デー何とか、って言葉が浮かんだのは心の底に封殺しておいた。

「……それで、どこに行くの？」

「カナちゃんの大好きなとこだよー。さつきのパンフレットに載つてたんだ」

「……？」

何のことやらさっぱり見当が付かない。どうも双羽の方では確信を持つているようだが、さてその自信は一体どこから来るもののか。

「……それで、双羽。後どれくらい歩くのよ？」

宿から出てもうしばらく歩いたのだが、周囲には相変わらず人気が少ない。というか、どうにも陰気なのだ。並ぶ建物自体は赤煉瓦で組まれ作りのしっかりした物ばかりだが、如何せんその煉瓦の赤が黒っぽくすんでいる。

「そんなに遠くはないはずなんだけど……

「……だけど？」

「僕たちに用事のある人たち……みたいだね」

言われ、そういえば先から後を付けてくる気配が存在していたことに思い当たる。気付いていたのに警戒していなかつたとは、少し浮かれ過ぎていたかもしれない。

「……浮かれるつて、何によ

「どしたの？」

「なんでもない」

ちよつとトビがちな思考を、頭を振つて呼び戻す。冷静に冷静に。

……こんな思考をする間に、すっかり取り囮まれていたらしい。

ふと見れば、建物の隙間から出でてくるわ出てくるわ、総勢十数人のガラの悪い男たち。その身なり、また周囲の雰囲気から察するに……

「……じじって、多分……スラム街なのよね」

「……風水亭つてさ、思つてたよりすんごい立地だつたんだ。そりや お客様来ないよ」

一律の教育機関など存在しないこの世界において、一定以上の人を囮む街には大抵こんな場所がある。治安が滅茶苦茶悪いのだつて大体どこも同じだ。まあ人殺しが日常茶飯事、なんてそこはそう無いらしいが、盗みやら恐喝やらで生計を立てる人間が居ることは知つている。

彼らがターゲットにするのは、弱者。まずひとつに人数が少ないと、ふたつに女子供、だ。要するに今の自分たちである。

「おいよう、ボウズに嬢ちゃん。子供だけでこんなとこ来ちゃダメだ、つてお母ちゃんに教わらなかつたか？」

「言ひこと聞かんヤツにはお仕置きだな。とりあえず、身ぐるみ全部で許してやるよ」

何だと勝手なこと言つてゐる「ロロシキたちだが、正直大して怖くない。もつと厳つい集団と対峙したことだつてある。あのアリアなんか、たつた独りでここ「ロロシキ全部呑ませたより遙かに威圧感があつた。

よつて今現在の問題は、この場の収め方、その手法である。全員伸して、なんてのは最終手段だし、かといつて話し合いなんぞする余地もちよつと無いだろ?。さてさて、どうするか。

「うーん……どしょつか、カナちゃん

「……双羽の好きなようにして」

逃げる、という手もあるのだが、それにはどのみち双羽の力が不可欠だ。夕依が単独で思い至り、かつ実行可能な案は上のふたつのみである。ならば、ここは任せよう。どうせ双羽の方が、良い策を

思についてそうな気もすることだし。

「ん、任されました、つと。……それじゃ力ナちゃん、まず、……」

「おこ、ガキのくせに良きそな服着てんじやねえか。ちよっと見せてみるよ」

「……！」

ふと後ろから、無造作にフードを掴む手。思わずその手を振り払い、相手を突き飛ばす。油断していたのか、割と大柄な「ロシキの一人は無様に地面を転がつた。

「ぬおつ！」

「おこ、やつやがつたぜ」

「こいつ……こいつちが下手に出てりや調子乗りやがつて……！」

「言つこと聞かない子にはお仕置きだな。体で覚えてもらおうか」
やつてしまつた、と思つたときにはもう遅い。俄かにいきり立つ

「ロシキ集団。

「……ごめん」

「ま、今のはしょうがなかつたかな。じゃ、予定変更。强行突破して逃げるよー」

言葉と同時に、右手の先に銀幕を出現させる双羽。知らぬ者にはそう見えるが、実際には極小サイズで持ち運ぶ幕を元の大きさに戻してだけらし。

「……！　このガキ、転移魔法が使えるのかー？」

「おこおこ、そりや戦闘級魔法だろ？　こいつ、ただのガキじやねえぞ」

「くそ、じんなの聞いてねえ！」

……にしても、エラい驚かれようだが。一応、ある程度までのレベルの魔法は日用雑貨みたいなモノのはず。“何も無い空間から物を取り出す魔法”は、そこまで高等な魔法だつただろつか。「ロシキの口調からして、双羽の年齢で使用したこと”が驚きの対象なのかもしれない。

「んー。まあ皆さん隠だらけだし、今のうちに逃げちゃおつか

「……そうね」

高度を下げる双羽の簫に乗せてもらい、狼狽える「ロロツキたちの頭上を一気に飛び越える。それを見て更に啞然とする者が数人いたが、どのみち気にすることでもない。

「撒いたら下りるよー。あんまり使い過ぎるのは良くないんでしょ？」

「そうね……分かる人には、来訪者の魔法だって分かるから」「じゃ、そここの角曲がったら下りよっかな」

人気の無い一角に降り立ち、双羽は簫を仕舞う。双羽の簫に乗せてもらうのは2回目なのだが、少し慣れてきたかもしない。一見不安定だが、意外と乗り心地は良いのだ。

「見つかんないうに、急いで行くよー」

足音を忍ばせ、建物間を縫つてゆく。どうも「ゴロツキたちに、組織だつた追跡とかいう選択肢は無かつたようだ。途中一切人と遭遇すること無く、2人はスラム街と思しき街を抜けていった。

それにしても双羽、よく地図も無く「こんな曲がりくねった道を迷わず行くものである。

「よーし……ここまで来れば、問題無いでしょ」

「……メインストリート、ね」

つい先までは打つて変わり、人通り激しい幅広の道に突き当たる。どうやら、無事スラム街を抜けたようだ。

張つていた気を少し緩め、通常速度で再び歩き始める。実はわりかし久方ぶりな、周囲の人の喧噪。活氣といつ名の騒がしさに包まれ、2人は大きな道を行くのであった。

「……ちつ。役立たずばつかだったな、全く」

……そのまま、背後からこちらを伺う視線にも一切反応する事無く。

第廿捌話 刻前大事・いじがおじゆのむかとまへ（前書き）

前話、ちょっと長めと尺があんまりだつたんで加筆修正しました。
結構変つてゐるんで、一応見といった方がいいかも。

第廿捌話 刻前大事・「じとがお」のあゝとまへ

「よお姉ちゃん。」んなとこ一人で彷徨くたあ、いい根性してるな？」

「知ってるか？ そういうのを無謀、つて言つんだよ」

「ま、悪いことは言わねえ。有り金全部置いてとつとと出て行つちまいな。これでも俺たちや優しい方なんだぜ？」

見るからに頭の悪そうな三人組が目の前でペチャクチャやつてるが、まあそんなに重要そうな案件でもないので、意識から除外する。当面の問題は……

「「」、どこかしらねえ」

現在地点がさっぱりもつて不明であること、だ。

一人宿を出た朝美は、気の向くままフランフランとその辺りを彷徨っていた。もちろん行くアテとかそんなモノあるわけ無い。よつて目的地も無く、道を考えもせず歩き回っていたのがいけなかつたのか。ふと、そろそろ小腹が空いたし戻ろうか、と考えたときには見知らぬ道。いやまあ見知らぬ街なんだから、当たり前つちや当たり前なわけだが。

「や、しつかし参つたわねえ。やつぱり双羽たちに付いていくべきだつた、つて、そりやまあお邪魔よねえ、流石に。いくらアタシだつて、弟の『テ』」

「聞いてんのかテメエ、いい加減にしねえとはつたおすぞ『コラ！？』「を妨害するほど、つて、ん？」

なんか今、思考に別の声が割つて入つた気がする。……まあ、気のせいか。

「……つて、なんでまたそこでもう一回思考に入る…？」

「「」、さてはこつちを舐めてやがんな？」

「そつかそつか、口で言つて分かんねえ、つてんなら仕方無いよなあ……？」

「なに言つてんの？ よく分からんんだけど」

「フザケんな、コラアツ！」

分からぬモノを分からぬと聞いただけなのに、何故か激高して殴りかかるくる男。それに対し、とりあえず成り行きで受け止め内に逸らし手首を取つて外側に180度。まあアレだ、小手返し片手ver.、みたいな。逆らわず吹つ飛べば楽なモノを、ほらそうやつて抵抗するから手首が極まる。

「な、いつ！？ いでいでで…！」

「てめ、何しやがる！？」

「やー、そりゃこいつちの俗詞なんだけど」

後手なんだから、こちどら立派な正当防衛だ。文句言われる筋合いは無い。

「どうか、こちどらの迷子状態を早く何とかしなければいけないのだ。こんな奴らに付き合つている暇は……」

「あ。良いこと考えた」

「何訳の分からなぎやぶつ…？」

ふと、名案が浮かんだ。素晴らしい閃きを妨害しようとした男その2の顔面に空いた右手で綺麗なストレートを打ち込みつつ、考えを詰める。よし、我ながら名案だ。

「やー、アンタたちつてさ」

「な、何だ？」

「どーせ、こじり一帯には詳しい、つて手合いでしょ？」

「……は？」

「アタシちょっと迷っちゃつててねえ」

知らない道故迷つたが、考えてみればけつど良い水先案内人がいるではないか。目の前に、3人ほど。「宿まで案内してくれると嬉しいんだけど」

「テメ……」

「あ、報酬とかそういうのは無しよ？ あんまお金持つてないし」

「……んなこと聞いてねえっ！」

結局、前2人と変わらず殴りかかってくる3人目。軌道、狙う場所まで同じとは、なかなかに息の合つた3人組ではないか。

と、まあ、そんなことは置いておいて。とりあえず、正当防衛だ。まず右手パンチを体を左に捻ることで回避。次に体を起こしざま、ちょいと顎を掠める軌道で……

……それから、しばらく。

「……すいませんでしたっ！」

「分かればいいわよ。で、案内はしてくれるのよねえ？」

「……よ、喜んで！」

めでたく道案内×3をゲットした朝美であった。

「……何故俺はここにいる」

今頃宿屋の一室で寝ていたはずなのに、と華月はボヤいた。心中で、とかそんなみみつちい事はしない。この状況の原因たる相手に聞こえるよう、しつかり口に出している。

コレで今飲んでるコーヒー似の飲料が不味けりや、問答無用で帰つているところだ。

「私が連れ出したからじゃねえの？」

「そんな正論期待してはいないというか相変わらず一人称のバグつた奴め」

「そつちこそ、変に言葉繋げる癖は消えちゃいねえな」

そこそこ落ち着いた雰囲気の、カフェっぽい店。その店内でテーブル挟んで交わすには、少々荒いやりとりだ。

しかしあ、じつなるも仕方無いといえば仕方無い。邪魔者を部屋から追い出し、さてようやくゆっくりできる、と思つたところを急に出現した土人形につまみ出されたのだ。そのまま建物群を過ぎ、大通り一本裏手の人目に付かないところでポイ、である。

ここで一般人なら、出来事に付いて行けず目が白黒、つてなどころだろ？しかし華月はこの下手人に心当たりがあった。土塊を手足の如く操るこの魔法。

「……まあ、元気そうで何よりだな、白河」

「そういう急な話題転換も変わっちゃいないぜ、華月」

「変える必要も無いんでな」

「ま、そりやそうだ」

この世界へ呼ばれた当初、行き倒れた華月を介抱、ついでによく分からん施設の管理丸投げしてどこかへ行ってしまった知り合い。土人形改め“魔土偶”的制作者にして来訪者。名を、白河 貴斗といふ。

まるでウニのようなツンツンヘアーに、ゴツい黒マント。これだけ見ても、この人物の変人度は伝わるだろ？比較的服装がファンタジーなこの世界基準でだつて、それは同じ。知り合いでさえなりや、とりあえず避けて通るべきタイプの人間だ。

さつきからカフェ店内の他の客がこちらをチラチラ窺つてくるのも、じいつの纏う雰囲気故だろ？

「……で、何だ。確かに久し振りだしな、貴様がこんなところにいるのには驚いた」

「最後のはそつくりそのまま返すぜ」

「まあ貴様が驚こうと何だろうと知つたことではないが、ひとつ聞くぞ。まさか積もる世間話のためだけに俺を拉致連行したわけではないだろうな？」

「いやあ、偶然見かけたんでつい懐かしく……つて、冗談だ冗談！その“炎”って字消せ危ねえ！」

「……ちつ

「おい、何故そこで舌打ちが入る

そりやもちろん、このにつく変人青年を焼き尽くせなかつたらに決まっている。寝る寸前の人間を拉致るとは言語道断。一度丸焼きにでもなつた方が、この手合いは大人しくなると思うのだがど

うだらつ。

「……と、そんなアホ話はさておき。」の強制連行ってな、実は結構真面目な理由があつたりするわけなんだが

「ほひ？」

「まあ内容としちゃ簡単だ。言ひぜ」

す、と貴斗の口が細くなる。珍しい、本気で真面目な話するときの癖ではないか。

「……今すぐ、この町から出な。何なら魔道士偶で送つてやるぜ」

「また急な話ではないか。理由も言えんのか？」

「言えねえな」

「ふむ」

別にこの町に居座るべき理由とかは特に無い。よつて街を出るだけなら問題も無いが……

「そうだな……旅の連れがこの町の中だ。周囲の街なんぞ知らん。あと眠い。……そこはどうする？」

「周囲の街なら、街道沿いに行きやどつかに着くだろ。テメエが眠いとか正味知つたこつちやねえ。……旅の連れに関しては、ま、縁が無かつたと思え」

「そうか」

さて、恩人の言葉だ。できれば今後の指針に生かしていきたかったのだが。……双羽や夕依、そして朝美。彼ら抜きの一人旅は、まあ嬉しくないし現実的でもないからして。

「……まあ、無理だ。残念ながら貴様の忠告に耳を貸せそうもない」「そうか。そいつあ確かに残念だな。……ま、忠告、つてか“警告”はしといたぜ。せいぜい、頑張りな」

「ふむ……礼を言つべきか？」

「いらね。そんくらいなら、こここの飲みもん代でも払つといてくれ」「金は置いていけ」

「……ちつ、ガメツい奴だな」

渋い顔でボヤきつつも、飲み物一杯分に相当するメインを取り出

す貴斗。テーブルにそれを押しつけ、よつこらせ、と立ち上がる。

「……ま、気だけ張つとけ。それで死にやしねえだろ」

「ククク……重ね重ね、とだけ言つておく。では、な」

最後の台詞には答えず、貴斗は足早に店を出て行く。その目立つウニ頭が見えなくなつて、少ししてから華月も店を出た。メインストリートの、更に増えた人通りが目に痛い。

朝方に到着したこの町も、そろそろ昼時だ。太陽は双方真上に昇り、しつかり大地を暖めている。

「……まずは、集合することから、か」

貴斗の言葉を反芻し、やるべき事柄を組み上げる。

何がが起きるのは間違ひ無いとして、それがどういつた現象か分からぬ以上、集合が第一。次に双羽、夕依、朝美の行きそうな場所は……

……しばらくして、華月の考えは一応のまとめを見せる。しかし、それと遠くから爆発音が鳴り響いたのとは、ほぼ同時であつた。長い、永い、二ティイフキの一日が始まる。

漁業“都市”ニティifik、というだけあって、この街はなかなかに大規模だ。よって、そこには様々な施設が存在する。

メインストリートには喫茶店やら飲食店やらが立ち並び、またその種類も郷土料理からファーストフードちっくなモノまで様々。目立たなかつたが、どうも賭博場と思しき施設があつたりもした。今までの町の標準が“娯楽の場”酒場”であることを考えれば、コレは驚くべきことだ。生活への必要最低限から脱したそれらの要素は、かなり“現代的”と言えるだろう。

とはいえ、まあ実際の生活水準としては、“魔法”の存在が両者の差を大きく縮めている。中世っぽい世界に大抵上下水道が完備されているのも、そんな超常技術のおかげだ。

……してもつて、そんなニティifikの余裕っぷりを象徴する施設へと、たつた今双羽たちは到着したところであつた。

「どう、力ナちゃん？」

「……」

夕依の目の輝く様子が振り向かずとも伝わってくるが、まあそれも致し方ない。今日の前にある施設、これはなんと“図書館”なのである。かなり賑わっているらしく、メインストリートに面したこの入り口は盛大に人でごった返していた。

……しかしまあ、言つてしまえばただの図書館。何驚くことがあらのか、と言いたくなることだろう。だが、覚えているだろうか。この世界には、“立本屋”なる立ち読み専門店が存在するのだ。つまり、“置いてある本を自由に読ませる”ことが商売として成り立つというわけであつて。そんな中、大量の蔵書を無料で公開、また貸し出しまで行つてゐるこの施設。それがどれだけ驚嘆に値するものなのか、理解するのは極簡単な話である。

「ね。やっぱり、力ナちゃん気に入ると思……」

「……双羽、1の刻に」集合ね。それじゃ

「……つたんだけど、ね」

言いたいことだけ言って、そそくさと図書館へ向かう夕依。予想通り気に入つてもらえたのは嬉しいが、何かちょっと悲しかった、なんてことは無いと言えば嘘になる。まあ、彼女にとつて今の双羽と本の重要度比率がそんなものだといつ、ただそれだけの話なわけだが。

「……ん、ちょっと歩こつかな」

どうせここで待つてたつて暇なだけ。料理の本とか漁つてみるのも良いかもしねないが、今はそんな気分ではない。せっかく待ち合わせ時間を指定してくれたことだし、こちらはこちらで少しメインストリート周りを彷徨いてみることにした。

図書館への行き道途中にも思ったことなのだが、どうもこの街、喫茶店が多い。具体的には、喫茶店っぽい雰囲気の店率が高い気がする。軽食食べつつ店内でゆっくりする、そんな感じ。もしかすれば、偶然メインストリートの「」辺りがそうなだけかもしれないけれど。

「……ニイザリス？……えーと、卵料理……なのかな？」

店の前に出されているメニュー表なんかを、端から順繰りに眺めてゆく。中には写真付きのものとかあつたが、この世界にそんなハイテク存在するのだろうか。……いや、実は写真技術って結構歴史古いらしいし、そのくらいあるのかもしれない。

「や、まあ、どーでもいいけどさ」

店を冷やかしながらメインストリートを南下し、ある程度のところで折り返す。道の片側の店を見てきたので、次はその反対側を見てゆくのだ。

そうやって図書館の入り口にまで戻ってきたわけだが。街中央の時計塔を見るに、まだ半刻ほど時間が残っているようだ。さて、どうするか。

図書館に入つてもいいだらう。次はメインストリートを北上して

みるといつのもアリだ。これだけ大きな街、暇を潰す手段などいくらでも……

「グオオオオオツ！！」

突如、響いた雄叫び。咄嗟に周囲を確認しつつ、音の発生源である後方へと目を向ける。

「…………えーと、何かのアトラクション、じゃないよね…………」

立派なたてがみに包まれた、土氣色の獅子。ひとつのお屋ほどもあるうかというそんな物体が、メインストリートのど真ん中に鎮座していた。ついさっきそこを通ったときには影も形も無かったのである。“今、突然”現れたのだろう。

……極普通にそんな想定をするあたり、双羽も大分魔法というものに馴染んできているようだ。

「グオアアアツ！」

「つて、ぽけっと観察してる場合じゃないよね」

早速暴れ始めている獅子。爪が伸びたり火い吹いたりとやりたい放題だ。早くも周囲の建物がいくつか瓦礫へと早変わりしている。やつぱり止めた方がいいだろう。

……が、こんな大衆の目前で筹魔法を使うわけにはいかない、らしい。かといって、どこかへ動こうにもパニックに陥る群衆をかき分けて、となると容易でないだろう。さて、どうする……

「……あれね、この騒ぎの元凶」

「あ、力ナちゃん」

……と、隣にふと現れる夕依。流石の彼女も読書を中断してきたようだ。

「や、でもね、あれだけが元凶ってワケじゃ……」

「…………私の時間を邪魔したのは、アイツなのよね…………？」

「え……つと、力ナちゃん？」

「…………呪術・もつれ足…………」

元気よく暴れていた獅子が、4本もある足をもつれさせ、盛大にすつ転んだ。

「……呪術・強制リバウンド」

そのまま自重で崩壊してゆく。何だか威力が高いような気もあるがどうだろ。アレか、怒りで威力が倍増とかそういうのか。

「……じゃあ、私はもう一回本読んでくるから……」

……して、そもそもと図書館内へ戻ろうとする夕依。

「はい、ストップ」

「んぐ！？」

とりあえずマントのフード持つて止めておく。なんたって、まだ終わってないのだから。

「な……何するのよ双羽！？」

「や、ちょっと待とうね？ そんで耳澄ませてみようか」

「……耳？」

氣をつければ、聞こえてくる。周囲で巻き起る、怒鳴、騒音。よく見れば何力所か薄い土煙も上がっている。

「……これは……」

「今ので全部じゃなかつた、つてことだね。まだあつちひつちで暴れてるみたいだけど、カナちゃんビーする？」

別段この町に思い入れがあるわけではないのだ。今のようにヒーロー役なんてやる義理は無い。戦える人間なんて、こんな世界のこんな街ならまあ少なくない数存在するだろう。

荷物纏めて撤収するだけなら簡単。華月や朝美にしたつて、荷物を置いている宿で待てば合流は容易い。

「ま、逃げるのが一番かな。ここで頑張つたつてしょうがないし……」

「……ゴメン、双羽。私やることあるから……先、行つて？」

……とまあ、ここで逃げの一 手を選択するための理論を組み上げていたワケなのだが。どうも、端からタ依にそんなつもりは微塵も無かつたらしい。説得する間も無く意志を固められてしまった。

予想通りとはいえ、嬉しいものではない。なるたけ、危険に近づいたりはして欲しくないのだけれど。

「……大丈夫、すぐ合流するから……」

「はあ……あのね、カナちゃん。それ、死亡フラグ、つていうんだよ?」

「…………」

「そだよね。アレ、“魔士偶”だつたもんね。そりやまあ、カナちゃんが大人しく撤収するなんて思ってないよ」

「……なんで……」

「見てたら分かるけど?」

華月との合流時に何度か名の出てきた“白河”という人物。そして、その名を聞いた夕依の反応。そこから考えれば、あの小屋の守護者やつてた土人形の関係者であることは自明。で、さつきの獅子はどう見てもそのお仲間だつた、と。

まあ、少々サイズが大きかつた氣もするが。

「ま、目の前で怪獣映画されるのもアレだしねー」

「双羽……」

「街の人たちも大体避難しちゃつたみたいだしむ、さくっと倒しちゃおうよ!」

「……移動は任せたわよ」

「ん、任せましたっ」

右手に隠した箒を通常サイズに変更し、ついでに高度を落とす。夕依が跨つたのを確認し、その前へと勢いよく飛び乗る。肩に、軽く手が掛けられた。

「……んじゃ、行くよーー!」

空高く飛翔し、ざつと周囲を見回す。そう狭くはないこの街の、ほぼ全域が土煙に包まれていた。一力所に1体としても、魔士偶の数は軽く4桁に達するだろう。

頭の隅にそんな思考を回しつつ、もつとも付近より立ち上る戦火の出元へと箒の先を向ける。まずは街を守る戦士役だ。数として意味が無くとも、あの土人形を壊して回ればそのうち到達するはず。十中八九この騒動の中心にいるであろう、“白河”という人物に。

「しつかり掴まつててねー！」

勢いよく、直近の魔土偶の元へ。夕依を気遣いつつも、出せるだけの速度をもって、迫る。

……風切る体の奥に、何か引っかかりを感じる双羽であった。

第卅話 軽快女傑・いにわべのあわせ（前書き）

予約忘れ第一段。氣をつけないと。

第卅話 軽惱女傑・じんわぐのあわせ

今朝方朝美がチンピラ×3に絡まれた裏路地の一角。あれから少々の時を経て、今ここにまた同じメンツが揃っている。丁度、この人気の少ない街角を一回り散策し終えたところだ。

元々朝美は、宿へ戻つて昼食を頂こうかと考えていた。しかし道案内に雇つた（？）3人の薦めで、路地裏の隠れた名店巡りに急遽予定を変更したのだ。……で、コレが正解だった。

名店というのは、何も表立つた場所だけにあるわけではないらしい。半信半疑で入つた看板も無い店での、非常に味わい深い麺料理が。屋根すら崩れた廃屋で焼かれていた魚の、絶妙な焼き加減。これらは是非とも誰かに伝えておきたいことだ。

「や、ホント助かつたわ。こんなところで食道楽できるとは思つてなかつたしねえ。」「苦労さん」

「いやいや、姉さんのためなら火の中水の中」

「……は流石に無理だけど、できうる限りお役に立ちませぶ！」
：イデエ

「慣れない敬語なんて使うからそこで舌噛むんだよ、お前は」「にしても一々面白いわねえ、アンタたちって」

……んでもつて、気が付けばチンピラたちがやたらとフレンドリーになつてたり。つい一刻ほど前に殴り合いしてた相手とは思えない。

考えるに、どうにも朝美にはこいつた手合いで好かれる才があるらしい。なんせ、しばらく行動を共にした間にこの様だ。思い起これば、アーサミー盗賊団のメンバーとの同行直後もこんな感じだった氣がする。

「それで、姉さんはもう帰るんだよな」

「姉さん、なんて呼び方までキレイに同じ。何だろ？、そういうたガイドラインとかもあるのだろうか。

「まあ、ちょっと長く空けてたからねえ。そろそろ連れも帰つてくるだろ?」

「連れ? なんだ、姉さん一人旅じゃなかつたのか?」

「んな強いから、てつきり武者修行の旅か何かかと……」

「武者修行で、アンタねえ。まあ昔はしてたことあつたけど」

「「「やつぱり」「」」

「なんでそこでハモるのよ」

そんなにこう、戦闘狂っぽい雰囲気とか醸し出していくだろ? わりかし心外である。

「いや、だつて姉さん喧嘩強いから」

「どうすりや、んなに強くなれるのさ?」

「どうもこうも、ねえ」

実際、気が付けばこんな感じなのである。まあ幼少から格闘技とかしてはいたが、それはあくまで親の都合。別段深い理由とかそんなのがあつたわけではない。

大体、自分なんかより遙かに凶悪な人物を何人も知つている身としては……

「……あれ。何だ、あの……アレは?」

「あ? 何言つてんだお前は?」

丁度道の交わるこの場所の、メインストリートに近い東側。そちらを向いたまま、チンピラの一人が首を傾げた。朝美含めたの3人には何のこっちゃだが、さて、その傾げられた顔色がガンガン悪化していくのはどうしたものか。

とりあえず、口クなモノが見えているわけでは無さそうだ。

「何だよ、あの建物の上? 一体何が……つて、え」

「ん、どうし……た……」

次々と3人とも固まつてゆく。朝美は彼らと向き合つていたため、その視線方向へは背を向けている形。もちろん何も見えない。が、先から微かな振動を感じてはいる。多分その正体が、今後ろに。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか、と」

ゆつくりと、体ごと後ろを振り返る。……そこには、何というか、鬼がいた。

建物のわきからちらと見えた、虎ガラパンツに赤い体。モジヤモジヤの髪と、頭に生えた役に立ちそろもない²本の角。一般的日本人に“鬼”といふ言葉を連想させれば、まあ大体あんなイメージに辿り着くだろう。

ただし、それにしても少々大きい。少し崩れた3階建ての廃屋より高い位置に頭があるので、歩く度、軽い振動が地を揺らす。まるでちょっとした怪獣映画ではないか。

「や、ホントに“鬼”だとは」

「ちょ、姐さん、アレが何か知ってるのか！？」

「いやいや、似たようなのを知ってるだけよ。って、まあそれよりぐるり、と。建物の陰より全貌を現した鬼が、こちらを振り向く。その目に意思は無く、しかし何となく目的だけが浮かんで見えた。
……曰く、敵は潰す、と。

「……！」

「来るわねえ」

「ぐ、来るつて……うわ！？」

「走つてきやがつた！ しかも速ええ！」

案の定右手に握られていた金棒を振り上げ、しかし無言のままこちらへ突進して来る赤鬼。こういつたパワータイプ相手には、まず初撃を巧く流すのが定石だが……

「ちょ、ちょっと待て、なんでこっちに！」

「うわ、わわわわ！」

……背後には、どーも荒事に向いて無さそうな男共が。一時といえ世話になつたこのチンピラたちを、そう無碍にするのは朝美の良識が許さない。

「さて、と」

ならば、仕方無い。最善でなくとも、まだ手はある。

敢えて右足を前に出し、左手を地に付き右手は腰溜めに。ぐ、と

体重を落として重心を安定させ、次に右足へと荷重を掛ける。そのまま体を右に捻り、右足、腰、肩、右手と連なる線を意識し……

「あつ、まづい、姐わ……」

「せえいやつ……」

左足を前に踏み込みつつ、体を捻つておいた反動で右手を前へ。同時して、拳周囲に斬撃魔法を展開。蒼い流星の如き渾身の突きは、大質量に任せて振り抜かれた金棒を軽く押し戻した。

「……！？」

「ふう。ま、こんなもんねえ」

「……やべえ。俺らこんな人相手に喧嘩売つたんだな」

「もしかして、今生きてるのって割と奇跡？」

後ろで失礼なことのたまつてる奴らはおいておいて。得物を叩き返され、どうにも『機嫌ナナメな赤鬼の目をぐつと見据える。まだやる気は存分にあるようだ。

「アンタたち、早くどつか行きなさい」

「え、でも、姐さん置いて……」

「邪魔だ、つて言つてるのよ」

「……つ。よし、逃げるぞ！」

「くつそ、男としてコレはどうかと思つんだが！」

「しょうがないだろ、姐さん俺たちの数十倍強いみたいだしな！」

こちらの意を汲み、全力で逃げ去る3人。あれだけ喋つて、よく舌噛まずに走れるものだ。

「」苦労さん、と

ふと見れば、赤鬼の視線があちらを追つている。どうもより多人数に反応しているらしい。ああ言つた手前、こちらへ引きつけておくのが礼儀だろう。

「アンタの相手は、アタシのはずだけど。無視してんじゃないわよ

「……！？」

氣迫に反応し、赤鬼はこちらに向き直る。

その動作を油断無く注視しつつも、朝美の五感はこの街全体に広がる喧噪を捉えていた。どうやらこの怪物騒ぎ、ここだけで完結するものではないらしい。

「まあ、とりあえずコイツ潰して、と。色々考えるのはそれからねえ」

朝美の体全体を、淡く青白い揺らめきが包み込む。先の迎撃は“碎く”つもりで放った。それが“押し戻す”効果となつたことより考るに、どうやらこの鬼、相当に頑丈な相手らしい。ならば、こちらもそれなりの攻撃力でもつて応戦するべし。

「……！」

「行くわよ？」

路地裏の一角にて。大質量と破壊の閃光が激しく交錯した。

とある建物の屋根の上。街の騒ぎから一段離れたこの場所に、ツンツンヘアーと黒マントを風になびかせる男が独りいた。……この事件の首謀者、白河、貴斗である。

「おいおい、“赤鬼”がやられた！？ んな強いヤツもいるのかよ、この街は……」

町中の喧噪を聞きつつ、彼は感覚に伝わる魔土偶たちの情報を整理していた。今までに破壊されたのは5体ほど。内ふたつはちょっとした知り合いの手による所行だ。

「……ちつ、3体目、か。流石にペース早すぎんじゃねえのか、おい」

虎型魔土偶からの交信が、たつた今途絶した。直前に交戦していたのは、件の知り合い“夕依”とその連れだ。

彼女も貴斗の知る頃より腕を上げているようだし、何よりあの連が不気味でしようがない。筹魔法の機動性から察するに、あの少年も来訪者なのだろうが……

「ちつ、予定変更だな。なるだけ早く時計塔で待機する予定だったが……あいつらから先に潰すか」

立ち上がり、今現在夕依たちのいると思しき方角を見る。

……少し、躊躇いの情を感じた。腐つても知り合い、直接やり合うのは避けていたのだ。

「……やっぱり手は出せねえよな……。仕方ねえ、あの手でいく

か」

渋々、ある魔法を準備する。これは相手を選ぶため、使えない可能性も大きい。もし使えないれば知人との直接対決となるわけだが、それはそれでいいとも思った。彼だって、できればこんなことはしたくないのである。

「迷つても進まねえ……行くぜ！」

他を切り、決意を胸に、黒衣の男は地を蹴るのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8206v/>

剣と魔法と世界と纂【改】

2011年11月30日18時54分発行